

CENTER FOR
SOUTHEAST ASIAN
STUDIES
KYOTO UNIVERSITY



**京都大学
東南アジア研究センター要覧**

平成14年度

民主化に向かうインドネシアの風景

スハルト大統領の1998年5月の退陣は、インドネシア社会に大きな変化をもたらした。その一つが結社の自由の確立で、多数の政党、労働組合、協同組合などが労働者や住民によって結成された(写真3, 5)。それらは各地で活発な活動を行っている。写真1で示した1999年6月の総選挙は、事前の不安とは裏腹に騒乱などおこらず、自由にまた民主的に実施された。

スハルト退陣の直接の原因になった通貨危機や経済危機は、多くの失業者を生み出したが、一方、これを機に活発化したビジネスも多かった。これは、通貨危機とともに巨額の負債を抱えるにいたった大企業ではなく、もともと銀行や外国資金に頼っていなかった中小零細企業や住民が担ったものである。その一例が東マレーシアとの国境沿いの町で行われる国境貿易である。ここでは国境は誰でも自由に行き来でき、通貨価値の差を利用した国境貿易が住民の手により活発に行われている(写真6, 7)。

他方、スハルト退陣前より地域紛争が広がり、多くの犠牲者が出ているのも事実である。写真8は、1997年カリマンタンで住民により焼かれたマドゥーラ人の家。

民主化に向かうインドネシアの風景



写真1 1999年6月の総選挙で、闘争民主党的選挙運動に参加する人たち



写真2 1999年6月の総選挙に参加した諸政党のシンボルマーク（右）と、国民信託党の選挙運動（左）



写真3 シナール・マタハリ社労働組合のストライキ風景（2001年11月）



写真4 2001年5月1日のメーデー（ジャカルタ独立広場）。スハルト大統領退陣後、インドネシアでは32年ぶり



写真5 西ジャワ州チアンジュール県の商人がリーダーを務める協同組合の売店



写真6 西カリマンタン州サンバース県パロ郡タマジョと東マレーシア・サラワク州との国境。自由に行き来できる。



写真7 西カリマンタン州サンバースの町で、国境貿易のために集荷されたブテ



写真8 西カリマンタン州サンバースのマドゥーラ人の家の焼跡



写真9 2002年2月初め大洪水に見舞われ、床上まで水につかる労働者住宅。スハルト体制下の乱開発、ジャカルタ知事やメガワティ大統領の対応の遅れなどが批判された。



写真10 ジャカルタのデパート前の歩道橋で食事をする子ども(2002年5月)。スハルト体制下でも、また今日も多数見かけるストリートチルドレン

ま え が き

1965年の官制化当時、わずか1つの研究部門で出発した京都大学東南アジア研究センターは、その後、順調に研究部門の拡充を重ね、東南アジアの総合的地域研究を推進する全国でも屈指の地域研究機関として発展してきました。その間、幾度かの機構改革を重ねましたが、2001年度からは、従来の5部門制を改組し、関連する諸分野を統合した「人間生態相関」「社会文化相関」「政治経済相関」と、研究管理を担当しつつ研究分野や対象地域を横断的に俯瞰する「地域相関動態」の4つの研究部門からなる地域研究機関として新たな一步を踏み出しています。官制化以来すでに35有余年を経ましたが、この間、東南アジアに関わる膨大な文献資料・画像資料を収集するとともに、内外の地域研究機関との提携のもと多数の共同研究を実施して、わが国における先導的な地域研究の中核的研究拠点としての役割を果たしてきました。

教育面では、1998年に京都大学に設置された大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の協力講座メンバーあるいは授業担当というかたちで所員全員が同研究科との密接な協力を進めています。それ以前から協力していた大学院農学研究科の熱帯農学専攻や大学院人間・環境学研究科の文化・地域環境学専攻に所属する大学院生も含めて、地域研究を教育することがセンターの新たな役割として比重を増しつつあります。

京都大学に設置されて以来すでに35年余りが経ち、いま、センターはこれまで以上に大きな激動と変化の時代に突入していくものと予想されます。第一世代とも言える研究者がセンターを去り、第二、第三世代がこれからのセンターの研究・教育活動を担っていくこととなります。そして、世界が大きく変動しているなか、地域研究に対する今日的な要望はさらに高まっています。センターの伝統でもあるフィールドワークに基づく地域理解の手法を堅持しながら、どう、その要望にこたえていくのか。責任の重大さを感じているところです。名実ともに、地域研究の中核的研究拠点にふさわしい研究機関となるよう、一層の努力を所員一同とともに務めていく所存です。

本要覧は、東南アジア研究センターの設立以来の経過と現在の研究活動を紹介するために編まれたものです。あわせて、研究スタッフの紹介と出版物の目録も収めています。和文と英文の要覧を毎年交互に発行しますので、本要覧は平成12年度版に続く発行となります。本要覧を通じて東南アジア研究センターの活動にご理解をいただきますとともに、いっそうのご支援・ご指導をたまわりますようお願い申し上げます。

平成14年8月1日

京都大学東南アジア研究センター
所 長 田 中 耕 司

目 次

第1章	性格と沿革	1
第2章	機構と組織	5
	1. 機構	
	2. 協議員	
	3. 職員	
	4. 学内研究担当教官	
	5. 学外研究協力者	
第3章	研究活動	10
	1. 調査・研究	
	2. 国際交流	
	3. シンポジウム・セミナーなど	
	4. コロキアム	
	5. その他の研究会	
	6. 東南アジアセミナー	
第4章	資料収集および情報処理	35
	1. 現地語資料	
	2. マイクロフォーム	
	3. 雑誌	
	4. 統計	
	5. 地図	
	6. 人工衛星画像データ	
	7. 情報処理	
第5章	研究支援活動	38
	1. 海外連絡事務所	
	2. 自己点検・評価	
	3. 広報	
	4. 日本財団アジア・フェロシップ	
第6章	大学院教育	41
第7章	研究スタッフ	43
第8章	出版活動	76
	1. 研究叢書等	
	2. 『東南アジア研究』(38巻3号から39巻4号まで)	
	3. 研究報告書シリーズ	
	4. <i>Kyoto Review of Southeast Asia</i>	

第1章 性格と沿革

京都大学東南アジア研究センターは、東南アジアおよびその周辺諸国を総合的に研究することを目的として設立された特色ある研究機関である。東南アジアとは、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ビルマ（ミャンマー）、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ブルネイの10カ国をさすが、研究の対象としては、厳密にこの範囲に限定しているわけではない。仏教の研究のためスリランカを含め、熱帯稲作の研究のためバングラデシュ、インド、中国にまで視野をひろげ、対外経済活動の研究のためには香港、台湾、韓国をも対象としたこともある。周辺諸国というのは、この意味である。

センターの研究活動は、自然科学をも含む点において、人文科学とくに人類学と政治学を中心とする欧米の地域研究とは異なる特色をもっている。自然環境の現状と変遷の過程を視野に入れて変動する地域を総合的に捉えるということが第一義的な目標であるが、それと同時に、関連学問分野を包括的な視野の下に収め、新しい問題群に取り組み、既成の学問分野を越えた新しい知の枠組みを作り上げることも重要な課題である。しかしながら、総合的といっても、基本的には地域の内在的理解が先行すべきで、そのためには微視的な分析・解析的な研究の積み重ねが必要であることは当然である。一方、グローバリゼーションの渦中に東南アジアが巻き込まれたことから、地域間比較と俯瞰的・総合的研究を通じた東南アジアの全体像解明の必要性が高まっているのも事実である。

現在、一般的に広く地域研究と称されるもののみが、本センターの追究する総合的・包括的地域研究ではない。本センターの中でも、総合的地域研究の手法が確立しているわけではなく、いろいろなアプローチを比較・検討しながら、世界に類を見ない地域研究の確立に鋭意努力している。当面の目標は、今や日本で緊急に必要とされている地域研究のあるべき姿を、将来への展望を含みつつ早急に確定し、範型として世に示すことである。1993年度から1996年度まで実施された文部省重点領域研究「総合的地域研究の手法確立——世界と地域の共存のパラダイムを求めて」がその一つの試みであった。また1998年度から始まった文部科学省中核的研究拠点（COE）形成基礎研究「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」によって、センターひいては日本の東南アジア研究、地域研究のさらに新たな展望を開くべく努力を重ね、本年度がこの研究の最終年度である。

近隣のアジア諸国とわが国との学術文化の交流が深まるにつれて、センターが地域研究の中心として果たすべき役割への期待はいよいよ高まりつつある。その要請にこたえるため、センターは東南アジア諸国の学者・文化人はもちろん、東南アジア研究に関心をもつ世界の学者との不断の交流につとめている。そして同時に東南アジアに関する文献資料・学問的情報を収集し、それらをひろく内外の学者に利用してもらえるような態勢を整備しつつある。学問研究の国際交流は、これからの日本にとって大きな課題であるが、とくに近隣の東南アジア諸国の基礎的研究を

実施しているセンターは、こうした面でもつねにその先達としての努力を傾ける必要がある。

東南アジア研究センターが、京都大学に正式に設置されたのは、1965年のことである。それより以前、1963年1月には、本学に学内措置として「東南アジア研究センター」が設けられた。学内措置として創設された当時は、もっぱら民間からの寄付金とフォード財団からの研究奨励金を委任経理金として受け入れ、それによって多数の本学教官を東南アジア各地の現地調査に派遣した。その研究活動の中心は、タイ計画とマレーシア計画という2つの総合調査であった。それは人類学者による村落定着調査から、農学者による熱帯稲作の諸条件の研究に至るまで、極めて多岐にわたったが、常に現地に密着し、現地の研究者と共同して研究を進めるという態度を失わないように留意してきた。このため当初よりバンコクに連絡事務所を置き、政府機関・大学・研究者との交渉、連絡に当たらせてきた。これらの研究の成果は、1963年に創刊された『東南アジア研究』に次々と発表され、内外の学者の注目を浴びるに至った。

この成果に対する評価は、センターが1965年4月に国立学校設置法施行規則の改正による全国で初めての「研究センター」として、京都大学の正式の研究機関と認められたことによって確定したと言えよう。それより逐年研究部門の増加を認められ、1988年度までに9研究部門、3客員部門からなる研究機関に成長した。とくにこの客員部門のうち、地域研究第一（外国人客員）研究部門は、東南アジアからの研究者をセンターの客員研究員として迎えるもので、この種の国際交流のための部門の設置は全国で最初の試みであった。1989年度には研究部門の大幅な編成替えが実施され、9研究部門は生態環境、社会生態、統合環境、地域発展、人間環境の5つの大部門14分野に統合された。

そして、2001年4月より上記の5部門14分野を「人間生態相関」「社会文化相関」「政治経済相関」の3研究部門に統合すると同時に、東南アジアの全体像の把握をめざす研究分野（「地域連関システム」）を含む新たな研究部門「地域相関動態」を設けた。これは、専門細分化しすぎたこれまでの研究組織の統合を推進するとともに、従来の総合的地域研究を超えた、地域間比較と俯瞰的・総合的研究を通じて東南アジアの全体像の把握を目指す新たな分野の設置を図ったものであった。また、インターネットの普及を中心として最近急速に進行している情報化・国際化の波は、東南アジアや欧米における東南アジア地域研究の興隆と相まって、それに対する研究支援組織を含めたセンターの迅速で積極的な対応を要請している。これに応えるため、センターは、上記の「地域相関動態」研究部門にもう一つの研究分野「地域情報システム」を設けた。

東南アジアの地域研究を任務とする性格上、長期、短期の臨地研究が必須とされる。臨地研究を核に、センターにおいては各種の学際的な共同研究が組織されているのが特徴である。研究活動の活性化を図るために、5年ごとにセンターとしての研究テーマの見直しを行い、それに基づいて研究班を組織してきた。1980年度には、「東南アジア世界の形成過程に関する総合的研究」が組織され、熱帯モンスーン・エコシステム班と小型家産制国家班とが編成された。1985年度の「東南アジア世界の成立と展開に関する文明論的総合研究」では、外文明と内世界、文明と国家形成、文明と生態環境、文明と経済環境の4班が組織された。1990年度には、「東南アジア世界の固

有論理と発展構造に関する総合的研究」が発足し、歴史構造、自然生態、社会組織、地域統合にかかわる4班が研究を進めた。

これらの5カ年計画の蓄積をうけて、1993年度～96年度に、文部省重点領域研究「総合的地域研究の手法確立——世界と地域の共存のパラダイムを求めて」の共同研究が、全国の地域研究者の参加を得て実施された。さらに、1998年度から大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とともに、文部科学省科学研究費COE形成基礎研究「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」の共同研究が開始された。従来から実施されてきた個々の研究者による共同研究は、いまも継続的に組織されているが、一方で、この2つのプロジェクトが示すように、地域研究の中核組織としての役割をはたすべく、センターはこれまでにない大規模な共同研究を推進するようになってきている。これに対応する臨地研究は科学研究費補助金「基盤研究」によって、毎年2ないし3班の研究班を海外に出している。

また日本学術振興会の拠点大学方式による日本・タイ学術交流事業が、日本側はセンター、タイ側はタマサート大学を拠点校として1986年に発足した。日本とタイの研究者の研究交流推進を目的として始まったこの事業は、タイのみならず東南アジアの研究者による東南アジア研究へと軌道修正しつつ展開されてきたが、1998年に13年間の交流に一応の区切りをつけた。1999年度からは、タイ側の拠点校にチュラロンコン大学を加え、プロジェクト中心の交流として新規にスタートした。

東南アジア研究センターにおけるさまざまな研究活動の成果は、センターが刊行する出版物を通じて発表されている。センターは、1963年以来東南アジア地域研究の季刊学術誌『東南アジア研究』を出版しており、現在39巻4号に及んでいる。『東南アジア研究』は、内外の大学その他の研究機関と交換しているばかりでなく、財団法人アジア研究協会に委託して、一般購読の道をひらいている。

またセンターは、東南アジア地域研究の発展に寄与するオリジナルな学術研究の発表の場として、東南アジア研究叢書（和文、英文）、地域研究叢書（和文、英文）を刊行している。これまで、東南アジア研究叢書（和文、創文社刊）は24冊、同（英文、University of Hawai'i Press刊）は20冊、地域研究叢書（和文、京都大学学術出版会刊）は13冊、同（英文、Kyoto University Press; Trans Pacific Press刊）は3冊を刊行してきた。さらに、2002年3月より上記COE研究成果普及の一環として、和英他東南アジア諸言語によるインターネットジャーナル *Kyoto Review of Southeast Asia* を立ち上げるに至った。

1969年に「バンコク連絡事務所」の運営経費が、次いで1973年に「ジャカルタ連絡事務所」の運営経費も国の予算として認められるとともに、現地調査費も国の予算で認められ、ようやく当センターの現地調査を計画的に推進する最小限の基礎が与えられるようになった。それ以来センターでは、この予算を活用して、大学内の「研究担当教官」による東南アジア研究をわずかながらも支援できるようになった。また1978年度から「非常勤講師経費」が認められ、さらに1980年度には地域研究第二（客員）研究部門が設けられたことにより、「学外研究協力者」が積極的に研

究参加できる機会を提供できるようになった。また、1986年度には新たな客員部門として、東南アジア諸語文献研究部門が新設された。近年、東南アジア各国の図書資料が精力的に収集されているが、この部門新設によってそれらの整理方法の確立、資料情報の一層の収集のために、東南アジア各国から書誌学者、カタログラーを招くことが可能となった。2001年4月の組織再編成で生まれた「地域情報システム」研究分野は、空間・画像情報や多言語情報の処理を担当するとともに、資料部の強化、客員研究員の拡充、海外連絡事務所の機能強化を図ることをめざしている。

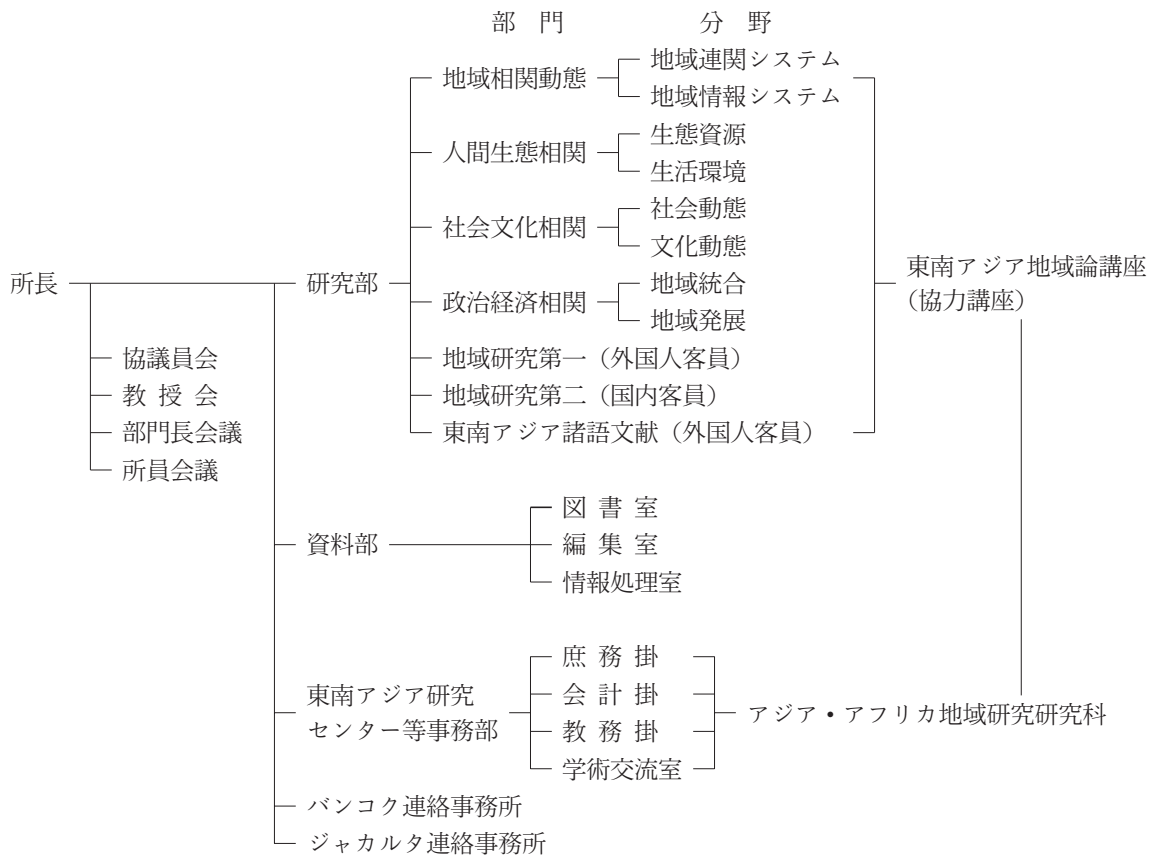
センターの大学院教育としては、1981年に農学研究科熱帯農学専攻が設置され、農学系の教官が協力講座を担当したのが最初である。その後1993年度に人間・環境学研究科の第二専攻（文化・地域環境学専攻）が発足するとともに、センターの教授・助教授ほぼ全員が東南アジア地域研究講座（協力講座）担当として参画してきた。1998年4月、アジア・アフリカ地域研究研究科が発足した。この研究科は、東南アジア地域研究専攻とアフリカ地域研究専攻の2専攻から構成されるが、前者の中に連環地域論講座を置き、東南アジアとアフリカの両地域に接続するヒンドゥ・イスラーム両世界をも含めて、地域間比較を視野に入れた地域研究教育に主眼を置いている。この設立にともなって、センターは大学院教育の場をこの研究科に移すこととなった。現在、ほぼ全教官が東南アジア地域研究専攻の東南アジア地域論講座（協力講座）担当、あるいは2専攻の共通課目担当として大学院教育に参画している。

第2章 機構と組織

1. 機構

2002年度現在、東南アジア研究センターは、4研究部門、3客員研究部門からなる研究部、および資料部、事務部で構成され、東南アジア地域の現地調査を円滑に行うための海外連絡事務所として、タイにバンコク連絡事務所を、インドネシアにジャカルタ連絡事務所を設置している。また、本センターの議決機関・協議機関として、協議員会、教授会、部門長会議、所員会議が設けられている。

1998年4月、アジア・アフリカ地域研究研究科設置に伴い、センター教官のほぼ全員が東南アジア地域論講座（協力講座）あるいは研究科共通課目を担当することになった。事務部は東南アジア研究センター等事務部と名称が変わり、東南アジア研究センターとアジア・アフリカ地域研究研究科の事務を併せて受けもつことになった。事務部は庶務・会計・教務の3掛に分かれ、さらに内部組織として学術交流室を設置し、それぞれ業務を担当している。



2. 協 議 員

協議員会は、センターの運営に関する最高議決機関であり、センターの所長、全教授および助教授1名、ならびにセンター所長が委嘱した関係部局の教授・助教授7名によって構成されている。

3. 職 員

センターの職員は、(1)研究部、(2)資料部(図書室、編集室、情報処理室)、および(3)事務部に所属する職員からなる。2002年8月1日現在の職員は次のとおりである。

所 長 教 授 田 中 耕 司
副所長 教 授 山 田 勇
教 授 阿 部 茂 行

(1) 研 究 部

地域相関動態研究部門

教 授	山 田 勇	熱帯生態学
教 授	阿 部 茂 行	経済学
助 教 授	五十嵐 忠 孝	人類生態学
助 手	宋 現 鋒 <small>ソン ジェン フェン</small>	リモートセンシング, 地理情報システム
非常勤研究員	藤 田 渡	文化人類学
非常勤研究員	大 西 信 弘	動物社会学, 進化生物学
学振特別研究員	平 田 昌 弘	牧野生態学
教務補佐員	見 市 建	政治学
教務補佐員	加 藤 剛	森林生態学, 造林学
外国人研究員	Neil L. JAMIESON <small>ニール ジェーミソン</small>	人類学

人間生態相関研究部門

教 授	田 中 耕 司	熱帯農学, 熱帯環境利用論
教 授	西 沢 光 昭	病原細菌学
教 授	松 林 公 蔵	老年医学, 神経内科学, フィールド医学
教 授	A. Terry RAMBO <small>テリー ランボー</small>	人類生態学
助 教 授	安 藤 和 雄	熱帯農学, 農村生態
助 教 授	河 野 泰 之	自然資源管理
助 手	柳 澤 雅 之	熱帯農業生態学
学振特別研究員	Donald Manaytay UGSANG <small>ドナルド マナイタイ ウーサン</small>	リモートセンシング・GIS
外国人研究員	TRAN Duc Vien <small>チャン ドック ヴィエン</small>	農業生態学

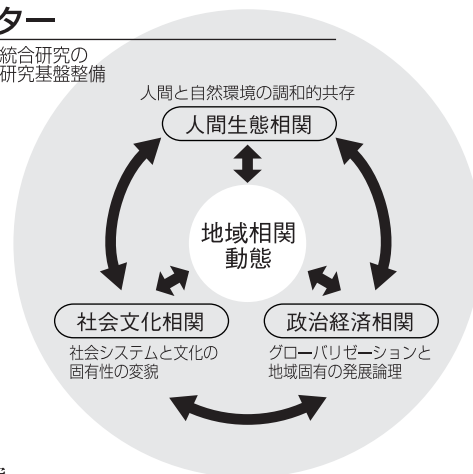
助教授（客員）	阿 部 健 一	熱帯生態学
研究支援推進員	竹 田 陽 子	
社会文化相関研究部門		
教 授	濱 下 武 志	アジア地域研究
助 教 授	林 行 夫	文化人類学, 宗教社会学
助 教 授	石 川 登	マレーシア・インドネシア地域研究, 社会人類学
助 教 授	カローライン シィ ハウ Caroline Sy HAU	カルチュラル・スタディーズ
助 教 授	速 水 洋 子	文化人類学, 東南アジア地域研究
学振特別研究員	濱 元 聡 子	東南アジア地域研究, 文化人類学
外国人研究員	アルーンラット ウィチエンケーオ Aroonrut WICHIENTKEEO	歴史学
外国人研究員	チャールズ マクドナルド Charles MACDONALD	社会人類学
外国人研究員	ツ ユン ホイ ティモシィ Tsu Yun Hui Timothy	歴史学
教授（客員）	青 山 亨	インドネシア古代史, ミクロネシア島嶼 社会研究

政治経済相関研究部門

教 授	海 田 能 宏	農村開発論, 熱帯農業水文学, 開発技術論
教 授	白 石 隆	歴史学, 比較政治史
助 教 授	水 野 広 祐	経済発展論, 農業経済学, 労働経済学
助 教 授	藤 田 幸 一	農業経済学
助 教 授	パトリシオ アビナウレス Patricio N. ABINALES	歴史学, 比較政治学
外国人研究員	リゴベルト ディキット ティグラオ Rigoberto Dikit TIGLAO	メディア論

東南アジア研究センター

地域間比較の導入による俯瞰的・統合研究の
推進と情報化・国際化に対応した研究基盤整備



客員研究部門

地域研究第一研究部門

外国人客員研究者による東南アジア研究

地域研究第二研究部門

国内客員研究者による東南アジア研究

東南アジア諸語文献研究部門

外国人客員研究者による現地語文献資料・情報の研究

(研究部連絡室)

事務補佐員 河合友子
事務補佐員 首藤晶子

(研究室)

事務補佐員 成田朋子
事務補佐員 林晃子
事務補佐員 前野尚子
事務補佐員 木下秀美
事務補佐員 石川崇志
事務補佐員 杉山真理
事務補佐員 伊藤嘉浩

(2) 資料部

(図書室)

助 手	北村由美	図書館情報学
外国人研究員	<small>マリア ギンティン</small> Maria GINTING	図書館学
事務補佐員	小室静子	
事務補佐員	谷口靖子	
事務補佐員	古田保子	
事務補佐員	山田尚代	
事務補佐員	塩津哲子	
事務補佐員	金城まりえ	

(編集室)

助 手	米沢真理子	
教務補佐員	<small>ドンナ アモロソ</small> Donna J. AMOROSO	歴史学
事務補佐員	小林純子	
事務補佐員	大熊知美	

(情報処理室)

助 手	木谷公哉	形状処理工学
事務補佐員	奥西久美	

(3) 事務部

事務長		事務官	福本 穂
専門員		事務官	上村 昭男
庶務掛	掛長	事務官	白波瀬 昌廣
	主任	事務官	南 雲 円
		事務官	神 徳 智 恵 (学術交流室勤務)
		事務補佐員	藤 井 舞 (学術交流室勤務)
		事務補佐員	中 西 亜衣子
		事務補佐員	大 高 登代子
		事務補佐員	深 原 優 子
		臨時用務員	岩 本 照 子
会計掛	掛長	事務官	美 馬 敏 男
	主任	事務官	岡 崎 道 子
	主任	事務官	岩 手 利 之
	主任	事務官	高 田 早津紀
		事務補佐員	石 田 祥 子
		事務補佐員	中 川 賢 子
		事務補佐員	西 尾 雅 美
教務掛	掛長	事務官	津 知 哲 夫
	主任	事務官	潮 崎 晴 彦

4. 学内研究担当教官

当センターは、東南アジア研究に関心をもつ学内各部署の教官に、研究担当教官として参加を委嘱している。2002年度において、これらの研究担当教官は176名を数える。

5. 学外研究協力者

当センターは、総合的に地域研究を実施するため、東南アジア地域の研究に関心をもつ全国各地の大学・研究機関等の研究者に、研究協力を仰いでいる。2002年度において、これらの研究協力者は258名を数える。

第3章 研究活動

1. 調査・研究

(1) 共同研究

センターの調査・研究活動は個別研究と共同研究に大別されるが、共同研究のうち、センターの大部分のスタッフの関与するものは、センター研究計画（プロジェクト）として推進されてきた。センタープロジェクトは、5カ年を単位として設けられる共通のテーマのもとに、所員が任意の研究グループをつくり、科学研究費補助金「国際学術研究」などを通じて臨地研究を共同で行うものである。

1980年度から1984年度までの5カ年計画として、「東南アジア世界の形成過程に関する総合的研究」というテーマのもとに、このセンタープロジェクトが遂行され、「熱帯モンスーン・エコシステムにおける農業の発展と地域間交渉の展開」と「小型家産制国家の社会基盤と経済発展」の2つの研究班が編成された。1985年度から、第2次5カ年計画として「東南アジア世界の成立と展開に関する文明論的総合研究」が進められ、「外文明と内世界」「文明と国家形成」「文明と生態環境」「文明と経済環境」の4つの研究班が組織された。1990年度からは、第3次5カ年計画として「東南アジア世界の固有論理と発展構造に関する研究」が進められ、「東南アジア世界の成立と歴史構造」「東南アジアの自然生態と発展形態」「東南アジアの人間環境と社会組織」「東南アジアの文化環境と地域統合」の4つのクラスターが研究班の役割を担って組織された。以上の5カ年計画のテーマに沿っていくつもの個別的な共同研究が文部省科学研究費補助金（海外学術調査／国際学術研究）あるいはその他の機関の援助を得て実施された。

5カ年計画を背景に、1993年度から4カ年のプロジェクトとして、文部省重点領域研究「総合的地域研究の手法確立——世界と地域の共存のパラダイムを求めて」が発足した。全国の地域研究者の参加を得て先端的な地域研究をめざす「地域と生態環境」「地域性の形成論理」「地域発展の固有論理」の3計画研究班、および地域研究の手法確立を探る「外文明と内世界」「地域連関の論理」「総合的地域研究の概念」の3つの計画研究班が組織され、多数の公募研究班とともに、総合的地域研究の手法確立のための共同研究が進められた。同研究は、社会科学としては極めて大型の共同研究で、東南アジア地域研究の専門家約150名が、地域と生態環境、地域性の形成論理、地域発展の固有論理、外文明と内世界、地域連関の論理、総合的地域研究の概念の6クラスターにわたって計画研究班および公募研究班を構成し、それらを総括班が結び合わせる、という構造のもとに進められた。

本共同研究の成果は、以下のように結実している。参加者の情報交換メディアとしてのニューズレター49号、季刊誌『総合的地域研究』が創刊準備号を入れて第16号までの計17冊、成果報告書シリーズが36冊、総括班主催の研究集会やシンポジウムが合計10回、内1回は“Intern-

tional Symposium Southeast Asia: Global Area Studies for the 21st Century” と題する国際シンポジウムであった。さらに、各研究班が開催した研究会やワークショップは合計約 100 回に及び、各班から事務局に報告された関連ペーパーは約 1,000 編にも及んだ。総括班と各研究班による最終報告書としては、現在までに『〈地域間研究〉の試み——世界の中で地域をとらえる(上・下)』『〈総合的地域研究〉を求めて——東南アジア像を手がかりに』『地域形成の論理』『地域発展の固有論理』が京都大学学術出版会から刊行されている。

この重点領域研究で得られた成果をさらに発展させるために、1998 年度から新たな 5 カ年計画が進行中である。文部科学省中核的研究拠点 (COE) 形成基礎研究「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」がそれで、新たに設置された大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とともに、地域研究の中核的拠点の形成を目指している。この計画では、東南アジア、南・西アジア、アフリカをそれぞれ対象とする 3 つの研究クラスターが編成され、センターに計画全体を統括する事務局が置かれている。地域研究における中核的な役割をセンターが構造的にも担い、「地域とはなにか」の理解に向けたトータルかつダイナミックな研究視角を提出するため、新たな一歩を進めようとしている。

また日本学術振興会の拠点大学方式による日本・タイ学術交流事業が、日本側はセンター、タイ側はタマサート大学を拠点校として 1986 年に発足した。日本とタイの研究者の研究交流推進を目的として始まったこの事業は、タイのみならず東南アジアの研究者による東南アジア研究へと軌道修正しつつ展開されてきたが、1998 年に 13 年間の交流に一応の区切りをつけた。1999 年度からは、タイ側の拠点校にチュラロンコン大学を加え、プロジェクト中心の交流として新規にスタートした。

COE や拠点大学の大型プロジェクト以外に、科学研究費補助金による調査研究は 2002 年現在で 7 件が進行中である。そのうちわけは基盤研究 (A) (2) では「ウォーラセア海域における生活世界と境界管理の動態的研究」(研究代表者：パトリシオ・アビナウレス)、「東南アジアにおけるセーフティ・ネットの比較研究——『古い』の問題を中心に」(同：A. テリー・ランボー)、「環ヒマラヤ広域圏における社会と生産資源変容の地域間比較研究」(同：山田勇)、「アジア地域の新興腸管感染症の分子疫学的研究」(同：西淵光昭)がある。さらに、基盤研究 (B) (1) では、「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」(同：阿部茂行)、「インドネシアの民主化における地方政治の変容」(同：水野広祐)、「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」(同：安藤和雄)がある。

上記の共同研究は、現地調査を中心として行われること、学際的なチームメンバーを組んで行われること、東南アジア地域およびその他の外国人研究者の参加を得て行われることを特色としている。本年度までに出版された研究成果の一部は、第 8 章「出版活動」の研究報告書シリーズの項に掲載されている。なお、2 つの大型プロジェクト以外の個別の共同研究のもとで 1990 年度以降に実施された科学研究費補助金による海外学術調査は以下のとおりである。()内は研究代表者。

- 1990 年度：「東南アジア型都市文明の形成——外文明からの変容と内発的展開」(坪内良博)
「中国における農業生態空間の展開と人の移動に関する歴史的研究」(古川久雄)
「東南アジア海域世界の動態に関する総合的研究」(土屋健治)
- 1991 年度：「中国における農業生態空間の展開と人の移動に関する歴史的研究」(古川久雄)
「東南アジア海域世界の動態に関する総合的研究」(土屋健治)
- 1992 年度：「海域世界の地域間比較」(矢野 暢)
「島嶼部東南アジアのフロンティア世界に関する動態的研究」(加藤 剛)
- 1993 年度：「海域世界の地域間比較」(矢野 暢)
「島嶼部東南アジアのフロンティア世界に関する動態的研究」(加藤 剛)
「コラート高原における人間・環境・作物複合の総観的研究」(福井捷朗)
- 1994 年度：「熱帯海域世界の比較研究」(高谷好一)
「島嶼部東南アジアのフロンティア世界の動態に関する総合的研究」(加藤 剛)
「コラート高原における人間・環境・作物複合の総観的研究」(福井捷朗)
- 1995 年度：「熱帯海域世界の比較研究」(古川久雄)
「サヘルと南インドにおける在来農法の再評価と両地域間技術移転の可能性に関する研究」
(応地利明)
「人と森世界に関する大陸間比較研究」(山田 勇)
「ウォーラセア海域世界におけるネットワーク型社会の文化生態的動態」(田中耕司)
- 1996 年度：「サヘルと南インドにおける在来農法の再評価と両地域間技術移転の可能性に関する研究」
(応地利明)
「人と森世界に関する大陸間比較研究」(山田 勇)
「ウォーラセア海域世界におけるネットワーク型社会の文化生態的動態」(田中耕司)
- 1997 年度：「人と森世界に関する大陸間比較研究」(山田 勇)
「ウォーラセア海域世界におけるネットワーク型社会の文化生態的動態」(田中耕司)
「熱帯半乾燥地帯でのミレット農耕と他の農耕との接触複合状況および農業再生に関する調査
研究」(応地利明)
「東南アジアにおける半乾燥地帯の発展と停滞に関する比較研究」(福井捷朗)
「デルタの 21 世紀像——熱帯アジア 6 大デルタの発展に関する総合的比較研究」(海田能宏)
- 1998 年度：「東南アジアにおける半乾燥地帯の発展と停滞に関する比較研究」(福井捷朗)
「デルタの 21 世紀像——熱帯アジア 6 大デルタの発展に関する総合的比較研究」(海田能宏)
- 1999 年度：「東南アジアにおける半乾燥地帯の発展と停滞に関する比較研究」(福井捷朗)
「アジア地域の環境中における腸管感染症原因菌の動態に関する調査」(西淵光昭)
「東南アジア大陸部の環境ストレスと農村社会経済変容を考慮した土地生産力評価」
(河野泰之)
「フロンティア社会の地域間比較研究」(田中耕司)
- 2000 年度：「アジア地域の環境中における腸管感染症原因菌の動態に関する調査」(西淵光昭)
「東南アジア大陸部の環境ストレスと農村社会経済変容を考慮した土地生産力評価」
(河野泰之)
「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」(阿部茂行)
「フロンティア社会の地域間比較研究」(田中耕司)
「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」(安藤和雄)
- 2001 年度：「東南アジア大陸部の環境ストレスと農村社会経済変容を考慮した土地生産力評価」
(河野泰之)
「アジア地域の環境中における腸管感染症原因菌の動態に関する調査」(西淵光昭)
「ウォーラセア海域における生活世界と境界管理の動態的研究」(パトリシオ・アビナウレス)

- 「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」(阿部茂行)
- 「フロンティア社会の地域間比較研究」(田中耕司)
- 「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」(安藤和雄)
- 2002年度:「ウォーラセア地域における生活世界と境界管理の動態的研究」(パトリシオ・アピナウレス)
- 「東南アジアにおけるセーフティ・ネットの比較研究——『古い』の問題を中心に——」
(A. テリー・ランボー)
- 「環ヒマラヤ広域圏における社会と生産資源変容の地域間比較研究」(山田 勇)
- 「アジア地域の新興腸管感染症の分子疫学的研究」(西淵光昭)
- 「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」(阿部茂行)
- 「インドネシアの民主化における地方政治の変容」(水野広祐)
- 「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」(安藤和雄)

他にさまざまな共同研究がセンター内外の研究者を組織して実施されてきた。国際協力事業団の研究協力事業として実施されているバングラデシュとの共同研究「バングラデシュ農村開発研究」、あるいは日本学術振興会と日立国際奨学財団の助成による「マレーシア農村部における社会経済変動と文化変容」(マレーシア国民大学との共同研究)などである。

(2) 拠点大学方式による共同研究

京都大学とタイのタマサート大学を交流の拠点として、日本とタイの研究者の研究交流を活発にすべく出発した日本学術振興会の拠点大学方式による学術交流は、第1フェーズ13年の交流に一応終止符を打ち、1999年度からプロジェクト中心の交流として新規にスタートした。当初、2つのプロジェクトを、東アジア政治経済構造の基本的特徴をヘゲモニー、ネットワーク、テクノクラシーを鍵概念として理解する目的で開始した。すなわち、濱下武志をリーダーとする「ヘゲモニーの構造変化(ネットワークの比較史)」と白石隆をリーダーとする「知的ヘゲモニーの構造(仕掛け)——テクノクラシー」である。2000年度には、「国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済」(リーダー:阿部茂行)を先行した2つの研究プロジェクトを補完する形で開始した。2001年度に先行2プロジェクトはワークショップを開催し、提出論文が書物にまとめられる予定である。2002年度からはそれらを発展させる形の「東アジアにおける中産階級」(リーダー:白石隆)、「東南アジアにおける社会的流動(フロー)」(リーダー:石川登)プロジェクトを開始する。

日本側協力大学は、神田外語大学、東京大学東洋文化研究所、同社会科学研究所、名古屋大学大学院国際開発研究科、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科等であり、相手国側拠点大学は Thammasat University, Chulalongkorn University, そして協力大学は Mahidol University, Silapakorn University, Chiang Mai University, National Institute of Development Administration (NIDA) 等である。

(3) 中核的研究拠点 (COE) 形成基礎研究

1998年度から5カ年計画で始まった文部科学省科学研究費補助金によるCOE形成基礎研究「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」は、センターおよびアジア・アフリカ地域研究研究科 (AA 研究科) が基幹研究機関となり、地域研究の中核的研究拠点の構築を目指すプロジェクトとして推進されている。研究リーダー白石隆のもと、東南アジア (クラスターリーダー: 阿部茂行), 南・西アジア (同: 小杉泰 [AA 研究科]), アフリカ (同: 市川光雄 [同研究科]) の3つの研究クラスターと地域間比較により、地域を物質生活, 地域社会・交換経済, 地域システムのレベルでトータルかつダイナミックにとらえる総合的地域研究を実施している。また, 研究分担者に加えて, 両機関のすべての研究スタッフが一丸となって, 地域研究の中核拠点をめざした基礎的資料 (図書・文書資料, 地図・衛星画像資料) の網羅的な収集や国内外の地域研究者・研究機関とのネットワークの形成に向けたさまざまな研究活動が実施されている。

これまでに収集された図書資料はすでに6万点余に及んでおり, 登録を終えた資料は京都大学附属図書館に配架され, 公開されている。また収集されたアジア・アフリカの衛星画像や地図を既存の資料も含めて検索できるシステムを構築し公開している。収集資料の紹介, 研究会やシンポジウムなどの情報を含めて, これまでの全ての研究活動およびその成果がCOEのホームページ (http://coe.asafas.kyoto-u.ac.jp/index_ja.htm) で公開されているので, 詳しくはそちらを参照されたい。

(4) その他の個別研究

現在のセンターのスタッフによる個別研究については第7章「研究スタッフ」の紹介の項をご参照願いたい。

2. 国際交流

東南アジア地域研究にとって, 国際研究交流は重要な柱であり, センターで共同研究をする外国人研究者は, 教官, 客員研究員, 図書館司書を含めてどの時点をとっても10人を超えている。こういう事情から真の意味での国際化を図るため, 外国人研究者にも正式に所員会議に参加してもらい, 円滑な意思疎通が行われるよう会議は英語で行うようになって久しい。所員会議後のコロキウムを筆頭に, 英語主体のセミナーも増加している。センター全体の会議以外にも, 外国人研究員を含めた各部門会議やミーティングが定期的にもたれている。

外国人研究員の選考は文書による通知やホームページ等を通じて完全なる公募制をとっている。通常, 春と秋の2回公募を行い, 国際交流委員会の厳正なる選考を経て部門長会議で審議され教授会にて決定している。東南アジア10カ国のみならず世界中からの応募数は募集定員の5倍を超え, これまで東南アジア諸国以外からも, バングラデシュ, 中国, 韓国, 米国などからの

外国人研究員が半年から1年滞在し共同研究を行っている。その他、センター客員研究員枠以外にも国の内外の財団による外国人研究者が一定の期間センターに滞在している。

センターを中心とする大学間協定は、従来からインドネシアのハサヌディン大学、ボゴール農業大学、大韓民国のソウル大学のほかフィリピン大学、シンガポール国立大学、ハノイ農業大学などと締結され、共同プロジェクトをたちあげ活発な研究交流が行われている。今年になってインドネシアとの研究協力を深めるため、インドネシア科学院（LIPI）との間で、共同研究および研究者の交流に関する覚書が交わされた。また、タイのプリンス・オブ・ソクラ大学理学部、ミャンマー・イエジン農科大学、ミャンマーの東南アジア教育省組織歴史伝統地域センターともあらたに協定を締結し、従来研究が乏しかったミャンマーにおける総合地域研究が開始された。日本学術振興会の拠点大学方式による交流プロジェクトも最終段階にはいり、これまでのタイだけとの交流から、インドネシア、フィリピン、マレーシアなど第三国をまきこんだマルチ交流へと展開している。

（1）外国人研究者の招聘

1975年度より外国人研究員の制度をセンターに設け、これまでは主として東南アジア諸国の研究者を招聘してきた。これを東南アジア研究者に切り替え、優秀で成果のあがる研究者を広く募り、センターで研究に従事してもらうことになった。その他にも日本学術振興会特別研究員（COE）や、拠点大学交流による短期派遣研究員等々を随時受け入れ、研究室・図書室・インターネットの利用等最大限の便宜を図っている。以下は2000年以降（平成12年度版和文要覧に掲載の者は除く）の外国人研究者のリストである。（ ）内は国籍を表わしている。

A. 外国人研究員

Neferti Macagba Tadiar	2000-01	最近のフィリピン・モダニティにおける歴史的研究	University of California at Santa Cruz (フィリピン)
Abdul Halim	2001	バングラデシュにおける半世紀の農業普及事業の効果：1951～2000	Bangladesh Agricultural University (バングラデシュ)
Medhi Krongkaew	2001	各国の対APEC対応における政治経済学：比較分析	Thammasat University (タイ)
Saw Kelvin Keh	2001-02	南・東南アジアにおけるチーク林の保護・育成についての新しい考え方と対策	The Institute of Forestry, Myanmar (ミャンマー)
Sompong Charoensiri	2001	東南アジア研究センター図書のタイ語文献のデータベースシステム	Maharakham University (タイ)
Deanna Gail Donovan	2001	東南アジア山地部における森林依存社会の発展と森林産物の潜在的役割	East-West Center (アメリカ合衆国)
Filomeno Aguilar	2001-02	移民と国家：フィリピン史における移民受入と送出	James Cook University (オーストラリア)

Darunee Tantiwiranond	2001-02	インドシナにおける女性の経済活動	Women's Action and Research Institute (タイ)
Alex John Ulaen	2001-02	北スラウェシ州サンギール・タラウド地方の物質文化と生活様式	University of Sam Ratulangi (インドネシア)
Leng Ten Moi	2001-02	日本からマレーシアへの技術移転：書誌	National University of Malaysia (マレーシア)
Uga U	2001-02	ミャンマーのバイオユニットに基づく自然野生動物および生物多様性保護と生態地域の記述	Ministry of Forestry, Myanmar (ミャンマー)
Liu Hong	2002	アジアのなりたちを考える：20世紀における中国, 東南アジア接触領域の形成について	National University of Singapore (中華人民共和国)
Wu Xiao An	2002	東南アジアの華人質屋業の研究	National University of Singapore (中華人民共和国)
Aroonrut Wichienkeeo	2002-03	貝葉資料に見る東南アジア大陸部における民族集団	Rajabhat Institute Chiang Mai (タイ)
Lai Yew Wah	2002	マレーシア経済：その問題点と政治	University of Science, Malaysia (マレーシア)
Rigoberto D. Tiglao	2002	アヨロ政権下のフィリピン政治力学分析	Philippine Daily Inquirer (フィリピン)
Maria Ginting	2002	京都大学東南アジア研究センター購読雑誌の分析	LIPI (インドネシア)
Charles Macdonald	2002	南ベトナムのラングライ人に関する社会人類学的研究	Centre National de la Recherche Scientifique (フランス)
Neil L. Jamieson	2002-03	ベトナムにおける社会組織と人間生態学の研究	East-West Center (アメリカ合衆国)
Tsu Yun Hui Timothy	2002-03	東南アジアにおける日本の中国人観およびその他の民族観：1850-1946	National University of Singapore (イギリス)
Tran Duc Vien	2002-03	ベトナム北部地域における文化と営農体系の関係	Hanoi Agricultural University (ベトナム)

B. その他の外国人学者

Lee Cheuk Yin	2000	日本における明代中国文学並びに思想研究	National University of Singapore (シンガポール)
Lee Poh Ping	2000	知的ヘゲモニーの構造 (仕掛け)：テクノクラシー	National University of Malaysia (マレーシア)
Tong Chee Kiong	2000	同	National University of Singapore (シンガポール)

Chalong Soontravanich	2000	同	Chulalongkorn University (タイ)
Pasuk Phongpaichit	2000	同	Chulalongkorn University (タイ)
Odine de Guzman	2000	同	University of the Philippines (フィリピン)
Ukrist Pathmanand	2000	同	Chulalongkorn University (タイ)
Thanet Aphornsuvan	2000	ヘゲモニーの構造変化 (ネット ワークの比較史)	Thammasat University (タイ)
Chanvit Kasetsiri	2000	タイ君主政治の保護化	Thammasat University (タイ)
Supang Chantavanich	2000	1975-95 タイにおける 国境 を越えた移動	Chulalongkorn University (タイ)
Suthiphand Chirathivat	2000	国家・市場・社会・地域統合 のロジックとアジア経済	Chulalongkorn University (タイ)
Trisilpa Boonkhachorn	2000	ヘゲモニーの構造変化 (ネット ワークの比較史)	Chulalongkorn University (タイ)
Srawooth Paitoonpong	2000	国家・市場・社会・地域統合 のロジックとアジア経済	Thailand Development Research Institute (タイ)
Lai Yew Wah	2000	同	University of Science, Malaysia (マレーシア)
Jonathan Beller	2000-01	東南アジアにおける視覚表現 のダイナミックス	University of California at Santa Cruz (アメリカ合衆国)
Aree Cheunwattana	2001	地域文庫と家庭文庫の発達と 将来の展望	Srinakharinwirot University (タイ)
Shandre Thangavelu Mugan	2001	国家・市場・社会・地域統合 のロジックとアジア経済	National University of Singapore (シンガポール)
Kasian Tejapira	2001	知的ヘゲモニーの構造 (仕掛 け): テクノクラシー	Thammasat University (タイ)
Olarn Chairavat	2001	国家・市場・社会・地域統合 のロジックとアジア経済	The Siam Commercial Bank Research Institute (タイ)
Bhanupong Nidhiprabha	2001	同	Thammasat University (タイ)
Hongpha Subboonrueng	2001	同	Thammasat University (タイ)
Nongnuch Soonthornchawakan	2001	同	Thammasat University (タイ)
Naris Chaiyasoot	2001	今日のタイの政治と経済復興	Thammasat University (タイ)
Colin G. Nicholas	2001	先住民リーダーと先住民社会 の周縁化	Center for Orang Asli Concerns (マレーシア)

Dwi Rachmina	2002	同	Bogor Agricultural University (インドネシア)
Kasian Tejapira	2002	知的ヘゲモニーの構造 (仕掛け): テクノクラシー	Thammasat University (タイ)
Chalong Soontravanich	2002	同	Chulalongkorn University (タイ)
Trisilpa Boonkhachorn	2002	同	Chulalongkorn University (タイ)
Charnvit Kasetsiri	2002	タイ王制の歴史的変容に関する研究	Thammasat University (タイ)
Khoo Boo Teik	2002	ヘゲモニーの構造変化 (ネットワーク比較史)	University of Science, Malaysia (マレーシア)
Dhirawat Na Pombejra	2002	同	Chulalongkorn University (タイ)
Olarn Chairavat	2002	国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済	The Siam Commercial Bank Research Institute (タイ)
Vedi Hadiz	2002	知的ヘゲモニーの構造 (仕掛け): テクノクラシー	National University of Singapore (インドネシア)
Pornpimon Trichot	2002	同	Chulalongkorn University (タイ)
Teresa Encarnacion Tadem	2002	同並びにタイ社会の民主化とその動向についての研究	University of the Philippines (フィリピン)
Suthiphand Chirathivat	2002	国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済	Chulalongkorn University (タイ)
Donald Manaytay Ugsang	2002-03	東南アジアにおける沿海域の変容と資源管理	AIT (タイ)
Sugiah M. Mugniesyah	2002	環境調和型農村開発に関する社会経済的研究	Bogor Agricultural University (インドネシア)

(2) 留学生の派遣と受け入れ

センターは東南アジア研究を志す研究者の養成と国際交流の目的で、センターの若手研究者、京都大学の大学院生、およびその他の学生、若手研究者を欧米と東南アジアに留学生として派遣し、あるいは留学の便宜を図ってきた。

また、東南アジア諸国の学生をセンターの研修員として受け入れ、その指導に当たった。2000～2002年度に受け入れた外国人研究生は次のとおりである。

Nghiem Tuyen Phuong	2000-02	山岳地域小都市間の連携と地域開発 (ベトナム)
Otmazgin Nissim	2001-02	日本と東南アジアの国際関係 (イスラエル)
Chakma Shishir Swapan	2001-02	バングラデシュ、カグラチョリ丘陵県におけるジウム栽培 (焼畑) の生産性に関する研究 (バングラデシュ)
Hoang Nguyet Thi Minh	2002-03	日本における中小企業政策およびベトナムへの教訓 (ベトナム)

3. シンポジウム・セミナーなど

東南アジア研究に関して内外の研究者とより広く意見を交換するため、これまでに数多くのシンポジウム、セミナー、ワークショップなどが、センターの主催または他機関との共催で開催された。最近2年間に開催された主なものについて簡単な趣旨とプログラムを掲げておく。

(1) 研究会「メコン流域の政治生態学」

「メコン流域の政治生態学」(Political Ecology of the Mekong River Basin, 研究代表者は国立民族学博物館地域研究企画交流センターの阿部健一, 2000～02年度) 関連の研究会を民博地域研および東南アジア研究センターにおいて不定期に開いてきた。メコン開発にさまざまな面で関わってきた内外の研究者やエンジニアを招いて経験を語ってもらい、メコン開発の構想や計画内容、流域国やドナーの関わりやスタンス、環境保全思想などの変遷を学ぼうという趣旨である。研究計画としては、国際河川の開発に関わる国際的なステークホルダーやドナー間の調整の成功や不成功事例を積み上げ、その政治生態的な要因を探ることをねらっている。フィールドワークや資料収集なども同時並行的に行われている。

2000年6月2日(於民博地域研)

「メコン流域開発をめぐる私の経験」

(元メコン委員会エンジニア) 堀 博

(元メコン委員会エンジニア) 川合 尚

(農業土木総合研究所, 元メコン委員会事務局長) 的場 泰信

2000年9月14日(於センター)

Environmental Assessment in BOT (Build, Operate and Transfer) Projects:

Case Studies in Vietnam and Laos

(シドニー大メコン研究センター) Andrew Wyatt

Effects of Vietnamese Dam Construction on Cambodian Fishing Communities

(カンボジア, 環境ネットワーク・フォーラム) Mak Sithirith

2000年10月6日(於センター)

「メコン委員会から見た流域圏開発」

(立命館大) 笠井 利之

(2) 共同研究「東南アジア大陸山地部研究会」

本研究会が対象とするのは、ベトナム・タイ・ラオス・ミャンマー・中国南部の山地部である。この地域はほんの10数年前まで、少数民族がさまざまな文化ルールにしたがって棲み分け、「外文明」との関係が極端に乏しく、「手がつけられていない、損なわれていない」地域であると言われていた(『講座・東南アジア学1 東南アジア学の手法』矢野暢編, 弘文堂, 1990年)。しかし、1990年代になって外国人によるベトナムやラオスでの長期のフィールドワークが可能になり、さまざまな分野の研究が蓄積されつつある。また、この地域は急激な経済発展や人口の移動、開発政策などさまざまな理由によって、自然環境の破壊や民族問題など緊急の解決を要する多くの問題が発生している地域でもある。そこで本研究会は、地域を限定し分野横断的な研究会とすることにより、この地域の基層を理解するだけでなく、多数の要因が複雑に絡み合った現代の

課題群へのアプローチをも視野に入れた総合的研究を行うことを目的として組織された。

これまでに実施した研究会は以下のとおりである。

- 第1回研究会（2000年6月23日）地理情報システムによる生態環境の把握——ラオスの事例
「ラオス村落情報システム LAVIS の構築と活用」
（大阪市大）永田 好克
in Northern Uplands of Vietnam
（ベトナム国立大）Nghiem Phuong Tuyen
- 第4回研究会（2001年3月6日）
Development Trends in Vietnamese Northern Mountain Region
A. Terry Rambo
- 第5回研究会（2001年11月2日）
Mobilizing the Margin: Impacts of Market Restoration on the Northern Border of Vietnam
（イースト・ウエストセンター）Deanna G. Donovan
- 第6回研究会（2002年3月8日）
「タイ・ムン族の『自由移住』——ベトナム東北部山間部少数民族の生存戦略」
（大東文化大）伊藤 正子
- 「Who Are the Hmong? ——生活実態の視点から行う問題提起」
（京都文教大）谷口 裕久
- 第3回研究会（2001年3月2日、共同開催）
「エーヤーワディ流域地方における『権力と土地利用』の変遷」
（愛知大）伊藤 利勝
- 「ベトナム山間民族のフロンティア開発」
（民博）檜永真佐夫
- Land Cover and Land-use Changes in Vietnamese Northern Mountain Region
（ベトナム国立大）Dao Minh Truong
- 第7回研究会（2002年3月27日、共同開催）
「ベトナム領メコンデルタの土地制度史序説——農業発展のなかの土地制度」
（敬愛大）高田 洋子
- Rural-urban Relations and Rural Development

（3）共同研究「フロンティア社会の地域間比較研究」

科学研究費補助金基盤研究（B）により1999年度から2001年度までの3カ年計画で実施した。東南アジアの各地で臨地調査を実施してきた研究者のあいだで東南アジアを「フロンティア社会」としてとらえる見方があったが、本研究は、F. J. Turner の「フロンティア仮説」を準拠枠としながら、そのような見方を地域間の比較からより相対的かつ実証的に検証するために計画された。アジア、アフリカ、オーストラリア、アメリカ、日本でフィールドワークを行ってきた研究者が各地域の調査結果をもちより、①各地域・各時代のフロンティア社会の特徴、②フロンティア社会の持続性、③フロンティア社会を考えることの今日的意義、などを明らかにしようとした。最終年にあたる2001年度末に、3カ年の研究会の発表を収録した報告書『フロンティア社会の地域間比較研究』をとりまとめた。

2000年度と2001年度には、以下の研究会を開催した。

- 第6回研究会（2000年6月24日、センター）
「ミナンカバウ・フロンティアの史的展開——ランタウ概念の変容をめぐって」
（京大 AA 研）加藤 剛
- 「東南アジア泥炭湿地林——熱帯林における最後のフロンティア」
（民博地域研）阿部 健一
- 第7回研究会（2000年8月19～20日、神戸松蔭女子学院大学大山ロッジ）
「合衆国内外のフロンティア社会に関する研究状況と研究情報の紹介」
（京大 AA 研）山口潔子・渡邊暁子/田中耕司
- 第8回研究会（2000年11月1～4日、北海道開拓記念館、京大標茶演習林）
「観光雑誌における北海道の心象地理——1920年代～1960年代の『旅』の誌面から」
（名大）東村 岳史
- 「北海道の開拓とアイヌ民族——土地問題を中心として」
（北海道開拓記念館）山田 伸一

- 「文化接触によるカムチャッカ先住民の生業変容」
 (道立北方民族博物館) 渡部 裕
 第9回研究会(2001年1月13日, 阪大待兼山会館)
- 「農業技術のフロンティア——焼畑農業から精密農業まで」
 (三重大) 小倉健太郎
- 「江南デルタの開拓史」
 (阪大) 濱島 敦俊
 第10回研究会(2001年2月23日, センター)
- 「『夷島/蝦夷/北海道/札幌』——フロンティア論・植民都市論および日本国家論構築のための素材として」
 (滋賀県立大) 応地 利明
 第11回研究会(2001年6月9~10日, 湘南国際村センター, 慶應義塾大経済学部と共催)
- 「フィリピン・サマル島からの向都移動の展開」
 (京大 AA 研) 細田 尚美
- 「フロンティアとしてのバンコク」
 (甲南女子大) 坪内 良博
- 「綿花フロンティアと奴隷商人」
 (慶應大) 柳生 智子
- 「移民史研究のフロンティア」
 (日大) 加藤 洋子
 第12回研究会(2001年8月3~4日, 神戸松蔭女子学院大学大山ロッジ)
- 「近代ネパールの成り立ちとフロンティア」
- 「カトマンズ近郊の都市フロンティア——パタン市の町形成を事例に」
 (広島大) Keshav L. Maharjan
- 「マイナークロップからみたフロンティア——ラオスにおけるハトムギ栽培の事例から」
 (鹿児島大) 落合 雪野
- 「メコンデルタの開拓前線——水田開発と湿地保全」
 田中 耕司
- 「日本近世史とフロンティア社会論——助走編」
 (久留米大) 江藤 彰彦
 第13回研究会(2001年10月13日, 名大国際開発研究科)
- 「食文化から試みるフロンティア社会の地域間比較」
 (名大) 大橋 厚子
- 「アフリカ中央部の移住村における食のフロンティア」
 (静岡大) 小松かおり
- 「ヴェトナム, チャム族の食文化」
 (神戸大) 吉本 康子
 第14回研究会(2001年12月26日, センター)
- 「ヨーロッパにおける環境・エネルギーのフロンティア」
 (三重大) 法貴 誠
- 「アフリカの内的フロンティア論について」
 (民博) 池谷 和信
 第15回研究会(2002年1月26日, センター)
- 「政治学における『空間』概念——アメリカ論を射程に」
 (九大) 豊永 郁子
- 「東南アジア島嶼部のフロンティア社会——ボルネオ島西部国境地帯からの視点」
 石川 登

(4) 共同研究「民族間関係・移動・文化再編」

過去およそ30年間に東南アジアが経験した「開発の時代」は、一方で国民国家を枠組とするナショナリズム, 近代化, 経済発展, 都市化としての変化, 他方で資本, 労働力, 文化などのグローバル化の一環としての変化をもたらした。1998年度に発足した本研究会は、最近実施された調査研究に基づいて、その社会変容の諸相を、民族間関係, 移動, 文化再編をキーワードにして考察を深めることを狙いとする。2001年度まで通算14回を実施, 対象地域は東南アジアはもとより, 東アジア, アフリカにおよび, 多岐にわたる主題についての地域間比較をも試みている。

2000年度から2001年度にかけては、計3回の特別研究会を含む以下の研究会を実施した。

- 2000年度: 第1回研究会(2000年7月8日)
 「世俗経験としての『開発』活動——タイ東北地方の開発僧と村落宗教の再編」
 (東外大) 泉 経武
- 「マレーシア・ケダのタイ人居住区の状況について」
 (鹿児島大) 黒田 景子
 第2回研究会(2000年9月27日)
- 「20世紀50年代末中国的民族学調査」
 (広西民族学院民族研究所) 范 宏貴
- 「50年代雲南西双版纳 Dai 族地区調査工作的回顧和体会」
 (北京中央民族大学) 張 公瑾
 第3回研究会(2000年10月14日)
- 「オランダ領東インド時代のマレー語華人文学——作品についてのいくつかの視点」
 (大外大) 北野 正徳
- 「マレーシア華語系華人文学『馬華文学』について」
 (立教大) 舩谷 鋭

「シンガポール華人英語文学——詩を中心として」

(大阪学院大) 長岡みゆき

第4回研究会(2000年12月15日)

「近代シヤムにおけるもう一つの“Family Politics”」

(東外大) 小泉 順子

「1930年代蘭領東インドにおけるムスリム女性のジェンダーをめぐるディスコース——1933年インドネシア女性会議を中心に」

(岐阜聖徳学園大) 服部 美奈

2001年度:第1回研究会(2001年6月29日)

「ビルマ尼僧院の所有形態と発展サイクル」

(ランカスター大) 川並 宏子

第2回研究会(2001年10月26日)

「異聞・タイ社会変化15年——1992年5月事件前後の民衆運動・中間層・知識人」

(フリーライター) 岡本 和之

第3回研究会(2002年3月5日)

「HIV感染予防対策と女性たちの自己同一性——

HIV感染予防の医療人類学的考察」

(札幌医科大) 道信 良子

(5) 拠点大学セミナー “State, Community, and Market” (2000年10月24～25日)

1997年7月、タイ・バーツの危機が引き金となってASEAN諸国を中心にアジア通貨が動揺した。こうした経済危機に対する対応はIMF・世銀の処方箋に沿った政策運営をしたタイと、為替レート固定、短期資本流出規制を強行したマレーシアとは対称的であった。この2カ国の対応をテーマに、2000年10月24日と25日の2日間、JSPS拠点大学プロジェクトの国際セミナー、「政府・市場・社会・地域統合の政治経済学——マレーシアとタイの比較」がタマサート大学で開催された。

タイについてはバヌボン准教授(タマサート大学)、マレーシアについてはマハニ教授(マラヤ大学)とライ教授(マレーシア科学大学)がそれぞれポスト危機の各国経済の事情をサーベイし、これまでの学術的研究の蓄積を紹介し、現状に関する知見を披瀝した。これに加えて、高木教授(東京大学)は広くアジア全体を俯瞰して、一般的な議論を展開した。シンガポールからはタンガベル助教授(シンガポール国立大学)がマレーシアとのリンケージを軸にシンガポールの対応を議論した。20数名のタイの専門家も積極的に議論に参加した。このテーマでの研究の現状を参加者の共通の理解とすることができ、プロジェクト全体の統合性の確保ができた。と同時に、タイのコミュニティに拠点大学共同研究の存在をアピールすることができた。

Introduction of the Core University Project and Participants

阿部 茂行

Malaysia's Response to Asian Crisis: An Alternative Approach (マラヤ大) Mahani Zainal Abidin

Role of Banking Sector Restructuring in Economic Recovery:

Case of Malaysia

(マレーシア科学大) Lai Yew Wah

Asian Crisis and the Singaporean Experience (シンガポール国立大) Shandre M. Thangavelu

Thailand's Post-Crisis Macroeconomic Perspectives (タマサート大) Bhanupong Nidhiprabha

The Miracle and the Currency Crisis in East Asian Countries

(東大) 高木 保興

(6) 国際会議 “Chao Phraya Delta 2000” (2000年12月12～15日)

バンコクのカセサート大学において、「チャオプラヤデルタ——タイの穀倉の開拓史、ダイナミクス及びチャレンジ」という国際会議が開催された。カセサート大学が幹事校になり、チュロンコン大学、フランスの国際開発研究所、それに東南アジア研究センターの4機関共催という

かたちをとった。参加者はタイの研究者を主体に約 200 名を超え、発表論文は 58 編に及んだ。日本からは 10 数人が参加し、11 編の論文が発表された。東南アジア研究センターからは、海田能宏と河野泰之が発表した。

会議は次の 6 セッションからなっていた。デルタ的生活の伝統とその変貌 (6 編), 土地利用 (11), 水利用と環境問題 (17), 農村社会と経済の変化 (8), デルタとバンコク (7), より広い地域の中におけるチャオプラヤデルタ (7), およびポスター (2)。論文の多くは、このデルタの急速な変貌の諸相を掘り下げようとしたもので、数からいうと、とりわけ土地・水利用の変貌、都市化の影響、水質汚濁などを取り扱ったものが多かった。すべての論文はウェブサイト <http://std.cpc.ku.ac.th/delta/deltacp/home.htm> で公開されている。

(7) COE 国際セミナー

“Area Studies: Past Experiences and Future Visions” (2001 年 1 月 19 ~ 21 日)

2001 年 1 月 19 日より 3 日間、京都市国際交流会館において、国内外から 142 名が参加して、COE 国際セミナー「地域研究——これまでの経験とこれからのヴィジョン」を開催した。このセミナーは、これまでの地域研究の蓄積を共有し、より統合的、地域横断的な地域研究の発展を企図したものである。シンポジウムは、第 1 部「研究機構の構築」と第 2 部「生活世界・イデオロギー・国家形成・資本主義」からなり、第 1 部では世界的な地域研究機関の経験に基づいて今後の研究経営や教育経営について議論した。また第 2 部では「アフリカの変貌——環境、農業、日常生活」「スーフィー思想と地域形成——アジア・アフリカにおけるイブン・アラビーとその学派」「植民地時代およびポスト植民地時代のアジア・アフリカにおける国家形成」をテーマとする 3 つのセッションを設け、それぞれ、物質生活、地域社会、地域システムのレベルで地域に迫る議論を繰り広げた。

第 1 部: Building Institutions

司会: 白石 隆

(カリフォルニア大, ロスアンジェルス) Anthony Reid

(アジスアベバ大) Tegegne Gebre Egziabher

(北欧アフリカ研究所) Lennart Wohlgemuth

(東大) 原 洋之介

第 2 部: Everyday Life, Ideologies, State Formation and Capitalism

セッション 1: Africa in Transformation: Environment, Agriculture

and Everyday Life

司会: (京大 AA 研) 重田 真義

Indigenous Aspects and Potentials of African Agriculture:

Where Do Science and Culture Meet?

(京大 AA 研) 荒木 茂

Land Cover Transformation in Central Zambia: Role of

Agriculture, Biomass Energy and Rural Livelihoods

(ザンビア大) Emanuel N. Chidumayo

The Citemene System, Social Leveling Mechanisms and

Agricultural Changes in a Rural Area of Northern Zambia:

An Overview of 15 Years of Research in Bemba Villages

(京大 AA 研) 掛谷 誠, (弘前大) 杉山 祐子, (東京都立大) 大山 修一

- Impacts of Population Growth and Economic Change on
Traditional Agricultural Practices in Africa (フロリダ大) Abraham Goldman
「コメント」 田中 耕司
- セッション2 : Sufi Thought and Regional Formation:
Ibn 'Arabi and His School in Asia and Africa 司会 : (京大 AA 研) 小杉 泰
The School of Ibn 'Arabi between Wahda al-Wujud and Wahda al-Shuhud
(京大 AA 研) 東長 靖
Ismail Ankaravi's Interpretation of Ibn 'Arabi (マギル大) Bilal Kuspinar
The Influence of Ibn 'Arabi in Southeast Asia during the Ottoman Period
(マレーシアイスラム思想文明国際研究所) Baharudin Ahmad
「コメント」 (上智大) 赤堀 雅幸, (山口大) 中田 考
セッション3 : State Formation in Colonial and Post-Colonial Africa and Asia 司会 : 阿部 茂行
State Formation in the Raj and Its Shadow: Burma and India
in the 19th and 20th Centuries (ワシントン大) Mary P. Callahan
War and States: Central Africa and West Africa Compared (ノースウェスタン大) William S. Reno
Progressive-Machine Conflict in Early Twentieth Century:
American Politics and Colonial State-Building in the Philippines Patricio N. Abinales
「コメント」 (大阪大) 栗本 英世, (神戸大) 片山 裕

(8) 共同研究会「農村開発における地域性」

農村開発を応用的地域研究として位置付け、農村開発の地域性をさまざまな個別的視点からワークショップ方式で研究している共同研究会である。農村開発事業は風土、人々の暮らし方、社会のあり方、地方行政など、私たちに地域を感じさせる諸々の在地の事象に大きく影響されるとともに、事業展開により在地化が起きることで、農村開発が在地という村の住民の主体的な試みへと事業は質的に変容する。地域を感じさせる在地の事象の反映を農村開発の地域性と捉え、農村開発の地域性を考えるために、テーマと地域を柔軟に設定し比較検討を柱とする意見交換の場が本研究会である。センター内だけではなく外に広くメンバーを募り各テーマと地域にしたがって意見交換を行っている。こうした場から、応用的地域研究という概念が単なる言葉としてではなく、アプローチをともなった実体として片鱗を現してくることになる。同研究会は、年に2～3回開催している。2000年度、2001年度のテーマと内容は下記のとおりであった。

1999年度から、一つの研究会では予算的にも限界があるので、他の学外の研究会との合同研究会も開催している。第6回の農業普及に関する研究会は生活改善研究グループとの共同開催とした。第6回研究会については、研究会報告と討論を報告書としてまとめ、国際協力事業団の研究協力プロジェクト「住民参加型農村開発行政支援計画」国内支援委員会（事務局は財団法人アジア研究協会に置かれている）の資料として出版されている。このようにさまざまな研究会や活動との協同も本共同研究会の特色の一つとなっている。

第5回研究会（2001年1月23日）

〈生活文化・暮らしの基層——遺跡遺品の仏教調査 「パーラ王朝における仏教遺跡」
からみたバングラデシュ古代仏教とその展開〉 (高野山大) 乾 仁志

「パーラ王朝の遺品——仏像、絵画などの美術品、パーラ王朝前後の歴史」（高野山大）森 雅秀
 「パーラ王朝の仏教僧（インド、東南アジアへ伝播にも言及）」（高野山大）藤田 光寛
 「ヴィクラマシーラ僧院崩壊よりものち4、5年存続したJagaddala僧院」（高野山大）越智 淳仁
 第6回研究会（2001年2月9日）
 〈農業普及——戦後日本の普及事業に学ぶ〉
 第1部：「日本の経験に学ぶ」
 「日本の生活改善運動概論——グループ化・組織育成の方法論を中心として」
 （元新潟県生活改良普及員）西潟 範子
 「愛媛県東宇和郡岡成集落の記録」（スライド上映）
 （農業総合研究所）水野 正己
 （国際協力事業団）小林 花
 「コメント」
 （元京都府生活改良普及員）田村そのえ
 第2部：「日本の経験を途上国に生かす」
 「生活改良普及員の経験から」
 （元京都府生活改良普及員）勝井 恵子
 「普及員OBから見た協力隊プロジェクトの課題

——マレーシア・グアテマラの事例から」
 （元愛媛県生活改良普及員）高岡ミエ子
 「農村開発において外部者が関わる意味——インドネシアにおける協力隊員の試みから」
 （千葉大・元青年海外協力隊員）小國 和子
 第7回研究会（2002年2月26日）
 〈地方行政と農村開発——NGO、農協などとの連携を視野にいれて〉
 「インド・アーンドラ・プラデーシュ州におけるパンチャーヤトと農村開発」
 （聖母女学院短大）浅野 宣之
 「農業改良普及員と営農指導員の役割分担（山口県の事例）——営農情報ニーズと人材育成の視点から」（山口農林事務所農業普及部）岩崎 暁
 第8回研究会（2002年3月26日）
 〈生活文化・暮らしの基層——密教基層文化の広がり〉
 「インドネシアの密教遺跡と遺品——パーラ朝との関連について」（清風学園高校）松長 恵史
 「現代バングラデシュのバルア仏教徒の信仰」
 （長岡病院）谷山 洋三

（9）「東南アジアの社会と文化」研究会

フィールドワーク（臨地調査）に基づく東南アジアの地域研究、とりわけ広い意味での社会誌・文化誌にかかわる研究発表および意見交換のためのフォーラムを目指して発足した定期的研究会である。「東南アジア」「フィールドワーク」「社会誌・文化誌」をキーワードにしつつも、地域的・方法論的志向の如何を問わず、異種・多様な研究を包摂する知的土俵を実現することを目指し、2001年1月以来、原則として奇数月の第3木曜日に京都大学東南アジア研究センター東棟二階教室にて開催している。近く、本研究会のHPも公開される。

第1回研究会（2001年1月26日）
 「マレー農村の30年——開拓志向から都市移住へ」
 （京大AA研）坪内 良博
 第2回研究会（2001年3月15日）
 「ポッポとナンナとノナ・バンコ——マカッサル海峡B島の生活史」
 濱元 聡子
 第3回研究会（2001年5月17日）
 「『狭いながらも楽しい我が家』——北タイ・アカにみる家屋と住み手の交渉」（民博）清水 郁郎
 第4回研究会（2001年9月20日）
 「モノから描くエスノグラフィー——インドネシア・

スンバ島の在来製布技術と社会変化」
 （東大）田口 理恵
 第5回研究会（2001年11月26日）
 「村落共同体と風水——西南中国トン族の事例から」
 （滋賀大）兼重 努
 第6回研究会（2001年1月17日）
 「宗教に関するフィールドワーク——トロタン・オランフル・マレー」
 立本 成文
 第7回研究会（2002年3月22日）
 「リオ語の『ドゥア』は『所有者』か？——『因果的支配』の概念について」（京大AA研）杉島 敬志

(10) International Workshop on “Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China” (於チェンライ, 2001年3月23～24日)

COE 形成基礎研究プロジェクト「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」による東南アジア・クラスター（社会相関）の研究活動の一環として、2001年3月タイ国チェンライ市で 国際研究集会「東南アジア大陸部と西南中国における民族間関係」を開催し、タイ（4）、中国（3）、日本（3）、合衆国（2）からの参加者計12名が最新の民族誌データに基づく研究発表と討論を行った。また、ホストを務めたチェンライ・ラーチャパット大学民族研究所の協力により、参加者は会議に先立つ3日間にわたってタイーミャンマー国境域の複数の集落を訪れ、地域と民族が直面する諸問題と現状について住民との聞き取り調査、意見交換を実施した。それぞれの発表報告は、こうした経験を共有した後リライトされ、タイ語要約を付した英文報告書として編集刊行された（2002年3月）。全論文は、近く本COEプロジェクトウェブで一般公開される予定。

2001年3月23日

「特別公演」 Culture and Religion in Chiang Tung

(チェンマイ市タークラタン寺正住職) Phra Athikarn Anonda Atittadhammo

「コメント」

(チェンマイ・ラーチャパット大学) Albert Lisec

Lua Leading Dogs, Toting Chaek, Carrying Chickens':

Some Comments

(チェンマイ・ラーチャパット大学) Aroonrut Wichienkeeo

Reconfiguration of the Role of the Guardian Spirit:

Reflection from the Phuan Feasting Ritual

(シラパコン大) Pranee Wongthet

The Culture of the Primitive Religious Rites of the Dai Nationality

in Xinping, Yunnan Province

(雲南民族研究所) Yang Guangyuan

On the Possibility of Early Karen Settlement

in the Chiang Mai Valley

(サイアム・ソサエティ) Ronald Duane Renard

Embodied Power of Prophets and Monks: Dynamics of Religion

among Karen in Thailand

速水 洋子

The Lahu Symbolic Universe and Reconstruction of Ethnic Identity

(チェンライ・ラーチャパット大学) Sombat Boonkamyung

2001年3月24日

Culture and Tradition of the Tai People in Sipsong Chu Thai, Northwestern Vietnam:

Maintenance, Revivalization and Present Integration into the Vietnamese Society

(マヒドン大) Phattiya Jimreivat

From Repairing the Village/Repairing the Country Ceremonies to Tree Ordinations:

Changes in Political Ritual in a Shan Community in Northwestern Thailand

(リーハイ大) Nicola Beth Tannenbaum

Buddhism without Institutions: Notes on the Theravada Buddhist Practice

in Comparative Perspective

林 行夫

An Interpretation of Religious Influence of the Dai Nationality

on the Atsang Language and Culture: A Case Study

(雲南師範大) Yuan Yan

Current Status, History and Prospects of Jingpo People's Bilingual Education System:

The Cultural Vicissitudes an Old Ethnic Group Encountered in Modern Society

(北京大) Dong Yan

Ethnic Tourism and Cultural Change in the Border Region of Yunnan Province:

A Case Study on Xishuangbanna Dai Autonomous Prefecture (岐阜聖徳学園大) 長谷川 清

(11) 研究会「国家・市場・共同体」

「国家・市場・共同体」研究会は、東南アジアの経済発展に関し、国家や市場および共同体の役割を検討することにより、東南アジア地域の特質を特に政治経済の面から明らかにしようとするグループである。アジア通貨危機があり、グローバリゼーションの影響を一層強く受けるなか、その影響とこの地域の再編成の方向を村落、地域社会、国家、東南アジア地域の諸レベルで研究している。また、地域社会の特質を各レベルにおいて、どのような主体がどのような方策でこれを保持しているのか、さらにこれがこの地域の経済発展の方向をどう規定しているのかに関する研究も進めている。最近の研究会では、ミクロレベルの農村信用組織や住民組織に関する研究報告が行われた。また、スハルト政権崩壊後の労働政策の方向をめぐる研究報告や、さらに今日のグローバリゼーションの特質に関する報告が行われた。また、他の学会との共同セミナーも好評であった。今後、地域間比較の視点をより重視して研究を進めてゆく方針である。

2001年7月10日

Globalism: The New Market Ideology

(イリノイ州立大) Manfred Steger

2001年12月6日

Populism on the Rise in Indonesia?: Reflections on Recent

Economic Policy, with Special Reference to Labor

(オーストラリア国立大) Chris Manning

2002年2月22日

Social Changes in Rural West Java in Democratizing Indonesia:

Administrative and People's Organizations

水野 広祐

2002年3月1～2日

「東南アジア研究のフロンティア」(日本比較政治学会東南アジアコーカス関西例会と共同開催)

「マレーシアにおける国家とNGO——NGOセクターにおけるエスニック・ギャップ」

(獨協大) 金子 芳樹

「1960年代アジア国際政治力学の変容と日本——マレーシア紛争仲介工作を中心に」

(一橋大) 宮城 大蔵

「『タイ経済と鉄道』とその後」

(横浜市大) 柿崎 一郎

「民主体制下の開発国家——ASEAN諸国のケースを中心に」

(名大) 木村 宏恒

「『改革』をめぐるインドネシアの政治変容——イスラーム・庶民・メガワティ」

(九大) 佐々木拓雄

2002年3月18日

Institutionalization of People's Self-organizing Actions for Rural Development:

Comparative Analysis of Microfinance Organizations in Rural Thailand,

Philippines and Indonesia

(アジア経済研) 重富 真一

(12) COE 国際セミナー

“Changing People-Environment Interactions in Contemporary Asia: An Area Study Approach” (2001年11月15～17日)

2001年11月15日より3日間、京大会館において、COE国際セミナー“Changing People-Environment Interactions in Contemporary Asia: An Area Study Approach”を開催した。この会議は、東南アジアとその周辺地域における近年の急激な環境変化を、地域住民の生活や生業、そして地域社会に立脚した視点から捉えなおすことを企図したものである。“Confrontation and Environment,” “Dynamism of Health and Ecology,” “People’s Strategies in Eco-Resources Management”の3つのセッションで活発な議論が繰り広げられ、自然科学系の視点や分析方法に基づく地域研究の多様な展開が提示された。

セッション1：Confrontation and Environment

サブセッション1：Ecological Issues in Transmigration Policy
and Development of Coastal Wetland of Indonesia

司会：白石 隆

Malay Riverbank Communities in Peat Swamp Forests of Sumatran
East Coast: Environment, Network, and Transformation

(京大AA研) 百瀬 邦泰

Ecological Issues of the Mega-Rice Project in Indonesia: Case Study
of Swampy Land Development in Central Kalimantan

(ボゴール農業大) Supiandi Sabiham

From Colonization to Transmigration: Changing Policies
in Population Resettlement

(ボゴール農業大) Sodiono M. P. Tjondronegoro

A National Project That Failed: Tale of Population Resettlement
Policy in Indonesia

(LIPI) Riwanto Tirtosudarmo

サブセッション2：Ecological After-Effects of Agent Orange Spraying
in the Vietnam War and Post-War Food Security

司会：(京大AA研) 古川 久雄

Agent Orange in the Vietnam War: Consequences and Measures
for Overcoming

(ベトナム赤十字枯葉剤被害者基金) Le Ke Son

Severe Impacts of Herbicides on Mangroves in the Vietnam War
and Ecological Effects of Reforestation

(ベトナム国立大) Phan Nguyen Hong

Twenty-Five Years Pursuit of Herbicides Damages of the Vietnam War:
Tracing the Transition of Environment and Human Health

(岐阜大) 中村 梧郎

War Time Herbicides in the Mekong Delta and the Implication
on Post-War Wetland Conservation

(ベトナム国立大) Tran Triet 他

Food Security in Postwar Vietnam

(アンザン大) Vo-Tong Xuan

セッション2：Dynamism of Health and Ecology

司会：松林 公蔵, 西淵 光昭

サブセッション1：Global Aspects of Disease Study

Ageing, Disease and Ecology

松林 公蔵

Chronomes, Ageing and Disease

(東京女子医大) 大塚 邦明他

Application of Geographical Information System

in International Health

(長崎大) 谷村 晋・溝田 勉

サブセッション2：Infectious Diseases

A. Global Infection

Molecular Epidemiology of *Vibrio cholerae*: Masquerade of a Deceptive Pathogen

(インド国立コレラ・腸管疾病研究所) G. Balakrish Nair 他

- Emerging Infection by a New Clone of *Vibrio parahaemolyticus*: An Infectious Disease That Emerged in Asia and Spread to the World 西瀨 光昭
- B. Local Infection
- Burkholderia pseudomallei* and the Environment (マラヤ大) S. D. Puthuchery
- Effects of Intensification of Traditional Farming System on the Environment and Bio-Safety of Human Population:
- Nipah Virus Experience (イボ獣医学研究所) N. Muniandy, Aziz Jamaluddin
- Malaria Control Studies in Indonesia and Solomon Islands (自治医大) 石井 明他
- C. Social Factors and Infectious Disease
- Clinical Ecology of Vector-Born Diseases in Southeast Asia (昭和大) 荻原 理恵, (日医総研) 五味 晴美
- サブセッション 3 : Environmental Health
- Contamination and Toxic Effects of Persistent Organic Pollutants in Wildlife and Humans from Asia (愛媛大) 田辺 信介
- Water Quality Problems in Livelihood in Bangladesh and Kazakhstan: Natural Environment as a Local Area 安藤 和雄, (京大 AA 研) 石田 紀郎
- セッション 3 : People's Strategies in Eco-Resources Management
- サブセッション 1 : Development Policy in Vietnam's Northern Mountain Region 司会 : 山田 勇
- Development Policies and Development Trends in Vietnam's Northern Mountain Region A. Terry Rambo
- Agricultural Intensification and Diversification in the Northern Mountains Region of Vietnam: A Case Study of Cash Crop Development in Moc Chau District of Son La Province 柳澤 雅之
- Changes in Composite Swiddening Systems in Vietnam's Northern Mountain Region in Response to Integration into the Market System (ハノイ農業大学) Tran Duc Vien
- Changes in Land Use in a Black Thai Community in Response to Changes in the National Land Management Policies (フンボルト大) Thomas Sikor, (ベトナム国立大) Dao Minh Truong
- サブセッション 2 : Environmental Policy and Land Resources Management in Laos 司会 : 田中 耕司
- Upland Natural Resources Management Strategies and Policy in the Lao PDR (ラオス農林業省) Phouang Parisak Pravongviengkham
- Aquatic Eco-Resources Management and Its Changes in Laos (京大 AA 研) 岩田 明久
- Changing Aspects of Shifting Cultivation in Northern Laos: Land Allocation Policy and Commercialization of Crop Production 河野 泰之他
- Management of Non-Timber Forest Products in Laos: Changes under Market-Oriented Production System (京大 AA 研) 竹田 晋也
- サブセッション 3 : Eco-Technological Approach for an Alternative Development 司会 : 安藤 和雄
- Eco-Technology and Rural Development: India's Experiences: Case Study of Villagers' Taxonomy of Soils in South India (スワミナタン研究財団) K. Balasubramanian
- A Proposal of Asian Eco-Technology Networking for Eco-Resources Management 海田 能宏
- 「ディスカッション」 司会 : 河野 泰之

(13) 研究会「環ヒマラヤ広域圏における生態資源利用の比較地域間研究」

略称「環ヒマラヤ研究会」は、ヒマラヤを中央におき、その周辺を広域的にとらえ、東南アジア、南アジア、西アジア、チベット、モンゴルの計5大生態圏における生態資源と社会の変容過程を把握しようとするものである。これまで数年間、このテーマにそって研究会を行ってきているが、本年度は、下記の4つのテーマについて討議した。原教授は、イランを中心に、アフガン周辺の農業や人文地理について、最近の情勢と、最近翻訳された古典について紹介した。ケシャブ助教授はネパールでの調査歴が長く、農村開発の戦略について理論的な説明があった。最近マオイストのゲリラやテロ活動がネパール中に広がり、調査が難しいという指摘があった。鹿児島大の総合博物館に着任したばかりの落合助教授は、大陸部山地東南アジアの生活文化の中での有用植物群について報告した。吉川教授は、アラビア半島、中国、シベリアなどの乾燥地に生育する針葉樹の生理生態を詳しいデータに基づいて論じた。

2002年1月28日

「周辺国からみたアフガン」

(大東文化大) 原 隆一

「ネパールの農村開発」

(広島大) Keshav L. Maharjan

2002年3月19日

「東南アジア大陸部山地の有用植物——生活文化からの視点」

(鹿児島大) 落合 雪野

「乾燥地に生育する針葉樹の生態」

(岡山大) 吉川 賢

(14) International Workshop on “Development of Slopeland Agriculture in Mainland Southeast Asia” (於チェンマイ、2002年3月14～17日)

チェンマイにおいて、東南アジア大陸山地部の農業や環境保全、資源管理をトピックとする国際ワークショップを開催した。このワークショップは、International Center for Research in Agroforestry (ICRAF), Resources Policy Support Initiative (REPSI) of World Resources Institute (WRI), JSPS バンコク連絡事務所と共同で開催したもので、ベトナム、ラオス、タイ、アメリカ、日本から約50人の研究者や大学院生が出席した。Nutrition Cycling and Environmental Degradation, People's Livelihood and Poverty Alleviation, Spread of Cash Economy and Commercialization of Agriculture と題する3つのセッションで、合計18のペーパーが発表され、焼畑農業の潜在生産力と持続性、傾斜地利用の在来技術、天然資源利用、コミュニティーと政府の役割、流域管理などに関して活発な議論が交わされた。発表されたペーパーは以下のとおりである。

オープニングセッション

Slopeland Agriculture in Tropical Asia

Agroforestry Landscapes in the Mountain Mainland Southeast

Asia (MMSEA) Ecoregion: Mosaic Patterns of Landuse for Livelihoods and Watershed Services at Multiple Levels of Management

(国際アグロフォレストリー研究センター) Divid E. Thomas

セッション1: Nutrition Cycling and Environmental Degradation

Evaluation of Soil Properties in Agroforestry Systems Using

Paper Mulberry

司会: (大阪市大) 名波 哲

(京大名誉教授) 久馬 一剛

司会: (京大) 縄田 栄治

(高知大) 岡林 勇航

- Evaluation of Soil Fertility and Farming Systems in a Shifting Cultivation Area of Northern Laos (高知大) 渡邊 悦子
- Use of Viny Legumes as Seasonal Fallow: An Integrated Shifting Cultivation in Northern Thailand (メジョー大) Somchai Ongprasert
- Soil Burning Effect under Shifting Cultivation of Karen People in Northern Thailand (高知大) 田中 荘太
- Land Degradation in Cultivated Fields in Gentle Slopeland of Northeast Thailand (コンケン大) Patma Vityakon
- Nutrient Flow in a Small Watershed as Affected by Components of Water Balance (ハノイ農業大) Nguyen Van Dung
- Soil Weathering, Toposequence and Agricultural Productivity in Northern Vietnam (高知大) 櫻井 克年
- セッション2 : People's Livelihood and Poverty Alleviation 司会 : 河野 泰之
- Pedological Examination of Traditional Land Evaluation by Karen Ethnic Group in Northern Thailand (宇都宮大) 平井 秀明
- The Role of Natural Bio-resources in Household Food Security in Northwest Laos 柳澤 雅之
- Soil Fertility and Cropping Systems of Slopeland Agriculture in Northwestern Vietnam (ベトナム農業科学院) Le Quoc Thanh
- Feasible Solutions for Sustainable Land Use in Upland Areas (ベトナム農業科学院) Le Quoc Doanh
- Local Capacity Building for Poverty Alleviation in Rural Thailand (エコ・コミュニティ・ビガー財団) Prateep Verapattananirund
- セッション3 : Spread of Cash Economy and Commercialization of Agriculture 司会 : 柳澤 雅之
- Impact of Cash Economy on the Livelihood of Shifting Cultivators in Northern Laos (京大) 岡田 尚也
- Possibility of Intensification of Lowland and Slopeland Agriculture in Northern Laos (京大) Thatheva Sapangthong
- REPSI Work on Multi-stakeholder Approaches to Watershed Management (トゥードゥック農林大) Hoang Huu Cai
- Upland Natural Resources Policy: MMSEA Experience with Decentralized Approaches (世界資源研究機構) Nathan Badenoch
- 「ディスカッション」 司会 : A. Terry Rambo

(15) 拠点大学セミナー

“Networks in Comparative Historical Perspectives and on U.S. Hegemony and the Questions of Technocracy” (2002年3月25～26日)

日本, タイをはじめとした東南アジアから約30名の学者の参加をえて, ネットワークとヘゲモニーに関する国際ワークショップが3月25日と26日に開催された。このワークショップは過去3年間の共同研究の成果発表の場であったが, 議論は多岐にわたり, 新たな視点も多数指摘された。アジア危機への東南アジア諸国の対処, ガバナンスの問題, この地域のネットワークの現状, 政治経済文化におけるヘゲモニーなどがその一例である。政治・歴史・文化の専門家が発表し,

これに経済学者が参画してコメントをするという、インターディシプリナリーなワークショップは大いに刺激に富むものであった。

The Dynamics of Networks, Technocracy and American Hegemony in Southeast Asia	白石 隆
Networks as the Foundation of Regional Economic Growth and Crisis	濱下 武志
The Question of Foreigners: Bai Ren and the (Re) Making of Chinese and Philippine Nationalism	Caroline S. Hau
Manga and Anime and the Question of the Cultural Hegemony	(京都文教大) 白石 さや
The Formation of Concepts of State-Society, Justice and Equality in Thailand and Southeast Asia	(タマサート大) Thanet Aphornsuvan
Changes in Thai Rural Society: A Literary Perspective	(チュラロンコン大) Trisilpa Boonkhachorn
The Role of English in Siam	(チュラロンコン大) Dhiravat Na Pombejra
Mahathirism after the Asian Crisis and beyond Mahathir	(マレーシア科学大) Khoo Boo Teik
Indonesia under and after Gus Dur	(シンガポール国立大) Vedi Hadiz
The Resurgence of U. S. Influence in Thai Economy and Southeast Asia Policy: 1990 – 2001	(チュラロンコン大) Ukrist Pathmanand
Post-Crisis Economic Impasse and Political Recovery in Thailand: The Resurgence of Economic Nation	(タマサート大) Kasian Tejapira
Thai Social Movements in Post-Crisis Thailand	(チュラロンコン大) Pasuk Phongpaichit
The Small Arms Industry in Thailand and the Asian Crisis	(チュラロンコン大) Chalong Soontravanich
People Power II in the Philippines: Mob Rule or Democratic Uprising?	(神戸大) 片山 裕
The Thai Technocracy Reconsidered	(東大) 末廣 昭
The Malaysian Technocracy and Mahathirism	(明治大) 鳥居 高
Filipino Neo-liberalism before and after the Crisis	(フィリピン大) Teresa Encarnacion Tadem

4. コロキアム

東南アジア研究センターの研究部は、研究スタッフの相互理解の促進と問題提起による議論の活性化を目的として、所員会議終了後、所員討論会を実施してきた。一方、1998年度にアジア・アフリカ地域研究研究科が新たに開設され、同研究科との連携が模索されることになり、1999年3月には、東南アジア研究センターと同研究科は、合同で地域研究フォーラム「21世紀の地域研究」を開催した。同研究科との連携を模索する一環として、従来、所員向けに開催されていた所員討論会を発展的解消、東南アジア研究センターの関係者ばかりでなく、同研究科の学生、スタッフの参加を呼びかけ、月例の所員会議後に、討論会ではなく研究会として東南アジアコロキアムを1999年度から開始した。また、1999年度からは、外国人研究者が所員会議に正式に出席することになったことと、外国人助教授がセンター研究部スタッフとして加わったことを契機に、所員会議の使用言語が主に英語となったことを受け、東南アジアコロキアムも英語を主な使用言語とし、外国人研究者が討論に積極的に参加出来るような研究会に改めた。2000年10月以降の発表題目と報告者は以下のとおりである。

- 2000年 10月26日 “Introduction to Ecological Medicine for Non-Medical Ecological Researchers”
松林公蔵
- 11月22日 “Intensified Agricultural Systems in the Red River Delta of Vietnam”
柳澤雅之
- 12月21日 “Weaving Saron, Weaving Network in the Makassar Straits” 瀧元聡子
- 2001年 2月22日 “Retelling the Story: Christian Missionaries Meet the Karen
in Early Nineteenth Century Burma” 速水洋子
- 3月22日 “Educating the Modern Malays: Colonial Education and Malay Identity
in British Malaya” 左右田直規
- 4月26日 “Bornean Borderlands in Perspective” 石川 登
- 5月24日 “Myanmar Forestry: Past, Present, and Probable Future” Saw Kelvin Keh
- 6月28日 “Theravada Buddhists in Mainland Southeast Asia: The Regional Variety
of Practices in Comparative Perspective” 林 行夫
- 7月11日 “Trade Unions in Democratizing Indonesia: Enterprise Unions and
Community-based Unions-Uprising or Formal Institutionalization?”
水野広祐
- 9月27日 “Individual-Oriented and Community-Oriented Farming Techniques:
A Comparison of Crop Management” 田中耕司
- 10月25日 “Villagers’ Self-perception of Their Life Situation in Vietnam’s Northern
Mountain Region” A. Terry Rambo
- 11月22日 “Globalization and Malaysia” 吉原久仁夫
- 12月20日 “A Pilgrimage-Oriented Island: Another Religious Practice in the Makassar
Straits” 瀧元聡子
- 2002年 1月24日 “Rural Development Studies in Bangladesh: An Outcome from 15-years’
Participation” 海田能宏
- 2月28日 “Symbols of Power in a Philippine Province” Patricio N. Abinales
- 3月28日 “Global Area Studies Revisited” 立本成文
- 4月25日 “Technology Transfer in the Electronics and Electrical Sector in Malaysia” Lai
Yew Wah

5. その他の研究会

上記のシンポジウム、研究会、コロキアムのほかに、センタースタッフを中心としてテーマ別に組織された研究会や、センターの客員部門の外国人研究員や折々にセンターを訪問する外国人研究者による特別研究会などがあり、常時センター内外の人々の出入りがたえない。

6. 東南アジアセミナー

センターでは1976年以来毎年、主に東南アジアおよびその周辺地域の学術的研究に関心を持つ学生または大学卒業者を対象として受講者を募り、東南アジアセミナーを実施している。近年は、年ごとに異なるテーマを決め一段とセミナー色を濃くしてきた。

2001年度のセミナーのテーマと内容、講義題目、講師の一覧を揚げておく。

2001 年度

テーマ「東南アジアの歴史万華鏡——21世紀を迎えて」（9月3～7日）

文献史学に限定されない、学際的でフィールドワークを駆使した歴史への視点を交えながら、東南アジア地域の一貫性と多様性を考えようという趣旨のもとで5日間の講義と討論が行われた。前半は、自然資源の分布と交易を中心に地域を広域的に把握し、技術や生活から地域の生成過程を歴史的に考えることを企図した。社会・文化的側面からアプローチする後半では、まず言語・芸能・儀礼を通して民族などの集団の歴史意識をたどり、次に正史に記されることのない人々について、その思想と実践を通して別の視点から歴史を考えることを学んだ。最後に、生態学・歴史学それぞれの立場から地域単位としての東南アジアを歴史的な視点から考察し、今後の東南アジア研究のあり方を議論した。

〈モノの流れ・技術・生活Ⅰ〉	「芸能にみる歴史意識」
「東南アジアの交易と他地域との関係史」	(三重県立看護大) 馬場 雄司
濱下 武志	「儀礼にみる歴史意識」 (名古屋工大) 永渕 康之
「山地資源と東南アジアの交易史」	〈思想と実践〉
Deanna Donovan	「マイノリティと歴史叙述」 Caroline Hau
〈モノの流れ・技術・生活Ⅱ〉	「実践仏教と地域の歴史」 林 行夫
「海産資源からみた地域の歴史」	「女性のオーラルヒストリー」
(名古屋市立大) 赤嶺 淳	(民博地域研) 石井 正子
「技術からみた地域の歴史」	〈過去から未来へ〉
(東京外大) Christian Daniels	「生態学からみた東南アジア——過去と未来」
「村落生活からみた地域の歴史」(東大) 桜井由躬雄	田中 耕司
〈集団と歴史意識の表象〉	「歴史学と21世紀の東南アジア研究」
「言語の分布と地域の歴史」(東京外大) 新谷 忠彦	(阪大) 桃木 至朗

第4章 資料収集および情報処理

東南アジアの研究を深化、発展させるために各種の資料収集がとりわけ重要なことは言うまでもない。1965年に図書室が開設されて以来、東南アジア地域にかかわる専門書を中心に収集を進めてきた結果、2002年3月31日現在約12万冊（洋書約97,000冊、和漢書約23,000冊）を登録し、所蔵するにいたった。これらの資料のうち単行書の8割弱は、インターネット上で検索可能である。現地語資料を除く全蔵書に学外からもアクセスできるように、1999年11月より溯及入力を開始している。研究資料としては次のような特記すべき資料がある。

1. 現地語資料

1983年度以来、東南アジア諸地域の言語で出版された文献の組織的収集を目指して、特別予算の要求を行っている。1983年度から5カ年間の第一次収集計画、および1988年度からの10カ年間の第二次収集計画を終え、1998年度からの5カ年間の第三次収集計画が始まった。現地語図書資料は、レファレンス図書を除いてタイ語約7,000冊、インドネシア語約6,000冊、マレー語約330冊、ビルマ語210冊があり、その他に特殊コレクション（別置）としてフォロンダ・コレクション7,000冊、チャラット・コレクション9,000冊、オカンボ・コレクション700冊がある。

また、1986年度からは、東南アジア諸語文献研究部門が新設され、東南アジアから書誌学者や目録作成の専門家を招聘することができるようになり、彼らの協力によりこれらの資料の整理もできるようになった。「チャラット・コレクション」については3巻よりなる冊子体の目録と「フォロンダ・コレクション」の蔵書目録がある。今後もさらに充実した収集を目指している。タイ語資料についてはセンター独自のタイ語によるデータベースを構築している。

2. マイクロフォーム

1971年以降、「インドネシア関係文献マイクロフィッシュ」の一部を継続的に購入したのを初め、その後機会のあるごとにその充実を図ってきた。この結果、現在までにマイクロフィルム、マイクロフィッシュをあわせて約15,000件を所蔵している。このうち、フィルムは、東南アジア諸国統計資料、インドシナ三国近・現代史資料、第二次大戦下の東南アジア関係資料などを含み、フィッシュは、コーネル大学およびオランダ王立言語民族文化研究所が所蔵するインドネシア関係資料を主としている。

3. 雑誌

東南アジアを専門に対象とする雑誌は、創刊号から揃っている *BEFEO* を初めとして50タイトル以上に及ぶ。東南アジアを含むアジア一般、熱帯、開発に関するタイトルは43点である。このほかすでに刊行されていない雑誌もかなりあり、東南アジア関係では有名な Logan の *JIAEA*

や *Djawa* をも含めて 18 タイトル、アジア関係では、London から出た *Asiatic Quarterly Journal* およびその後誌 (1886-1912) や *Mondes Asiatiques* など 12 タイトルある。これらの地域関係雑誌の多くは欧米発行のものであるが、東南アジアの大学・研究機関の刊行する雑誌も増えてきており、できるだけ収集するように努めている。その他 *Prisma*, *Tenggara* などのような各国語の週刊誌、総合雑誌、文芸批評誌も定期購読している。年刊の逐次刊行物を除いて約 1,500 タイトルはインターネット上で検索が可能である。

4. 統計

東南アジア、東アジア諸国の政府刊行物、および国際機関の刊行物を中心に収集している。このうち継続して購入している刊行物は 26 種である。国民所得、財政、金融、貿易、労働、人口など経済統計が大半で、国別ではインドネシアが多く、地方統計も多く含まれている。その他に東南アジア各国のセンサスを、刊行の都度、可能な限りで収集している。

5. 地図

所有する地図は東南アジア地域はもとより、インド、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、パキスタン、中国、朝鮮、オーストラリア、太平洋諸島および日本周辺と、ほぼ南アジアから東アジア全域をおおっている。製作年代も、戦前のものから近年の航空測量によるものまで、多岐にわたっており、現在約 30,000 枚に及んでいる。この中には、旧陸地測量部による南アジア、東南アジア、東アジアの 2 万 5 千分の 1、5 万分の 1 地形図等、歴史的にみても貴重なコレクションもある。また、数は少ないが、東南アジア各国の土地利用図、地質図、植生図などの主題図も含まれている。なお、所蔵する地図や人工衛星画像データについては、COE 形成基礎研究プロジェクトの助成を得て、オンラインで検索することが可能になった。詳しくはセンターのホームページを参照されたい (<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>)。

6. 人工衛星画像データ

1978 年から人工衛星画像データの収集を始め、現在 3 千数百シーンの画像データを所蔵している。対象地域は、東南アジア全域、インド亜大陸東半分からバングラデシュ、南中国の一部および日本の一部である。とくに東南アジア大陸部は隈なくカバーされている。1970、80 年代は Landsat MSS の 100 万分の 1 の白黒ポジフィルム (バンド 4、5 および 7) を中心に集めていたが、1980 年代末から Landsat TM や MOS の 25 万分の 1 フォルスカラプリントに切り換え、近年はデジタルデータを収集している。

センターでの人工衛星画像データ利用は、従前、目視による、広域の地形、土地利用、植生、水文環境などの判読に限定されていたが、近年は、デジタル処理を行うことにより、また他の情報と重ね合わせて地理情報システムを構築することにより、より多様な利用を進めている。なお、所蔵する画像データについてはセンターのホームページから検索可能である。

7. 情報処理

情報処理室は、従来の技術だけでなく最新の技術も視野に入れ、センタースタッフが快適に利用できかつ信頼できるインターネットサービスを提供するための様々なネットワーク資源管理・運営を行っている。また、Webサーバー、メールサーバー、ファイルサーバー、データベースサーバーのようなサーバーの管理・運営、センタースタッフが関わる情報技術に関する技術支援や種々のトラブル対処を日常の業務としている。

これらのサービスのほか、情報処理室は多言語に対応したパーソナルコンピュータや画像処理（スキャナーによるデジタル化や画像の加工等）が可能な機器およびネットワークプリンタ等を備え、スタッフのみならず外国人研究者が随時利用できるよう、情報処理環境を整えている。

また、情報処理室は、センターがWeb上で行うあらゆる情報発信・公開に関して技術面での支援を行っており、これが情報処理室の担う大きな業務のひとつである。

以下にセンターが提供している情報発信のサイトを掲げるので、利用されたい。

- メインサーバー (<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>)

センターの情報発信のためのWebシステム、情報伝達のためのメールやメーリングリストシステムが稼働している。

- 共同利用サーバー (<http://coe.asafas.kyoto-u.ac.jp>)

COEプロジェクト「アジア・アフリカにおける地域編成」に関する情報発信を行っている。

- タイ語図書データベースサーバー (<http://library.cseas.kyoto-u.ac.jp/cseas/>)

タイ語で直接検索できるタイ語図書データベース

- Map コレクション

(<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp> のデータベース項目内)

センターが所蔵する地図をオンラインで検索できる。

- 人工衛星画像データベースサーバー

(<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp> のデータベース項目内)

センターが所蔵する人工衛星画像をオンラインで検索できる。

- フォトギャラリーサーバー

(<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp> のデータベース項目内)

センタースタッフが調査中に撮影した写真をデジタル化して作られたフォトギャラリー。収録枚数は10,000枚以上に及ぶ。カテゴリー、地域、撮影者別などで検索ができ、閲覧できるデータベースサーバー。

- Kyoto Review of Southeast Asia

(<http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp>)

2002年3月に創刊された、和英他東南アジア諸言語によるインターネットジャーナル

第5章 研究支援活動

1. 海外連絡事務所

(1) バンコク連絡事務所

バンコク連絡事務所は1963年に開設された。それ以来、センターや関連部局・機関の教官が交代で駐在し、現地の研究機関や研究者との交流の拠点として活発な活動を展開してきた。開設当初はまさに現地調査のベースキャンプとしての役割が重視されたが、交通・通信手段の発達、現地国の受け入れ態勢の変化、日本側研究者の多様化につれて連絡事務所の役割も変化してきた。近年の連絡事務所の役割は、情報収集拠点、情報発信拠点、現地調査のベースキャンプの3つに大きく分けることができる。連絡事務所の最も重要な機能は情報収集である。現地語図書や現地国の統計資料・地図類は主として連絡事務所を経由して購入している。購入する物品を事前に確認することにより、より有用な資料を効率的に収集することができる。また現地研究者との日常的な接触を通じて、National Research Council of Thailand やチュラロンコン大学、タマサート大学、カセサート大学、チェンマイ大学、コンケン大学などの現地研究機関や現地研究者の学術動向を収集している。情報発信拠点としての機能強化は、近年、強く認識されるようになった。そのため、ワークショップやレセプションを開催し、幅広い分野の現地研究者との学術交流を深めている。また現地機関や研究者からのさまざまな問い合わせの窓口となっている。このような活動は、タイにおけるセンターのプレゼンスを高めるうえで多大な貢献をしている。さらにベースキャンプとしての機能も未だ重要である。研究許可の取得からカウンターパートとの折衝、ロジスティックの手配、事故の際の対応など、円滑にフィールドワークを実施するためのサポートを必要に応じて提供している。これまで、バンコク連絡事務所はタイとの交流拠点と認識されてきた。しかし所員の研究関心は、近年、急速にタイ以外の東南アジア大陸部諸国へと拡大しつつある。そこでバンコク連絡事務所は、東南アジア大陸部の交流拠点として、より活発な活動を周辺国をも視野に入れて展開できるよう、連絡事務所のさまざまな態勢を見直しつつある。

現在の連絡事務所の住所は以下のとおりである。

8 B, Raj Mansion, 31 - 33, Soi 20, Sukhumvit Road,

Bangkok 10110, Thailand

Tel: + 66 - 2259 - 8485, Fax: + 66 - 2259 - 8419

e-mail: bangkok@cseas.kyoto-u.ac.jp

(2) ジャカルタ連絡事務所

ジャカルタ連絡事務所は、1970年10月に、ジャカルタのクバヨラン・バルのラジャサ通りに

開設され、1973年に運営経費が国の予算として認められて正式な開設の運びとなった。その後同事務所は、一度ジャカルタのメンテン地区で開設されたことを除けば、以降クバヨラン・バル地区内で事務所をもってきた。

センターでは、1983年度に「東南アジア諸国現代政治・社会動向分析のための地域資料緊急整備5カ年計画」が発足し、東南アジア諸語の資料収集を開始した。ジャカルタ連絡事務所は、この計画の一環として、インドネシア語やジャワ語などの各地の言語で書かれた資料およびオランダ語の資料、さらに統計類の収集を開始した。これらの図書の収集は今日まで継続しており、ジャカルタ連絡事務所の重要な業務となっている。

官制化以前からの開設は、1968年よりインドネシア科学院 (LIPI) 傘下の LEKNAS (社会経済研究所) と共同で実施されていた南スマトラ州地域経済調査を円滑に実施するという目的もあった。以降も、同連絡事務所はセンターとインドネシア各地の大学等研究機関との共同研究の円滑化を図ってきた。今日、センターは、ハサヌディン大学、インドネシア科学院、ボゴール農業大学、インドネシア国立国土地理調査機構と研究交流協定を結び、また科研プロジェクトなどでその他の研究機関とも共同研究を実施しており、その円滑な推進のため同連絡事務所が大いに活用されている。

また、同連絡事務所は、センターのみならず京大内の他の研究機関、ひいては日本国内の研究機関のインドネシアにおける研究や教育の円滑化のためにも協力してきた。具体的には、これら研究機関が調査許可を取得するための支援や、インドネシアから日本への留学生や研究者の派遣に対する支援、インドネシアの教育研究機関による日本側との共同研究への助言などである。

さらに、同連絡事務所はジャカルタにおけるセミナーの開催なども実施してきた。今後、センターとインドネシア内機関との研究協力関係をさらに東南アジア島嶼部の各地にも広げるための拠点として活用することも構想されている。

現在の連絡事務所の住所は以下のとおりである。

Jl. Kartanegara No. 38, Kebayoran Baru
Jakarta Selatan, 12180, Indonesia
Tel: + 62 - 21 - 7262619, Fax: + 62 - 21 - 7248584
e-mail: jakarta@cseas.kyoto-u.ac.jp

2. 自己点検・評価

自己点検・評価委員会の目的は、東南アジア研究センターの研究活動を一層活性化させるため、所員の自己点検ならびに評価の円滑な実施にある。本委員会は、1993年8月16日の教授会決定をうけて正式に設置され、東南アジア研究センター所長、各部門長、京都大学自己点検・評価実行委員会の本センター委員、ならびに事務長から構成され、委員長および副委員長のもとで、毎年6人の委員が任命され委員会運営にあたっている。

すでに1993年より5年間にわたり所員からの報告書の提出が行われたが、1998年度には更に充実した自己点検と評価システムの確立のため、大幅な手続きの改編が本委員会のもとで図られた。「京都大学東南アジア研究センター所員自己点検・評価レポート」においては、所員は「研究業績についての自己評価」と「所員活動記録」の二部構成からなる報告書の提出が義務づけられている。第一部の「研究業績についての自己評価」のために、所員は「東南アジアに関する研究業績を通してどのように知的存在感を示しているか」についての他者評価を前提にしたレポートを提出し、第二部の「所員活動記録」では、「研究」（現在の研究テーマ・トピック、研究業績、共同研究、学会活動ならびに運営、補助金および奨励金受領と受賞実績など）、「教育」（学内外講義担当、論文指導、学位審査など）、「管理運営」「社会的貢献」「一年を振り返っての所感・期待・評価」を報告する。これらは所員一人ひとりが、毎年の活動を真摯に自己評価するよい機会となっている。

3. 広 報

研究活動広報のため、東南アジア研究センターでは、和文要覧、*CSEAS Report* とニューズレターを発行している。和文要覧と英文要覧（*CSEAS Report*）は隔年刊で、和文要覧は本冊で11冊目、*CSEAS Report* は12冊目が2001年に出版された。1979年創刊のニューズレターは、以後現在に至るまで春と秋の年2回発行し、センターの現況を関係者に伝えている。また広く学生や一般にセンターを紹介する冊子として、パンフレット（日・英）を発行している。

さらにセンターのホームページ（<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>）で、研究会の案内、スタッフ紹介、研究プロジェクト、出版物、公募情報など最新の情報を発信している。センター所蔵の地図・人工衛星画像・写真もホームページで公開し始めており、今後一層の充実を図るつもりである。

4. 日本財団アジア・フェローシップ（API フェローシップ）

日本財団アジア・フェローシップ（API フェローシップ）は、2001年にアジア諸国の知識人・諸機関の協力に基づいて設けられた。API フェローシップは、Public Intellectuals（公共領域で活躍する知識人）、即ち、学術研究者、メディア関係者、芸術家、NGO リーダー等、世論形成に影響力を持ち、自ら活動の実践に参画する人々、または将来そのような社会的役割を担う能力と意欲をもつ人々に、近隣諸国における研究・交流の機会を与え、地域的、国際的な知的共同作業を奨励するプログラムであり、センターが、日本のパートナー機関となっている。2002年時点で参加国は、インドネシア、フィリピン、タイ、マレーシア、および日本である。詳細情報は、API ホームページ（<http://www.ikmas.ukm.my/api/contact>）を参照されたい。

第6章 大学院教育

農学研究科：熱帯農学専攻（協力講座）

1981年に農学研究科に熱帯農学専攻が設置され、センターの農学系の教授、助教授らが協力講座として3講座（熱帯稲作論、熱帯地文環境論、熱帯水文環境論）を担当してきた。熱帯農業に関連した環境、生態、農村発展論にわたって長期のフィールドワークを中心として教育訓練を行い、これまでに計27名の修士ならびに博士修了者を送り出してきた。この内、留学生は11名で、大半が博士号を取得して帰国し、それぞれの職場で活躍している。

なお、熱帯農学専攻は、農学部・農学研究科の改組にともなって1996年をもって廃止された。協力講座としては、現在も数名の博士課程在学生の教育を続行している。

人間・環境学研究科：東南アジア地域研究講座（協力講座）

人間・環境学研究科の第2専攻（文化・地域環境学専攻）が1993年度に発足するとともに、センターの教授・助教授ほぼ全員が東南アジア地域研究講座（協力講座）担当として参画し、ほぼセンターの5部門14分野に沿った授業科目を設けて学生を募集してきた。各年度の入学者数は、1993年度6名（うち留学生1名）、94年度4名（うち留学生3名）、95年度4名、96年度3名、97年度3名である。今や10数人の地域研究者が巣立ちつつある。1998年度のアジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）の発足にともない、同年度より学生募集をしていない。

2002年度現在の在籍者は、博士課程に4名である。それぞれが東南アジア諸地域に自分のフィールドを持ち、長期にわたる調査研究を進めている。

アジア・アフリカ地域研究研究科：東南アジア地域論講座（協力講座）

1998年4月、アジア・アフリカ地域研究研究科が発足した。この研究科は、東南アジア地域研究専攻とアフリカ地域研究専攻の2専攻から構成されるが、東南アジア地域研究専攻の中に連環地域論講座を置き、東南アジアとアフリカの両地域に接続するヒンドゥー・イスラーム両世界をも含めて、地域間比較を視野に入れた地域研究教育を進めていくことにした。それぞれの地域の歴史が育んできた生態・社会・文化の固有性を解明するとともに、諸地域が抱える現代的な課題についても地域研究の方法を通じて考究していく。本研究科の構成は付図のとおりである。

東南アジア地域研究専攻は、3基幹講座を創設したものであり、一方アフリカ地域研究専攻は、人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻のアフリカ地域研究講座（旧アフリカ地域研究センター）を移行させたものである。本研究科は5年一貫制の博士課程を設けており、学生定員は東南アジア地域研究専攻14名、アフリカ地域研究専攻12名の計26名である。

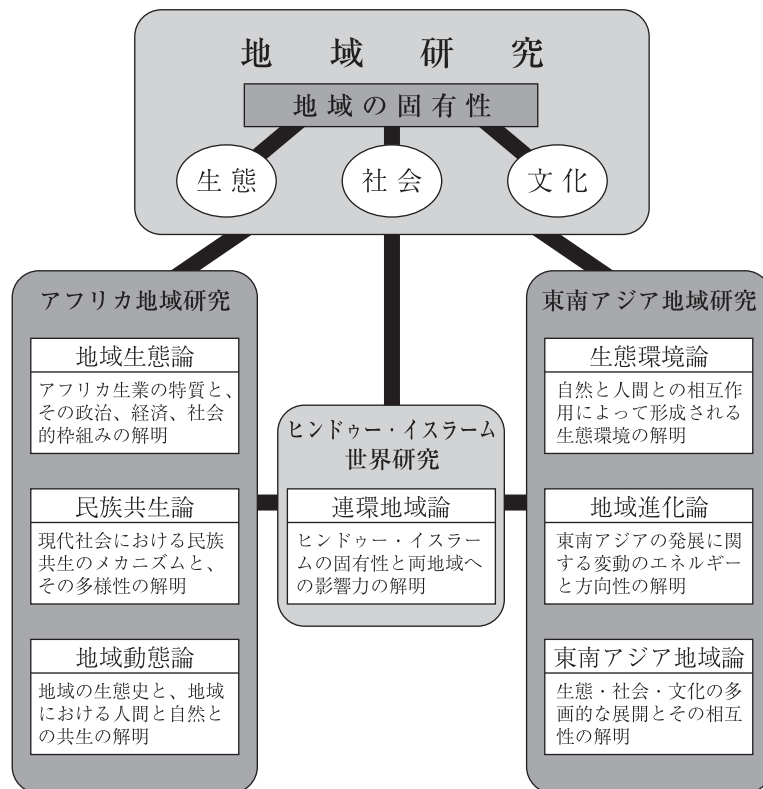
センターは、東南アジア地域研究専攻の東南アジア地域論講座全体を協力講座として担当し、

このために教授5，助教授3名をあてている。さらに，研究科共通科目担当にその他の教授・助教授全員があたり，全センターをあげて大学院教育に参加することとなった。

本研究科の東南アジア地域研究専攻の教育面における大きな特徴は，集団指導体制である。この専攻に入学した1回生は主指導教官1名に加えて副指導教官2名を自主的に選ぶことができる。この制度によって，専攻としては比較的幅広い分野から学生をリクルートすることができ，また学生は比較的自由に研究テーマを選ぶことができる。学生は，5年一貫制教育の中で，長期にわたる本格的なフィールドワークを通して，地域の生態・社会・文化の相互関係を総合的に把握する能力を養うことを期待されている。

2002年5月現在，最上級生は博士論文を提出する年度を迎えるとともに，4回生以下の大半の者が長期のフィールドワークに従事している。

アジア・アフリカ地域研究研究科の構成



第7章 研究スタッフ

東南アジア研究センターの現職研究スタッフの略歴、現在の研究テーマ、主要な研究業績などを紹介する。各研究スタッフは、研究部では地域相関動態部門、人間生態相関部門、社会文化相関部門、政治経済相関部門、続いて資料部の順に配列されており、1. 最終学歴、2. 学位、3. 専門分野、4. 現在の研究テーマ、5. 略歴、6. 主要な研究業績の順である。

1. 研究部

地域相関動態研究部門

山田 勇

1. 京都大学農学部, 1966.
2. 京都大学農学博士, 1979.
3. 熱帯生態学
4. (1) 東南アジア熱帯多雨林の生態資源
(2) 地球生態系における東南アジアの位置づけ
(3) 熱帯林生態系における人と自然のかかわり
東南アジアの熱帯雨林世界は、世界の森林生態系の中でも、生物多様性、森林構造の大きさと複雑さ、資源の豊富さにおいて、群を抜いている。また、大島嶼域であることから、古くから人々の往来がはげしく、アフリカやアマゾンとは異なった特色を持っている。この東南アジアの中で、ボルネオは熱帯雨林の中心であり、また大陸部の中国雲南、ミャンマーなどは、モンスーン林の中心として、多様な資源と人々の生活が見られる。
ここ数年、これらの熱帯域の上に存在する生物から人間の生活までを含んで「生態資源」とよび、これを中心に仕事を行ってきた。
赤道直下で最も多様な生態資源は、高緯度に移るにつれて、画一化してゆく。この変容過程を地球レベルで比較調査し、最終的に東南アジアの生態像を浮かび上がらすことを当面の研究テーマとしている。そのためさらなるフィールドワークが必要となる。
5. 1975年、東南アジア研究センターに助手として採用される。1980年農林水産省関西森林育種場、1981年同関東森林育種場室長をへて、1988年より、東南アジア研究センター助教授。京都大学大学院農学研究科熱帯農学専攻助教授を兼任。1995

年より教授。人間・環境学研究科およびアジア・アフリカ地域研究研究科併任。

- 1965年以降、以下の海外研究活動を行う。1965年タイ、カンボジア、マレーシアの植物調査、1968～70年インドネシアの森林調査、1976年インドネシアの森林調査、1977年タイ、マレーシア生態調査、1978年フィリピン生態調査とインドネシア調査、1979年北米山林調査、1982、1983、1984～86年までブルネイ森林調査、1988年北米および中米の森林調査、1988～89年パプアニューギニア、インドネシアの低湿地調査、1990年タイ、インドネシア、中国、1991年マレーシア、タイ、ラオス、中国の生態調査。1992、1993年アマゾン、マレーシア、インドネシア、1994年ギリシャ、トルコ、エジプト、エクアドル、ボリビア、グアテマラ、ペルー、インドネシア、マレーシア、ブルネイ。1995年中国、ネパール、ホンコン。1996年マレーシア、ネパール、フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、チェコ、オーストリア、ポーランド、ケニア、カメルーン、フランス。1997年マレーシア、中国、アメリカ、カナダ、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、アルゼンチン。1998年マレーシア、中国、ベトナム。1999年インド、ミャンマー、ブラジル、中国、マレーシア。2000年インドネシア、中国、2001年ベトナム、ミャンマー、インドネシア、シンガポール、2002年中国、台湾。
6. (1) Forest Ecological Studies of the Montane Forest of Mt. Pangrango, West Java (I)～(IV)『東南アジア研究』13(3)–15(2), 1975–77.

- (2) 『熱帯の有用樹種』(共著) 熱帯農業研究センター, 1978.
- (3) “Ecological Study of Mangrove and Swamp Forests in South Sumatra,” (共著) in *South Sumatra, Man and Agriculture*, CSEAS, Kyoto Univ., 1980.
- (4) 「西ジャワパングランゴ山山地林における落葉落枝などの季節変化」『東南アジア世界』創文社, 1980.
- (5) 「東南アジアの低湿地林1. マングローブ」『東南アジア研究』21 (2), 1983.
- (6) 「同2. マングローブの分布」『東南アジア研究』21 (3), 1983.
- (7) 「同3. 淡水湿地林」『東南アジア研究』21 (4), 1984.
- (8) 「同4. 泥炭湿地林」『東南アジア研究』22 (2), 1984.
- (9) 『東南アジアの低湿地』(共著) 農林統計協会, 1986.
- (10) *Report on the Forest Research in Negara Brunei Darussalam from 1984 through 1986*, JICA, 1987.
- (11) *The Changing Pattern of Vertical Stratification along an Altitudinal Gradient of the Forests of Mt. Pangrango, West Java*, Kluwer, 1990.
- (12) 『東南アジアの熱帯多雨林世界』創文社, 1991.
- (13) 『熱帯雨林を考える』(共編著) 人文書院, 1992.
- (14) 「世界の森林と地球環境」渡部忠世(編著) 『現代の農林水産業』放送大学教育振興会, 1993.
- (15) *Vegetation Science in Forestry*, (共編著) Kluwer, 1995.
- (16) 『森と人との対話』(編著) 人文書院, 1996.
- (17) 『フィールドワーク最前線』(編著) 弘文堂, 1996.
- (18) 『事典東南アジア——風土・生態・環境』(編集委員代表, 共編著) 弘文堂, 1997.
- (19) *Tropical Rain Forests of Southeast Asia: A Forest Ecologist's View* (trans. by Peter Hawkes), University of Hawai'i Press, 1997.
- (20) 『アジア・アメリカ生態資源紀行』岩波書店, 2000.

阿部 茂行

1. 大阪大学経済学部, 1970.
2. ハワイ大学 Ph. D. (経済学), 1977.
3. 経済学
4. (1) タイとマレーシアのマクロ経済政策の研究
タイとマレーシアのマクロ経済運営の違いはアジア通貨危機以降だっている。経済回復は両国とも順調であることが、経済運営の違いとあいまって、興味深い研究課題となっている。制度の問題、国家と市場の役割について研究する。
- (2) 東南アジアの高齢化とセーフティネットの研究
日本のみならず東南アジアでも高齢化は今後大きな問題となる。この問題については過去2年ほどシンガポールを中心に、生産性分析を用いて、高齢労働者の生産性が意外に高いことを実証してきた。教育や熟練の重要性が分かり、今後それらをどう役立てるか、どう政策に結びつけるかが研究課題となる。同時に高齢化を見据えた東南アジア各国のセーフティネットの現状とその効率の比較調査を開始する。
- (3) マレーシア経済の実証分析
マレーシア経済全般をこれまでの文献をサーベイしつつ、新たな実証分析を行い、わかりやすいテキストを執筆する。
5. 1977年, 国連ESCAP経済担当官, 1980年京都産業大学経済学部講師, 1981年同助教授, 1987年同教授, 1991年神戸大学経済経営研究所教授, 1998年東南アジア研究センター教授。
6. (1) “The Demand for Money in Pakistan: Some Alternative Estimates,” (共著) *The Pakistan Development Review* (summer), 1975.
- (2) “Optimum Interest Rate for a Country under a Floating Exchange Rate System,” 博士論文, 1977.
- (3) “Financial Liberalization and Domestic Saving in Economic Development: An Empirical Test for Six Countries,” (共著) *The Pakistan Development Reviews* (autumn), 1977.
- (4) “Industrialization and Employment: Overview and Prospect of ASEAN Countries,” in P. M. Hauser, D. Suits and N. Ogawa (eds.),

- Urbanization and Migration in ASEAN Development*, University of Hawaii Press, 1985.
- (5) “A CGE Analysis of Income Distribution: The Case of Malaysian Economy,” *Asian Economic Journal*, 1 (2), 1988.
- (6) “Competitiveness and Exchange Rate Adjustments in Korea,” *Development & South-South Cooperation*, 5 (9), 1989.
- (7) “Industrial Relations and Their Evolution in Japan,” in Chung-hoon Lee and Funkoo Park (eds.), *Emerging Labor Issues in Developing Asia*, KDI Press, 1991.
- (8) “Development Assistance,” (共著) in K. Abe, W. Gunter and H. See (eds.), *Economic, Industrial and Managerial Coordination between Japan and the USA*, Macmillan, 1992.
- (9) 「アジアの中の南と北——援助より投資を」『アステイオン』TBS ブリタニカ, 1992. (英語版とフランス語版の Japan Echo に翻訳の上、再録)
- (10) “Malaysia Model II,” in Ichimura and Matsumoto (eds.), *Econometric Models of Asian-Pacific Countries*, Springer-Verlag, 1993.
- (11) 「国際競争力からみた為替レート——韓国と台湾のケース」高木保興・猪木武徳 (編)『発展途上国と日本』同文館, 1993.
- (12) “South Asia and Japan: Prospects for Future Cooperation,” (共著) in S. P. Gupta, William E. James, and Robert K. McCleery (eds.), *South Asia as a Dynamic Partner*, MacMillan India Ltd., 1994.
- (13) 「日本の対 ASEAN 直接投資と ASEAN との産業内貿易の発展」石垣健一・永谷敬三 (編著)『環太平洋経済の発展と日本』勁草書房, 1995
- (14) 「まぼろしのアジア経済をめぐる」『国民経済雑誌』174 (3), 1996.
- (15) “Prospects for Asian Economic Integration,” in S. Nishijima and P. H. Smith (eds.), *Cooperation or Rivalry?* Westview, 1996.
- (16) “Preparing the Way for Development Cooperation in APEC: Jumping the Aid Administration and Policy Hurdles,” (共著) in Andrew Elek (ed.), *Building an Asia-Pacific Community: Development Cooperation within APEC*, The Foundation for Development Cooperation, 1997.
- (17) *Japan: Why It Works, Why It Doesn't*, (共編著) University of Hawai'i Press, 1997.
- (18) 『アジア経済研究』研究叢書 48, 神戸大学経済経営研究所, 1998.
- (19) *Asia-Pacific Economic Linkages*. (共編著) Pergamon, 1999.
- (20) “Economic Development in China and Its Implications to Japan,” (共著) in Magnus Blomstrom, Byron Gangnes, and Sumner La Croix (eds.), *Japan's New Economy: Continuity and Change in the Twenty First Century*, Oxford: Oxford University Press, 2001.

五十嵐忠孝

1. 東京大学医学部, 1970.
2. 東京大学保健学修士, 1972.
3. 人類生態学
4. (1) 小人口学
(2) 栄養と生業機構
5. 1975年, 東京大学医学部保健学科助手に採用される。1982年, 群馬大学医学部助教授に昇任, 1984年, 東南アジア研究センターに配置換となり, 現在に至る。
1970～73年, トカラ列島でヒトの個体群生態学的調査, 1974～75年, 韓国の一農村で人口移動の調査, 1979年以降, インドネシア西ジャワ州のスダ人村落で小人口学, 栄養と生業機構に関する調査などに従事, 近年比較の観点からバリ島農村社会に調査の比重を移しつつある。
6. (1) “Change in Daily Activity Patterns during the Ramadan in an Islamic Society,” in *Proceedings of the Second International Symposium on Asian Studies, 1980*, Vol. II, Asian Research Service, Hong Kong, 1981.
(2) 「個人年齢の推定方法に関する若干の覚え書き——西部ジャワ・スダ人村落での調査から」『東南アジア研究』20 (2), 1982.
(3) “Seeking the Dates of Birth of Children: An Age-Estimation Method that Combines Dental Age with Indigenously Expressed “Time of Birth” for Use in Priangan, West

- Java,” in *Proceedings of the Fourth International Symposium on Asian Studies, 1982*, Vol. III, Asian Research Service, Hong Kong, 1983.
- (4) 「漁撈と農耕の比較生態——西部ジャワ・プリアガン地方での調査から」大塚柳太郎（編）『生態人類学』至文堂，1983.
- (5) “Locality-Finding in Relation to Fishing Activity at Sea,” in Bela Gunda (ed.), *The Fishing Culture of the World: Studies in Ethnology, Cultural Ecology and Folklore*, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1984.
- (6) 『インドネシア人類生態学調査集成』（共編）日産科学振興財団，1984.
- (7) 「西ジャワ・プリアガン高地における水稲耕作——若干の人類生態学的観察」『農耕の技術』7, 1984.
- (8) 「西ジャワ・プリアガン高地の食糧資源と人口」小石秀夫・鈴木継美（共編）『栄養生態学』恒和出版，1984.
- (9) 「インドネシアの人口，出生，死亡」『医学のあゆみ』132, 1985.
- (10) *Human Ecological Survey in Rural West Java in 1978 to 1982: A Project Report*, (共編著) Nissan Science Foundation, Tokyo, 1985.
- (11) “Some Biosocial Variables That May Account for Fertility Patterns in the Sundanese Society,” in *Health Ecological Survey in Indonesia in 1983/84*, Part 1, Department of Public Health, Gunma University, 1985.
- (12) “Biosocial Variables Affecting Sundanese Fertility, West Java,” *Man and Culture in Oceania*, 3, 1987.
- (13) 「農作業・季節・星——西ジャワ・プリアガン高地における畑地耕作をめぐる季節性と農作業のタイミング」『東南アジア研究』25 (1), 1987.
- (14) 「西ジャワ・プリアガン地方のスダ人農民社会における早婚・多産の文化・社会的背景」『東南アジア研究』25 (4), 1988.
- (15) 「ヒト・社会・出生間隔——東南アジアにおける具体像」矢野暢（編）『東南アジア学の手法』（講座・東南アジア学第1巻）弘文堂，1990.
- (16) 「早婚・高出生力・文化——プリアンガン・スダ人社会の事例」前田成文（編）『東南アジアの文化』（講座・東南アジア学第5巻）弘文堂，1991.

ソ
宋 現 鋒

1. 中国鉱業大学煤田地質学部，1992.
2. 中国科学院地理研究所，自然地理学博士，1998.
3. リモートセンシング・地理情報システム
4. (1) 東南アジア研究に関するメタデータベースの構築
(2) リモートセンシングデータを用いた分割に関する研究
私の研究分野はリモートセンシングおよび地理情報システム科学であり，主に自然資源管理および環境を観測する空間技術に関するコンピュータ・システムの開発，応用に従事している。1992年には，MSS データとドリルビット・インフォメーションによる地質構造の解析に関する研究に従事，1995年には，中国山西省，陝西省，内モンゴル隣接地区の炭坑工業が環境に及ぼす変化および将来の土地転換，河川系統への影響などを調査，他の研究者と共に地理情報システムを構築した。1996年，中国広西省の山地区域貧困削減プロジェクトに参加し，プロジェクトの管理する情報システムとデータベースの統合研究を行った。また，省政府と地方政府間における共用データの提供に関する地理情報システムを開発した。
5. 1998年9月～2000年3月，中国科技促進経済投資公司項目部研究員。2000年4月～02年3月，日本学術振興会外国人特別研究員として，京都大学東南アジア研究センターで研究に従事。これまでに参加した研究プロジェクトは以下のとおり。
 - ・ MSS データを用いた解析に関する研究 (1992～95年)
 - ・ 晋陝蒙区域に環境関連の情報システムの構築 (1995～97年)
 - ・ 山地区域の貧困削減に関する小額信貸項目の運用管理システム (1996～98年)
 - ・ 科学技術部門における投資の評価 (1998～2000年)
 - ・ Web システムと email システムの運用管理 (1998～2000年)
6. (1) “Digital Image Processing: A Practical Quantitative Method for Induced Fractures

- Analysis,” (共著) *Scientia Geologica Sinica*, 4 (3), 1995.
- (2) “Web Geographic Information System,” (共著) *Scientia Geologica Sinica*, 6 (4), 1997.
- (3) “Developing GIS Intranet,” (共著) in *Proceeding of IEAS '97 and IWGIS '97*, Beijing, 1997.
- (4) “Research on Web GIS,” (共著) in *Proceeding of IEAS '97 and IWGIS '97*, Beijing, 1997.
- (5) “Towards Chaining Geo-Computational Web Applications across Multiple Sites,” (共著) in *Proceedings of The 20th International Cartographic Conference* (Volume 4), Beijing, China, August 6-10, 2001.

藤田 渡 (2001年4月1日～2003年3月31日)

1. 京都大学法学部, 1994.
2. 京都大学博士 (人間・環境学), 2000.
3. 文化人類学
4. タイにおける国家による資源管理と地域住民の戦略
 森林保全制度の策定から実施にいたる過程を分析することで、政策策定の中核から村落社会までを含む、近代国家としてのタイの文化・社会的特質を考察する。
 特に、タイ全土の森林を一元的に管理するとの発想で作られた国家保全林制度に着目する。実際には、国家保全林に指定された森林の多くが農地化されるなど、制度と現実の間に大きな矛盾が生じている。森林局の内部では、責任を隠蔽する仕組みがある。同様に、農民と森林官の間にも、「建前」と「現実」を使い分ける戦術や駆け引きが見受けられる。森林破壊の進行と保護政策の強化に伴い、政策策定者から農民にいたる、矛盾を含んだ相互作用はより活発となり、農民は政治的に敏感になってきている。このような、国家保全林制度の策定から執行までの一連の過程を、制度と現実の矛盾の生成と、そこに関わる人々の間の森林との関わりや認識の違いに着目して分析する。
5. 京都大学東南アジア研究センター非常勤研究員 (2001年～現在)
6. (1) 「キノコとタケノコ——東北タイ農村の自然資源利用文化」『アジア・アフリカ言語文化研究』58, 1999.

- (2) 「食物をめぐる人と自然の関わり——東北タイの事例から」『東南アジア研究』37 (4), 2000.
- (3) 「野生植物利用の知識とその在り方——東北タイの事例から」『アジア・アフリカ言語文化研究』59, 2000.
- (4) “Farmers’ Views of the Forest: Perceptions of the Forest and the Natural Environment in Northeast Thailand” 『東南アジア研究』38 (1), 2000.
- (5) “Why Do They Plant Trees?: *Wana Kaset* Agroforestry Practice in Eastern Thailand and People’s Strategy,” (共著) *TROPICS*, 11 (3), 2002.
- (6) “Living in a National Park: Formation of Socio-ecological Space in a Protected Area in Northeast Thailand,” *TROPICS*, 掲載予定

大西 信弘 (2001年4月1日～2003年3月31日)

1. 東京理科大学理工学部, 1990.
2. 大阪市立大学博士 (理学), 1998.
3. 動物社会学, 進化生物学
4. 人の互恵的な関係, 利他行動, 協力関係
 人の互恵的な行動や利他行動, 協力, 共同などに関心があり、ミャンマー、バングラデシュで、漁業に携わって生計を立てている人たちの暮らしを調査している。人は、家族や友人、共同で労働をする仲間たちと様々な集団を形成し、個々が様々な関係を持つなかで生活している。また、共同で仕事をする仲間をたいして、家族/親類というような認識をすることもある。このような社会の中で関係を持ちながら存在する個を理解するには、個々の間にどのような関係があるのかを理解することが重要だと考える。とくに、このような家族観のなかでどういった関係が見られるのかを明らかにすることが必要であろう。そこで、集団内の人々の協力や共同がどのように行われているのか、私たちが進化の産物であるという立場から理解を深めていきたいと考えている。
5. 京都大学東南アジア研究センター非常勤研究員 (2001年～現在)
6. (1) 「カゴシマオコゼ」『伊豆海洋公園通信』2 (10), 1991.
- (2) 「宇和海内海湾の転石域における浅海魚類相

- ラインセンサス法による湾内および他地域との比較」(共著) *Japanese Journal of Ichthyology*, 41, 1994.
- (3) 「日本初記録のヒカリイシモチ属の1種」(共著)『伊豆海洋公園通信』5(8), 1994.
- (4) 「高知県で最近発見されたキツネメネジリンボウ」(共著)『伊豆海洋公園通信』5(10), 1994.
- (5) “First Record of the Gobiid Fish, *Priolepis nocturna*, from Japan,” (共著) *Ichthyological Research*, 43, 1996.
- (6) 「高知県柏島の魚類相——行動と生態に関する記述を中心に」(共著)『高知大学海洋生物教育研究センター研究報告』16, 1996.
- (7) “*Antennatus flagellatus* (Teleostei: Antennariidae), a New Species of Frogfish from Southern Japan,” (共著) *Ichthyological Research*, 44, 1997.
- (8) “Sneaking by Harem Masters of the Sandperch *Parapercis snyderi*,” (共著) *Environmental Biology of Fishes*, 50, 1997.
- (9) 「ワニギス亜目」仲谷一宏・望月賢二・中坊徹次(編)『日本動物大百科6巻 魚類』平凡社, 1998.
- (10) “*Tomiyamichthys alleni*, a New Gobiid Fish from Japan and Indonesia,” (共著) *Copeia*, 2000.
- (11) 「環境で性が決まる魚」(共著)『遺伝』54(6), 2000.
- (12) 「ラオスの天水田の漁労と魚類の生活史」(共著)『熱帯農業』45(extra issue 2), 2001.
- (13) “Nocturnal Hatching Timing of Mouth-brooding Male Cardinalfish *Apogon niger*,” (共著) *Ichthyological Research*, 48, 2001.
- (14) 「メダカにおける温度性決定の可能性」(共著)『関西自然保護機構会誌』23(1), 2001.
- (15) “Sexual Size Dimorphism in a Catfish *Corydoras aeneus* (Callichthyidae): Why Females Are Larger Than Males,” (共著) *Environmental Biology of Fishes*, 55, 2002.
3. 牧野生態学
4. (1) ユーラシア大陸における乳加工体系の類型分類
- (2) 西南アジアの牧畜と中央アジアの遊牧における生態利用の比較研究
- (3) 衛星データを利用した植物生産量の推定
乾燥地の植生把握と牧畜研究に興味を持ち続け、西南アジアのシリア、中央アジアのカザフスタン、そしてモンゴルなどで主に研究を行ってきた。植物標本の作製、植物の季節的生育の把握、衛星画像を用いた植生分類、放牧領域と飼料資源の季節変動の把握、および、牧畜民の乳加工体系の把握を行ってきた。このように、「場」としての植生把握と、その場で生業を行う牧畜民の土地利用法および畜産物利用法との理解を行ってきた。最近では特に、西南アジアで行った乳文化圏の類型分類を中央アジアでも行い、更にユーラシア大陸全体での乳文化圏の類型化を完成させるべく分析を進めている。今後は、乳文化研究の視座から、乾燥地域における牧畜・遊牧の生業や社会の成り立ちを明らかにしてゆくことを研究課題としている。
5. 2000年、日本学術振興会特別研究員として東南アジア研究センターに配属される。1993年から1996年までシリアにおいて植生調査と牧畜研究に関して現地調査を行う。1997年にシリアとカザフスタンで畜産事情調査、1998年にモンゴルで遊牧調査、1999年にカザフスタンとクルグズスタンで農業構造調査、ジョルダンで牧畜調査、2000年にカザフスタンで乳文化の民族学的調査、2001年にモンゴルで植生調査と乳文化の民族学的調査を行う。一貫して、ユーラシア大陸の乾燥地における牧畜および遊牧に関する生態学的調査を進めている。
6. (1) 『平成9年度海外畜産事情調査研究報告書——シリア』(共著) 国際農林業協力協会, 1998.
- (2) 「シリアの都市や農村で利用されている乳製品」『食の科学』247, 1998.
- (3) “Changes in Grazing Areas and Feed Resources in a Dry Area of North-eastern Syria,” *Journal of Arid Environment*, 40, 1998.
- (4) “Feed Resource Evaluation in the Marginal Lands of Syria Using Satellite Image Processing,” in R. B. Singh and S. Murai (eds.), *Space Informatics for Sustainable*

平田 昌弘 (2000年4月1日~2003年3月31日)

1. 東北大学農学部, 1991.
2. 京都大学農学博士, 1999.

Development, Oxford & IBH Publishing Co. Pvt. Ltd., 1998.

- (5) 「カザフスタン共和国の家畜生産と農民経営の動向」『沙漠研究』9(2), 1999.
- (6) “Historical Changes of Grazing Forms of Arabian Pastoralists in Syria,” *Journal of Arid Land Studies*, 9(2), 1999.
- (7) 「西南アジアの乳加工体系——シリア北東部のアラブ系牧畜民バグーラの事例を通して」『エコソフィア』3, 1999.
- (8) 『平成11年度開発途上国における農業統計改善推進始業報告書——カザフスタン共和国およびキルギス共和国編』(共著) 農林統計協会, 2000.
- (9) 「トンコロニー・メリノス」『日本キルギス友好協会ニュース』14, 日本キルギス友好協会, 2000.
- (10) “Vegetation Classification by Satellite Image Processing in a Dry Area of North-eastern Syria,” *International Journal of Remote Sensing*, 22(4), 2001.
- (11) 「シリア乾燥地の生態系におけるアラブ系牧畜民の放牧形態」『沙漠研究』(印刷中).
- (12) 「モンゴル国ドンドゴビ県における乳加工体系」『沙漠研究』(印刷中).
- (13) 「アジアの伝統的乳製品とその乳加工体系を探る」『日本栄養・食料学会誌』(印刷中).
- (14) 「乳加工要素による乳加工体系・系列群分析——(1) 乳加工要素の抽出」 *Milk Science*, (印刷中).
- (15) 「乳加工要素による乳加工体系・系列群分析——(2) 乳加工要素群の構造分析」 *Milk Science*, (印刷中).
- (16) 「中央アジアの乳加工体系——カザフ系牧畜民の事例を通して」『民族学研究』(印刷中).

見市 建

1. 関西学院大学法学部, 1996.
2. 神戸大学博士(政治学), 2002.
3. 政治学
4. 現代インドネシアにおける政治とイスラーム
現代インドネシアにおけるイスラーム政治勢力が、どのような組織やネットワークによってその思想を伝達し、活動に結びついているのかを研究している。民主化に伴い活発化しているイスラ

ム政治勢力はインドネシアにおけるここ数十年の社会変化を反映している。とくに都市部の中間層にみられるイスラーム化は顕著であり、これが学生を中心とした政治運動に結びついている。イスラーム政治勢力の分析を通して現代インドネシアの政治と社会を大掴みできるような分析枠組みを提出することを目標としている。当面は、イスラーム関係の出版物の翻訳・出版・流通に焦点をあて、インドネシアのイスラーム政治勢力の見取り図を書きたいと思っている。

5. 日本学術振興会特別研究員(2000～02年)を経て、2002年、東南アジア研究センター教務補助員として着任、現在に至る。
- 6.(1) 「ポスト・アブドゥルラフマン・ワヒド体制への継続と変化——東ジャワ・クディリにおける第30回ナフダトゥル・ウラマー大会より」『アジア経済』41(5), 2000.
- (2) 「インドネシアにおける『イスラーム市民社会論』の二大潮流」『国際協力論集』8(2), 2000.
- (3) “Kiri Islam, Jaringan Intelektual dan Partai Politik: Sebuah Catatan Awal,” *Tashwirul Afkar*, 10, 2001.
- (4) 「世界のイスラーム5：インドネシア——数千人規模の反米デモが起きた理由」『外交フォーラム』163, 2002.
- (5) 「民主化期におけるイスラーム主義の台頭——インドネシアのダーワ・カンパスと正義党」『現代の宗教と政党——比較の中のイスラーム』(日本比較政治学会年報第4号), 2002.
- (6) 「インドネシアにおけるイスラーム左派と知識人ネットワーク」『東南アジア研究』40(1), 2002.

加藤 剛

1. 宇都宮大学農学部, 1994.
2. 京都大学農学修士, 1996.
3. 森林生態学, 造林学
4. 森林消失フロンティアにおける劣化した熱帯林生態系の修復と保全

これまで、ポスト商業伐採時代の熱帯林を対象として「劣化した熱帯林の構造と機能に関する生態学的アプローチ」をテーマに、インドネシアで研究を行ってきた。しかしながら、1990年代後半以降、インドネシアでは大規模森林火災や、不

安定な政治経済によって社会が混乱し、森林の消失、荒廃化に拍車がかかっている。特に、スマトラ島ジャンビ州における森林消失のフロンティアでは、ここ10年間の森林消失率が8.3%ときわめて高い値を示し、地域社会における多様な森林生態系の損失や、攪乱による森林機能の著しい劣化が懸念されている。そこで、従来の生態学的なアプローチだけでなく、リモートセンシング技術、GIS、社会科学といったさまざまな分野の研究者にも協力を求め、森林消失と地域住民との関係を明らかにしたいと考えている。また、地域住民と森林とのかかわりを見据え、適切な熱帯林生態系の修復方法や、住民参加型の森林管理方法を見出そうとしている。

5. 2002年東南アジア研究センター教務補佐員として着任、現在に至る。
6. (1) 「択伐後の低地フタバガキ林における大面積調査研究とその背景」『熱帯林業』37, 1997.
- (2) “Impact of Selective Logging on the Composition and Structure of the Lowland Rain Forest, Sumatra: An Analysis of the Large Scale Plot with 15 ha,” in *Proceedings of the Seminar on Ecological Approach for Productivity and Sustainability of Dipterocarp Forests*, 1998.
- (3) “Impact of Severe Drought Associated with the 1997–1998 El Nino in a Tropical Forest in Sarawak,” (共著) *Journal of Tropical Ecology*, 16, 2000.
- (4) 「西表島・石垣島の谷部に生育するサキシマスオウノキ林の構造について」(共著)『森林研究』71, 1999.
- (5) 「富士山のスバルライン開設に伴う森林植生の破壊と回復——30年後の実態」(共著)『森林立地』40, 1998.

人間生態相関研究部門

田中 耕司

1. 京都大学農学部, 1969.
2. 京都大学農学修士, 1972.
3. 熱帯農学, 熱帯環境利用論
4. (1) 熱帯アジアにおけるファーミング・システム
- (2) 熱帯における生物資源利用とその管理
- (3) フロンティア社会の地域間比較

(1)は、従来から行ってきた作付体系研究を営農システム研究へと展開したもの。東南アジアの生態環境と人との関わりの総体を、土地利用、作付体系、資源管理などの側面から把握しようとする試みで、近年は、ベトナム南部のメコン・デルタにおける開拓農村や、ラオス北部山地などで関連する調査を行っている。(2)は、熱帯における生物資源としてのさまざまな有用植物をめぐるポリティカル・エコロジーを論じようとするもの。東部インドネシアやラオス、ミャンマー、ベトナム、雲南などでアブラギリ属の油料樹種の利用とその栽培に関わる土地利用問題を調査するとともに、島嶼部と大陸部の生物資源の利用と管理をめぐる比較研究へと発展させることをねらっている。(3)は、これまでの開拓社会の研究を東南アジアのフロンティア論へと展開しようとする研究で、アメリカ西部のフロンティア研究を準拠枠としながら、フロンティア概念の相対化と今日的意義を論じようとする。

5. 1973年、京都大学農学部助手に採用される。1979年、東南アジア研究センター助手に配置換、1984年助教授、1998年教授に昇任、現在に至る。
この間、1974年ビルマ、アッサム等において野生イネの分布と栽培イネの生態型分化の調査に従事。1979年、インド、スリランカにおいてクロッピングシステム等の比較研究調査を行う。1980～85年にかけて3次にわたり、インドネシアにおいて熱帯島嶼域の人の移動に関わる環境形成過程の研究調査に参加、その後、インドネシアで農業移民の調査、バングラデシュで農村開発調査、インドネシア、マダガスカル、中国、ベトナム、ラオス等で稲作技術・文化の調査を行う。近年は、インドネシアやフィリピンなど東南アジア海域世界の生業と生活に関する文化生態学的調査とベトナムやラオス、ミャンマーでの農業生態学的調査を進めている。

6. (1) 「マレー型稲作とその広がり」『東南アジア研究』29(3), 1991.
- (2) 「拓かれる生活空間」矢野暢(編)『地域研究のフロンティア』(講座・現代の地域研究第3巻)弘文堂, 1993.
- (3) 「フロンティア社会の変容」矢野暢(編)『地域研究と「発展」の論理』(講座・現代の地域研究第4巻)弘文堂, 1993.
- (4) “Farmers’ Perceptions of Rice-Growing

- Techniques in Laos: 'Primitive' or 'Thammasat'?' 『東南アジア研究』31 (2), 1993.
- (5) 「森と野の狭間——東南アジアの熱帯雨林から」梅原猛・伊東俊太郎（監修）『森の文明・循環の思想』講談社, 1993.
- (6) 「生活者の『森』と観察者の『森林』」山田勇（編）『森と人との対話』人文書院, 1995.
- (7) 「フィールド・ワークから生まれた稲作論」農耕文化研究振興会（編）『稲作空間の生態』大明堂, 1996.
- (8) “Who Owns the Forest?: The Boundary between Forest and Farmland at the Frontier of Land Reclamation,” 『東南アジア研究』34 (4), 1997.
- (9) “Development of Southeast Asian Rice Culture: An Ecohistorical Overview,” in Y. Oshima *et al.* (eds.), *Asian Paddy Fields: Their Environmental, Historical, Cultural and Economic Aspects under Various Physical Conditions*, College of Agr., Univ. of Saskatchewan, 1997.
- (10) 「東南アジアの水田利用の集約性——熱帯アジアと日本との比較論に向けて」（共著）『環境科学総合研究所年報』16, 1997.
- (11) 「水田が支えるアジアの生物生産」『岩波講座地球環境学6 生物資源の持続的利用』岩波書店, 1998.
- (12) 「海と陸のはざまに生きる」秋道智彌（編）『講座人間と環境——自然はだれのものか』昭和堂, 1999.
- (13) 「東南アジアのフロンティア論に向けて」坪内良博（編）『〈総合的地域研究〉を求めて』京都大学学術出版会, 1999.
- (14) “Cropping Systems Research and Area Studies in Southeast Asia: Toward an Integration of Agronomic Studies and Sociocultural Studies,” in T. Horie *et al.* (eds.), *World Food Security and Crop Production Technologies for Tomorrow*, The Crop Science Society of Japan, 1999.
- (15) 『自然と結ぶ——「農」にみる多様性』（編著）昭和堂, 2000.
- (16) 「フロンティア世界としての東南アジア——カリマンタンをモデルに」坪内良博（編）『地域形成の論理』京都大学学術出版会, 2000.
- (17) 「インドネシア『外島』での村落形成」日本村落研究学会（編）『年報』村落社会研究36』農山漁村文化協会, 2000.
- (18) “Agricultural Development in the Broad Depression and the Plain of Reeds in the Mekong Delta: Conserving Forests or Developing Rice Culture?” 『東南アジア研究』39 (1), 2001.
- (19) 「穀作農耕における『個体』と『群落』の農法」『農耕の技術と文化』24, 2001.
- (20) “Crop-Raising Techniques in Asian Rice Culture: Resemblances to Root and Tuber Crop Cultivation,” in S. Yoshida and P.J. Matthews (eds.), *Vegeculture in Eastern Asia and Oceania*, (JCAS Symposium Series 16), JCAS, National Museum of Ethnology, 2002.

西淵 光昭

1. 広島大学水畜産学部, 1976.
2. オレゴン州立大学 Ph. D., 1983.
3. 病原細菌学
4. 東南アジアの環境中の病原性細菌の動態：(1)コレラ菌, 病原性大腸菌 O 157, 腸炎ビブリオなどのような病原菌が, 東南アジア各地および周辺地域の環境（環境水や食品など）中にどのように分布しているかを明らかにする。(2)各地でこれらの病原菌による感染症がどの程度発生しているかを調べ, 環境中の菌の分布との相関関係を調べる。菌の分布と病気の発生が必ずしも相関しない場合, それぞれの地域のどのような要因（自然要因, 社会・経済的要因, 文化的要因など）が影響しているかを明らかにする。(3)各地の環境分離菌株や臨床分離菌株を遺伝子レベルで解析して, 感染症の伝播の様式および感染経路を明らかにする。(4)環境中に分布する病原性細菌が自然環境からヒトの体内へ移動したときに, 栄養分, 温度, pH, 塩分濃度などの環境変化を菌がどのように認識して, 病原性を発現するメカニズムをどのようにスタートするかを明らかにする。
5. 1977～78年, 文部省派遣交換留学生としてオレゴン州立大学に留学し, 魚病を研究。1980～82年（オレゴン州立大学博士課程在学中）, ヒト病原性ビブリオ属細菌の米国沿岸における分布調

- 査に参加し、西海岸の調査を担当。1983～86年、メリーランド大学ワクチン開発センターで細菌病原性の分子遺伝学研究を開始。1986年、大阪大学微生物病研究所助手に採用される。1988年、京都大学医学部講師に採用され、同年、同助教授に昇任。1996年、京都大学東南アジア研究センター教授に採用され、現在に至る。
6. (1) "Emergence of a Unique O3 : K6 Clone of *Vibrio parahaemolyticus* in Calcutta, India, and Isolation of Strains from the Same Clonal Group from Southeast Asian Travelers," (共著) *Journal of Clinical Microbiology*, 35 (12), 1997.
 - (2) "Detection of *Escherichia coli* O157 : H7 in the Beef Marketed in Malaysia," (共著) *Applied and Environmental Microbiology*, 64 (3), 1998.
 - (3) "Characterization of *Vibrio cholerae* O139 Bengal Isolated from Water in Malaysia," (共著) *Journal of Applied Microbiology*, 85 (6), 1998.
 - (4) "Isolation of *Escherichia coli* O157 : H7 Strain Producing Shiga Toxin 1 but Not Shiga Toxin 2 from a Patient with Hemolytic Uremic Syndrome in Korea," (共著) *FEMS Microbiology Letters*, 166 (1), 1998.
 - (5) "Identification of a Rough Strain of *Escherichia coli* O157:H7 That Produces No Detectable O157 Antigen," (共著) *Journal of Clinical Microbiology*, 36 (8), 1998.
 - (6) "Manifestation of the Kanagawa Phenomenon, the Virulence-associated Phenotype, of *Vibrio parahaemolyticus* Depends on a Particular Single Base Change in the Promoter of the Thermostable Direct Haemolysin Gene," (共著) *Molecular Microbiology*, 30 (3), 1998.
 - (7) "Sequence Analysis of the *gyrA* and *parC* Homologues of a Wild-type Strain of *Vibrio parahaemolyticus* and Its Fluoroquinolone-resistant Mutants," (共著) *Antimicrobial Agents and Chemotherapy*, 43 (5), 1999.
 - (8) "Identification of *Vibrio parahaemolyticus* at the Species Level by PCR Targeted to the *toxR* Gene," (共著) *Journal of Clinical Microbiology*, 37 (4), 1999.
 - (9) "Clonal Diversity among Recently Emerged Strains of *Vibrio parahaemolyticus* O3 : K6 Associated with Pandemic Spread," (共著) *Journal of Clinical Microbiology*, 37 (7), 1999.
 - (10) "Isolation and Molecular Characterization of Vancomycin-resistant *Enterococcus faecium* in Malaysia," *Letters in Applied Microbiology*, 29 (2), 1999.
 - (11) "*Vibrio parahaemolyticus* in Asia," *Indian Journal of Microbiology*, 39, 1999.
 - (12) "Pandemic Spread of an O3 : K6 Clone of *Vibrio parahaemolyticus* and Emergence of Related Strains Evidenced by Arbitrarily Primed PCR and *toxRS* Sequence Analyses," (共著) *Journal of Clinical Microbiology*, 38 (2), 2000.
 - (13) "Isolation and Characterization of *Escherichia coli* O157 from Retail Beef and Bovine Feces in Thailand," (共著) *FEMS Microbiology Letters*, 18 (2), 2000.
 - (14) "Isolation of *Vibrio parahaemolyticus* Strains Belonging to a Pandemic O3 : K6 Clone from Environmental and Clinical Sources in Thailand," (共著) *Applied and Environmental Microbiology*, 66 (6), 2000.
 - (15) "Clonal Dissemination of *Vibrio parahaemolyticus* Displaying Similar DNA Fingerprinting to Two Different Serovars (O3 : K6 and O4 : K68) in Thailand and India," (共著) *Epidemiology and Infection*, 125 (1), 2000.
 - (16) "Molecular Evidence That the Pandemic-associated O3 : K6, O4 : K68 and O1 : K Untypeable (KUT) Strains of *Vibrio parahaemolyticus* Isolated from Different Countries Are Clonal," (共著) *Emerging Infectious Diseases*, 6 (6), 2000.
 - (17) "Analysis of the *gyrB* and *toxR* Gene Sequences of *Vibrio hollisae* and Establishment of the *gyrB*- and *toxR*-targeted PCR Methods for Isolation and Identification of *V. hollisae* in the Environment," (共著) *Applied and Environmental Microbiology*,

66 (8), 2000.

- (18) "Characteristics of *Vibrio parahaemolyticus* O3 :K6 from Asia," (共著) *Applied and Environmental Microbiology*, 66 (9), 2000.
- (19) "Detection and Molecular Characterization of *Vibrio vulnificus* from Coastal Waters of Malaysia," (共著) *Southeast Asian Journal of Tropical Medicine and Public Health*, 31 (4), 2000.
- (20) "Occurrence of the *vanA* and *vanC2/C3* Genes in *Enterococcus* Species Isolated from Poultry Sources in Malaysia," (共著) *Diagnostic Microbiology and Infectious Diseases*, 39 (3), 2001.

松林 公蔵

1. 京都大学医学部, 1977.
2. 京都大学医学博士, 1986.
3. 老年医学, 神経内科学, フィールド医学
4. (1) 本邦高齢者の健康度に関する縦断的追跡研究
(2) 東南アジア諸地域における人間の老化に関する生態学的ならびに老年医学的比較研究
(3) 痴呆性疾患に影響をおよぼす自然環境ならびに文化的背景に関する研究
人の疾病と老化のありさまは, その地域独自の生態系と密接な関連をもっている。また, 地域固有の文化もまた, 数千年にわたる食料生産の形態や技術伝播の歴史と不可分ではない。そして, 人の健康観や死生観は, その地域の文化によって異なる価値概念でもある。今後の人類の医療のありかたを考えると, 医学生物学という普遍的なグローバルイズムとはまた別の, 地域を重視した視点すなわちフィールド(臨地)医学的視点が重要と思われる。これまで, 主としてニューギニアを中心としてフィールド医学的調査を継続しているが, 本年度は対象地域をインドネシアの他地域ならびにミャンマーに拡大し, 疾病と老化の問題を追究する。
5. 1977年京大内科研修医を経て1978年静岡労災病院神経内科, 1980年天理よろづ相談所病院神経内科勤務後1982年京大神経内科(医員)。1986年高知医大老年病科助手, 1991年同講師, 1998年同助教授を経て2000年より京大東南アジア研究センター教授, 京大大学院医学研究科社会健康医学系教授を兼任。

1982年以降, 下記の海外学術調査を行った。1982, 1985年チベット高原における高所医学研究, 1989~90年にはヒマラヤ極低酸素環境下における生理学的研究とあわせてチベット高所住民に関する疫学調査を行った。

また, 1991年から2000年にかけて, 高知県香北町において地域在住高齢者の縦断的追跡調査を実施するとともに鹿児島県上屋久町, 秋田県若美町, 滋賀県余呉町に居住する高齢者と比較検討するのとあわせて, 海外においてもフンザカラコルム, 南米アンデス, 中国雲南省, 中国チベット自治区, モンゴル, 韓国などにおいて, 地域在住高齢者の健康度に関する生態学的比較調査を行っている。

今後, 東南アジア諸地域における老化のありさまならびに痴呆性疾患の実態を地域研究の一環として検討し, 同時に超高齢化のすすむ本邦との比較研究を行う。

6. (1) "Incidental Brain Lesions on Magnetic Resonance Imaging and Neurobehavioral Functions in the Apparently Healthy Elderly," (共著) *Stroke*, 23, 1992.
- (2) "Diurnal Blood Pressure Variations and Silent Cerebrovascular Damage in Elderly Patients with Hypertension," (共著) *J Hypertens*, 10, 1992.
- (3) 『長寿伝説の里——高知医科大学カラコルム医学学術調査隊の記録』高知新聞社, 1992.
- (4) "Dependency of the Aged in the Community," (共著) *Lancet*, 342, 1993.
- (5) "Silent Cerebrovascular Disease and Ambulatory Blood Pressure in the Elderly," (共著) *Hypertens Res*, 17, Suppl I, S 55-S 58, 1994.
- (6) "Polyneuritis cranialis Due to Varicella-zoster Virus in the Absence of Rash," (共著) *Neurology*, 45, 1995.
- (7) 『インカの里人——高知医科大学南米アンデス医学学術調査隊の記録』高知新聞社, 1995.
- (8) "Secular Improvement in Self-care Independence of Old People Living in Community in Kahoku, Japan," (共著) *Lancet*, 347, 1996.
- (9) "Does Surge in Blood Pressure Precede or Follow Stroke?" (共著) *Lancet*, 347, 1996.

- (10) “Effects of Exercise on Neurobehavioral Function in Community-dwelling Older People More Than 75 Years of Age,” (共著) *J Am Geriatr Soc*, 44, 1996.
- (11) “Serum Cholesterol Levels and Cognitive Function Assessed by P 300 Latencies in an Older Population Living in the Community,” (共著) *J Am Geriatr Soc*, 45, 1997.
- (12) “Cognitive and Functional Status of the Japanese Oldest Old,” (共著) *J Am Geriatr Soc*, 45, 1997.
- (13) “Home-blood Pressure Control in Japanese Hypertensive Population,” (共著) *Lancet*, 350, 1997.
- (14) “Global Burden of Disease,” (共著) *Lancet*, 350, 1997.
- (15) “Postural Dysregulation in Systolic Blood Pressure is Associated with Worsened Scoring on Neurobehavioral Function Tests and Leukoaraiosis in the Older Elderly Living in a Community,” (共著) *Stroke*, 28, 1997.
- (16) “Quality of Life of Old People Living in the Community,” *Lancet*, 350, 1997.
- (17) “Improvement in Self-care Independence May Lower the Increasing Rate of Medical Expenses for Community-dwelling Older People in Japan,” (共著) *J Am Geriatr Soc*, 46, 1998.
- (18) “Frailty in Elderly Japanese,” (共著) *Lancet*, 353, 1999.
- (19) “The Timed ‘Up and Go’ Test and Manual Button Score Are Useful Predictors of Functional Decline in Basic and Instrumental ADL in Community-dwelling Older People,” (共著) *J Am Geriatr Soc*, 47, 1999.
- (20) “A U-shaped Association between Home Systolic Blood Pressure and Four-year Mortality in Community-dwelling Older Men,” (共著) *J Am Geriatr Soc*, 47, 1999.
4. (1) ベトナムの山地部を対象にした人文生態 (山地での人と環境との関係)
- (2) ベトナムとタイの山地部農業生態系における土地の劣化問題 (山地部農業システムにおける栄養のダイナミクスと持続性)
- (3) アジアにおける環境認識 (日本, 香港, ベトナムおよびタイにおける環境リスクに関する一般的認識の比較解析)
- 1980年以來, 主としてベトナム (特に北部山地地域) における環境と開発に関連する問題に興味を持って研究を行っている。ベトナム国家大学の自然資源環境研究センター (CRES) およびハノイ農業大学の研究者と共同で, 北部山地の5つのコミュニティにおいて環境的要因と社会的要因を総合的に解析した研究が最近の代表的研究である。
5. ワシントン州立大学人類学科助教授, フォード財団東南アジア研究プログラム・ポストドクトラル・リサーチフェロー等を経て, 1975年マラヤ大学人類・社会学科講師。1980年イースト・ウエストセンター上級研究員。2000年東南アジア研究センター教授。
- 1961年以降以下の研究に従事。
- (1) Human adaptation to tropical rainforest in Belize (1961-62)
- (2) Refugee movement in South Vietnam (1965-67)
- (3) Impact of war on cultural values in Vietnam (1968-69)
- (4) Adaptation of northern migrants to the environment of the Mekong Delta (1973-75)
- (5) Cultural ecology of Malaysian Orang Asli (Aboriginal people) (1975-80)
- (6) Human ecology of tropical agricultural systems in Southeast Asia (1980-94)
- (7) Land degradation in tropical Asia (1994-現在)
- (8) Human ecology of Vietnam’s Northern Mountain region (1997-現在)
- (9) Environmental perception in Asia (1998-現在)

テリー ランボー
A. Terry RAMBO

1. ミシガン大学 (人類学), 1963.
2. ハワイ大学 Ph.D. (人類学), 1972.
3. 人類生態学
6. (1) *A Comparison of Peasant Social Systems of Northern and Southern Viet-Nam: A Study of Ecological Adaptation, Social Succession,*

- and Cultural Evolution*, Monograph III of the Center for Vietnamese Studies, Southern Illinois Univ., Carbondale, IL, 1973.
- (2) "Closed Corporate and Open Peasant Communities: Reopening a Hastily Shut Case," *Comparative Studies in Society and History*, 19 (2), 1977.
 - (3) "Human Ecology of the Malaysian Orang Asli," *Federation Museums Journal*, 24, 1979.
 - (4) "Of Stones and Stars: Malaysian Orang Asli Environmental Knowledge in Relation to Their Adaptation to the Tropical Rain Forest Ecosystem," *Federation Museums Journal*, 25 (New Series), 1980.
 - (5) "Fire and the Energy Efficiency of Swidden Agriculture," *Asian Perspectives*, 23 (2), 1980.
 - (6) *An Introduction to Human Ecology Research on Agricultural Systems in Southeast Asia*, (共編) UPLB, Los Banos, 1984.
 - (7) *Primitive Polluters: Semang Impact on the Malaysian Tropical Rain Forest Ecosystem*, Anthropological Papers No. 76, Univ. of Michigan, Museum of Anthropology, Ann Arbor, 1985.
 - (8) "Black Flight Suits and White Ao Dais," in Truong Buu Lam (ed.), *Borrowing and Adaptation of Symbols of Vietnamese Cultural Identity* (Southeast Asia Paper No. 25), Univ. of Hawaii, Center for Asian and Pacific Studies, Honolulu, 1987.
 - (9) *Ethnic Diversity and the Control of Natural Resources in Southeast Asia*, (共編) Michigan Papers on South and Southeast Asian Studies No. 32, Univ. of Michigan, Center for South and Southeast Asian Studies, Ann Arbor, 1988.
 - (10) *Agroecosystems of the Midlands of Northern Vietnam: A Report on a Preliminary Human Ecology Field Study of Three Districts in Vinh Phu Province*, (共編) EAPI Occasional Paper No. 12, East-West Center, Honolulu, 1990.
 - (11) *Profiles in Cultural Evolution: Papers from a Conference in Honor of Elman R. Service*, (共編) Anthropological Papers No. 85, Univ. of Michigan, Museum of Anthropology, Ann Arbor, 1991.
 - (12) *Too Many People, Too Little Land: The Human Ecology of a Wet Rice-Growing Village in the Red River Delta of Vietnam*, (共編) Program on Environment Occasional Paper No. 15, East-West Center, Honolulu, 1993.
 - (13) *Development Trends in Vietnam's Northern Mountain Region*, 2 volumes (共編) National Political Publishing House, Hanoi, 1997.
 - (14) "Culture, Environment and Human Settlement in the Uplands of Northern Vietnam," *Vietnam Social Sciences*, 5 (61), 1997.
 - (15) "The Composite Swiddening Agroecosystem of the Tay Ethnic Minority of the Northwestern Mountains of Vietnam," in Aran Patanothai (ed.), *Land Degradation and Agricultural Sustainability: Case Studies from Southeast and East Asia*, SUAN Regional Secretariat, Khon Kaen, 1998.
 - (16) "The Development Crisis in Vietnam's Mountains," (共著) *East-West Center Special Report* No. 6, Honolulu, Hawaii, 1998.
 - (17) "The Balance of Nature, the Garden of Eden, and the Power of Policy: Some Observations on Contemporary Environmental Mythology," *The Asian Geographer*, 18 (1 & 2), 1999.
 - (18) "Shifting Cultivation: A New Paradigm for Managing Tropical Forests," (共著) *Bio Science*, 50 (6), 2000.
 - (19) *Bright Peaks, Dark Valleys: A Comparative Analysis of Environmental and Social Conditions and Development Trends in Five Communities in Vietnam's Northern Mountain Region* (Le Trong Cuc と共編), Hanoi: National Political Publishing House, 2001.
 - (20) "Social Organization and the Management of Natural Resources: A Case Study of Tat Hamlet, a Da Bac Tay Ethnic Minority Settlement in Vietnam's Northern Mountain Region," (共著) 『東南アジア研究』 39 (3), 2001.

安藤 和雄

1. 静岡大学農学部, 1978.
2. 京都大学博士 (農学), 1994.
3. 熱帯農学, 農村生態
4. (1) 応用的地域研究としての農村開発及び環境問題研究
(2) 農業と村落社会における地域性と在地性
(3) 新しい農業・農村観の構築
具体的には, アジア, 特に, バングラデシュ, ミャンマー, ラオス, 雲南 (中国), カザフスタンなど狭間地域とでもいえるこれらの国々のフィールドにおける農村開発, 環境問題, 持続的農業に関する研究を, 国際協力事業団の「住民参加型農村開発行政支援計画」と科研「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」の二つの共同研究プロジェクトを柱に応用的地域研究と位置付けて推進している。イスラム到来以前におけるベンガルのパーラ王朝期の東南アジア・南アジアの交流史に着目し, 東南アジア, 南アジアの周辺地域であるベンガル (バングラデシュ) とラカイン (ミャンマー) にまたがる狭間世界から, もういちどこの二つの地域の具体的な交わりの歴史と空間的ひろがり構築することで新たな地域観を提出したい。また, 京都府下での村落と私がかかわっている海外のフィールドの村落との比較の視点から, 掴むことができた新しい農業・農村観を日本社会へ問いかけてみたい。
5. 国際協力事業団青年海外協力隊員 (1978～81, バングラデシュ), バングラデシュ農科大学留学 (1984～86), 国際協力事業団長期派遣専門家 (1986～90, 94～95, バングラデシュ) を経て, 1996年に東南アジア研究センターに助教授として採用され, 現在に至る。長期派遣専門家として, 村落調査, 小規模農村開発計画の策定・実施という参加型農村開発研究プロジェクトに参加する。こうした応用的地域研究の他に, 農業技術, 農村社会の地域性と在地性, ベンガルの地域性の東南アジアへの広がりを調査するために, 1997～2001年に, ミャンマー (イラワジデルタと中央平原ラカイン州, 農村開発と農業技術), バングラデシュ (ベンガルデルタ, 農村開発と環境問題), 中国 (珠江デルタ), タイ (チャオプラヤデルタ), 中国 (雲南, ハニ族の棚田農業), ラオス (サバ

ナケット周辺の農業と定期市), カザフスタン (バルハシ湖方面の環境と人の移動) に関するフィールドワークを行った。

6. (1) 「バングラデシュのアウス稲・アマン稲の混播栽培」『農耕の技術』7, 1984.
- (2) 「バングラデシュにおける稲作に関する『格言』・『稲作儀礼』ノート——ノアカリ県シラディ村の稲作調査より」『コッラニ』9, 1984.
- (3) 「ベンガル・デルタ低地部の稲作——バングラデシュ東部地方におけるアウス・散播アマンの混播栽培とパーボイルド米に関するノート」『東南アジア研究』25 (1), 1987.
- (4) 「バングラデシュ・ハオール地域ジャワール村の灌漑稲作と近代の農業変容」(共著)『農業土木学会誌』58 (12), 1990.
- (5) 「ベンガルデルタ低地部の作付体系——技術変容と作付体系展開の地域間比較」(共著)『東南アジア研究』28 (3), 1990.
- (6) 「ベンガルデルタの村落形成についての覚書」(共著)『東南アジア研究』28 (3), 1990.
- (7) 「バングラデシュ・ハオール縁辺地域における乾季稲作と伝統的灌漑技術——ジャワール村における事例研究」(共著)『アジア経済』32 (2), 1991.
- (8) “Rice-Cultivation and Land Tenancy System under Shallow Tubewell Irrigation in Barind Tract, Bangladesh: A Case Study in Tetulia Village, Bogra District,” (共著) *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, No. 3, 1991.
- (9) 「バングラデシュの低平地における動的水文環境への適応農業」(共著)『農業土木学会誌』60 (5), 1992.
- (10) 「伝統稲作農業の特色」(共著) 臼田・佐藤・谷口 (編)『もっと知りたいバングラデシュ』弘文堂, 1993.
- (11) 「第7章バングラデシュ」『アジア畑作指導マニュアル』全国農業改良普及協会, 1993.
- (12) 「バングラデシュの農村道路建設による水文環境の攪乱」(共著)『農業土木学会誌』62 (9), 1994.
- (13) 「マタボール達と在地の農村開発——バングラデシュ, ドッキンチャムリア村におけるアクション・リサーチの記録」(共著)『東南アジア研究』33 (1), 1995.

- (14) 「バングラデシュの農村開発の現状と援助」河合明宣（編）『発展途上国産業開発論』放送大学教育振興会，1995.
- (15) 「バングラデシュの氾濫原における乾季畑作と稲作農業——ジャムナ氾濫原ドッキン・チャムリア村の事例」（共著）『南アジア研究』第9号，1997.
- (16) 「NGOの発展を支える在在地性」斉藤千宏（編）『NGOが変える南アジア』コモンズ，1998.
- (17) 「農村開発における在村リーダーシップとインフラ整備事業の可能性——バングラデシュ・ドッキンチャムリア村の事例」佐藤寛（編）『開発援助とバングラデシュ』アジア経済研究所，1998.
- (18) 「洪水とともに生きる——ベンガル・デルタの氾濫原に暮らす人びと」田中耕司（編）『自然と結ぶ——「農」にみる多様性』（講座・人間と環境3）昭和堂，2000.
- (19) 「バングラデシュの在地の技術と農村開発——当事者としての現場」『熱帯研究』11（1），2001.
- (20) 「『在地の技術』の展開——バングラデシュ・D村の事例に学ぶ」『国際農林業協力』24（7），2001.
- 生態環境と社会・経済システムの相互関係を追及する。これまでに、紅河、メコン河、チャオプラヤ河のデルタ地帯や四川省、雲南省を対象としてきた。
5. 1987年東南アジア研究センター助手，1992～94年アジア工科大学灌漑工学経営プログラム助教授，1998年東南アジア研究センター助教授，現在に至る。1981年ジャワ島，1983～84年タイ，スリランカ及び南インド，1986年ルソン島，1989年イラン，イラク，エジプト，1990，1991年中国，1995～98年ベトナム紅河デルタやタイ東北部等，1999～2001年ラオス北部やベトナム北部山地，2001～02年ミャンマーにおいて土地・水利用や水利開発の調査に従事する。
6. (1) “Land and Water Resources Management for Crop Diversification in the Chao Phraya Delta, Thailand: A Case Study of Citrus Cultivation in the North Rangsit Irrigation Project,”（共著）『東南アジア研究』33（2），1995.
- (2) “Spread of Direct Seeded Lowland Rice in Northeast Thailand: Farmers’ Adaptation to Economic Growth,”（共著）『東南アジア研究』33（4），1996.
- (3) “Who should Manage an Irrigation System: Monsoon Asian Experiences,” in *Proc. of the Int. Conf. on Water Resour. & Environ. Res.*, 1996.
- (4) “Application of NETVIS to the Evaluation of a Reforestation Project in Northeast Thailand,”（共著）in *Proc. of the 17th Asian Conference of Remote Sensing*, 1996.
- (5) “Monitoring and Mapping Reforestation in Northeast Thailand: An Application of Northeast Thailand Village Information System (NETVIS),”（共著）in *Tropical Forestry in the 21st Century, Vol. 9: The Sixth Wacharakitti Remote Sensing Workshop*, 1996.
- (6) “Post-1949 Development of the Dujiangyan Irrigation System, South China: Bridging over a Gap between the Government and Farmers,” *International Journal of Water Resources Development*, 13（1），1997.
- (7) 「社会開発型 ODA 事業における GIS の役割——東北タイ造林普及計画（REX）を例とし

河野 泰之

1. 東京大学農学部，1981.
2. 東京大学農学博士，1986.
3. 自然資源管理
4. (1) 土地資源評価

土地は地域をかたち作る場である。土地がどのように使われてきたか、今後、どのように使っていくべきかを議論するために、農業生産や環境保全、生物多様性の保護など多様な視点を統合した土地資源評価を試みている。現在のところ、タイ東北部を対象としている。

(2) 東南アジア大陸山地部の農業と環境

農業生産と環境保全はある局面では相互補完的であるが、別の局面では対立する。この対立が顕著に見られる東南アジア大陸山地部を対象として、技術、社会、制度・政策を分析し、農業・環境問題に関する基本的な視点の提示をめざしている。

(3) モンスーンアジアの水利

灌漑排水などの水利の発展過程の分析を通じて、

- て」(共著)『GIS—理論と応用』5(1), 1997.
- (8) 「タイ国における農業開発の現状と今後の課題」(共著)『農業土木学会誌』65(4), 1997.
- (9) “Yielding Ability in Direct Seeding Rice Culture in Northeastern Thailand,” (共著)『熱帯農業』42(4), 1998.
- (10) “Village-level Irrigation System Management in the Command Area of Nam Ha 1 Irrigation Scheme,” (共著) in *Towards an Ecoregional Approach for Natural Resource Management in the Red River Basin of Vietnam*, 1998.
- (11) 「東南アジアにおける農業発展と地域性——灌漑開発を中心として」『システム農学』15(1), 1999.
- (12) “Technical Changes in Rainfed Rice Cultivation in Northeast Thailand,” (共著) in *World Food Security and Crop Production Technologies for Tomorrow*, 1999.
- (13) “Direct Seeded Rice Cultivation in Northeast Thailand: Present Situation and Problems Involved,” (共著) in *World Food Security and Crop Production Technologies for Tomorrow*, 1999.
- (14) “Methodology for Regional Level Land Productivity Evaluation: A Case Study of Rainfed Agriculture in Northeast Thailand,” (共著) in *Can Biological Production Harmonize with Environment?* 1999.
- (15) “Competition and Interdependence between Paddy and Weeds of Rainfed Agriculture in Northeast Thailand,” (共著) in *Can Biological Production Harmonize with Environment?* 1999.
- (16) “Changes in Village-level Cropping Patterns in the Red River Delta after Doi Moi: A Case Study of the Coc Thanh Cooperative in Nam Dinh Province,” (共著)『熱帯農業』43(3), 1999.
- (17) 「焼畑で暮らす山地民とグローバルな環境保全」『サイアス』2000年12月号, 2000.
- (18) “Canal Development and Intensification of Rice Cultivation in the Mekong Delta: A Case Study in Cantho Province, Vietnam,” 『東南アジア研究』39(1), 2001
- (19) “Changing Roles of Cooperatives in Agricultural Production in the Red River Delta,” (共著) in *Vietnamese Society in Transition*, 2001.
- (20) “A GIS-Based Crop-Modelling Approach to Evaluating the Productivity of Rainfed Lowland Paddy in North-East Thailand,” (共著) in *Increased Lowland Rice Production in the Mekong Region*, 2001.

柳澤 雅之

1. 京都府立大学農学部, 1991.
2. 京都大学博士(農学), 2000.
3. 熱帯農業生態学
4. (1) 紅河デルタ農村開発戦略の多様性

ベトナム紅河デルタ村落で見られる多様な小規模農村手工業は、血縁のみならず、地縁、親戚縁者、知人友人、年齢階梯組織など、さまざまなネットワークを利用して分業体制が形成され複雑なシステムを発達させてきた。現在、市場メカニズムを取り入れた一連の社会・経済改革(ドイモイ)による10年以上の試行錯誤を経て、新しい経済ネットワークシステムが形成されつつある。臨地調査や仏領期に蓄積された研究成果との比較から、多様な生業システムとそれらを媒介する多様なネットワークの形成と変化を動的に考察する。
- (2) 東南アジア大陸山地部における農村開発と環境保護との関係

東南アジア大陸山地部は多様な自然環境の上に多様な言語・文化をもつ人々が暮らす。この50年間のアジアの急激な経済発展により地域の景観は大きく変容を受ける一方、世界的な環境問題への関心の高まりから環境問題も避けて通れない課題となっている。農村開発と環境保護とのバランスを自然や文化の多様性の中で考察する。
5. 1999年、東南アジア研究センターに助手として採用される。これまでに行った主な海外調査は以下の通りである。1992～94年、タイ中部の畑作地帯を対象として森林から大規模畑作地帯が形成されるまでの史的展開に関する聞き取り調査を行った。1994年から毎年、紅河デルタの1村落を対象とした学際的調査に参加し、これは現時点(2002年)も継続中である。1995～96年にメコ

ンデルタの水利および農業技術調査, 1999～2001年には北部山地にて地域の多様性と農業集約化過程に関する調査を行った。これらの他に, それぞれ短期間ではあるが, 1995年にフィリピンのミンドロ島でハヌノー・マンヤン族の植物利用に関する調査, 1999年にスリランカで水稲栽培技術調査, 2000年にラオス北部山地で焼畑に依存する人たちの農業変容に関する調査を行ってきた。

6. (1) “Development of Field Crops in Thailand: A Case Study in Saraburi and Lopburi Provinces,” (共著) 『東南アジア研究』 33 (4), 1996.
- (2) “Changes in Village-Level Cropping Patterns in the Red River Delta after *Doi Moi*: A Case Study of the Coc Thanh Cooperative in Nam Dinh Province, Vietnam,” (共著) *Japanese Journal of Tropical Agriculture*, 43 (3), 1999.
- (3) “An Interdisciplinary Study of a Rice Growing Village: History and Contemporary Changes,” in N. N. Kinh, P. S. Teng, C. T. Hoanh, and J. C. Castella (eds.), *Towards an Ecoregional Approach for Natural Resource Management in the Red River Basin of Vietnam*, Ministry of Agriculture and Rural Development of Vietnam & International Rice Research Institute. The Agricultural Publishing House, Hanoi, 1999.
- (4) “Fund-Raising Activities of a Cooperative in the Red River Delta: A Case Study of the Coc Thanh Cooperative in Nam Dinh Province, Vietnam,” 『東南アジア研究』 38 (2), 2000.
- (5) “Status of Vegetable Cultivation as Cash Crops and Factors Limiting the Expansion of the Cultivation Area in a Village of the Red River Delta in Vietnam,” (共著) *Japanese Journal of Tropical Agriculture*, 45 (4), 2001.
- (6) “Changing Roles of Cooperatives in Agricultural Production in the Red River Delta: A Case Study of the Coc Thanh Cooperative in Nam Dinh Province,” in J. Kleinen (ed.), *Vietnamese Society in Transition: The*

Daily Politics of Reform and Change, Het Spinhuis Publishers, 2001.

ドナルド マナイタイ ウーサン
Donald Manaytay UGSANG

(2002年4月8日～2003年3月31日)

1. ヴィサヤ州立農科大学 (農業工学), 1989.
2. アジア工科大学院工学博士 (リモートセンシング・GIS), 2000.
3. リモートセンシング・GIS
4. 沿海域における土地利用の変容
2000年から02年まで, アジア工科大学院アジアリモートセンシングセンターにおいてALOS画像シミュレーションやリモートセンシング技術の農業および地域計画への応用研究を行ってきた。1999年から2000年までは, ESCAPの宇宙工学応用部門のコンサルタントとして勤務し, またヨーロッパ宇宙機構の第3次AO-380プロジェクトやGAME-T (GEWEX Asian Monsoon Experiment-Tropic) プロジェクトにおいて, SARデータを用いた土壌水分評価に関する研究に主任研究員として従事した。1990年代初めにはセブ資源管理事務所およびフィリピン・ドイツ共同GISセブプロジェクトにおいて畑作農業と林業開発に関する研究に従事した。現在はSARデータやリモートセンシング技術の農業, 水文および自然資源管理への応用に関心がある。
5. 1989～92年, セブ資源管理事務所資源管理専門家, 1992～93年, フィリピン・ドイツ共同GISセブプロジェクトにおいてGIS応用専門家。1999～2000年, ESCAPコンサルタント, 2000～02年アジア工科大学院上級研究員。2002年4月, 日本学術振興会外国人特別研究員として東南アジア研究センターに配属される。
6. (1) “Assessment of Small Passive Corner Reflectors for Geometric Correction of RADARSAT Fine Mode SAR Data,” (共著) in *Proceedings of The 22nd Asian Conference on Remote Sensing, 5-9 November 2001, Singapore, CRISP, SISV, AARS*.
- (2) “Estimating Soil Moisture in Rainfed Paddy Fields Using ERS-2 C-Band SAR Data,” in *Proceedings of the Third International Symposium on Retrieval of Bio and Geophysical Parameters from SAR Data for*

Land Applications, 11-14 September 2001, UK.

- (3) “Land Evaluation and Farming Systems Analysis for Sustainable Development of Marginal Agricultural Lands,” in *Proceedings of the Asian Agriculture Congress, 24-27 April 2001, Manila, Philippines.*

阿部 健一

1. 京都大学農学部, 1984.
2. 京都大学農学修士, 1986.
3. 森林生態学
4. (1) スマトラ泥炭湿地林史
(2) 東南アジア熱帯林のポリティカル・エコロジー
(3) メコン河流域開発計画への地域研究的アプローチ
東南アジアの熱帯林(中国南部も含めたい)をめぐる、「先住民」「国家」「グローバルな関心」の関わりを歴史的に明らかにすることが現在にいたるまでの研究のテーマである。生活の場としての熱帯林, 資源としての熱帯林, 地球環境問題の中の熱帯林をとらえることになる。スマトラの泥炭湿地林で始めた研究(1)を, 広く東南アジア熱帯林まで広げた(2)。さらに, 関心は熱帯林だけでなく, 対象地域を「メコン河流域」として, メコン開発の歴史の変遷(3), とくに日本の関与を中心に, 開発と環境の問題を扱ってゆきたいと思っている。
5. 当時としては珍しく, アカデミックキャリアの比較的早い時期に, 熱帯林で調査することができた。熱帯林の森林生態学的な調査から始めたが, しだいに熱帯林に関わる人々の方に興味に移った。東南アジア研究センターの助手として採用されて(1989年)以降, その傾向は強くなっている。私のやってきた森林生態的研究は, 時代遅れになっているし, 細分化され同時に組織化された現在の自然科学的熱帯林研究には, もはや関心はない。スマトラ泥炭湿地林の調査は, センターの助手となってから始めたが, 今日まで断続的に続けている。国立民族学博物館・地域研究企画交流センターに配置換え(1996年)になってからは, 新たな研究環境の利点を生かして, より広く中国の雲南を含めた東南アジアの熱帯林の地域研究(ポリティカル・エコロジー)を研究対象とするようにした。まとめつつあるのは「雲南の森林史」で

あるが, ベトナム・カンボジア・ネパール・ブータンでも臨地調査を行った。山田勇教授の科研で, アフリカ・南米の熱帯林を訪れる機会を得たことは, 東南アジア熱帯林を外から見直す貴重な経験だった。地域研究企画交流センターでは, 国際シンポジウムを主催する経験も積みしてもらった。これまでに, “Population Movement in South-east Asia: Changing Identities and Strategies for Survival” (Co-organized with Ishii Masako) “Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia: Historical Perspectives” “Tropical Forests and Extreme Conflicts” といった国際シンポジウムを開催。今年度は, “In, out, in, out: Populations, Migrations, and the Social Ecology of Tropical Forests” “Water and Cultural Diversity” (UNESCOと共催) “Mekong River Development: Viewed from Yunnan”などを予定している。

2000年から総合研究大学院大学・先導科学研究科・生命体科学専攻を併任。そこでの活動は, 総合研究大学院大学のホームページで紹介している (<http://sendou.soken.ac.jp>)。

6. (1) 「スマトラ泥炭湿地林の近代——試論」『東南アジア研究』31(3), 1993.
- (2) 「スマトラの泥炭湿地林に暮らす人びと——人と自然のぶつかりあうフロンティア」『地理』40(1), 1995.
- (3) 「ラジャが残したチムールの森」山田勇(編)『森と人の対話』人文書院, 1996.
- (4) 「森と人と自分と——スマトラ泥炭湿地林の開拓」山田勇(編)『フィールドワーク最前線』弘文堂, 1996.
- (5) 「熱帯多雨林から地域研究へ」『総合的地域研究』13, 1996.
- (6) “*Cari Rezeki, Numpang, Siap: The Reclamation Process of Peat Swamp Forest in Riau.*”『東南アジア研究』34(4), 1997.
- (7) 『事典東南アジア——風土・生態・環境』(共編著)弘文堂, 1997.
- (8) 「雲南の森林史(I)——中甸盆地の神山」『東南アジア研究』35(3), 1997.
- (9) 「雲南の森林史(II)——中標高盆地の森林破壊とユーカリ植林」『東南アジア研究』35(3), 1997.
- (10) 「泥炭湿地林——スマトラの開拓移民と開発

- の将来』『TROPICS』6(3), 1997.
- (11) 「地域生態史の視点」『地域研究論集』1(2), 1998.
 - (12) 「泥炭湿地林と『開発』内閣』『月刊みんぱく』3月号, 1999.
 - (13) 「神の山のゆくえ——雲南の人と森」山田勇(編)『森と人のアジア』(講座人間と環境)昭和堂, 1999.
 - (14) 「伝統の生成システムの欠如——固定化しない東南アジア」高谷好一(編著)『〈地域間研究〉の試み(下)』京都大学学術出版会, 1999.
 - (15) *Population Movement in Southeast Asia: Changing Identities and Strategies for Survival*, (共著) JICAS Symposium Series No.10, The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, 2000.
 - (16) 「森の中から見た熱帯林問題」『季刊民族学』98, 2001.

社会文化相関研究部門

濱下 武志

1. 東京大学文学部, 1972.
2. 東京大学文学修士, 1974.
3. アジア地域研究
4. (1) 華僑・華人のネットワーク
(2) 地域システム
(3) ポスト国家の時代における宗主権と主権
(4) 海洋アジア
東南アジア華人と中国華南との歴史的な結びつきを、シンガポールと香港に焦点を当てて調査を行い、タイ・マレーシアを中心として、ヤンゴン・ジャカルタの調査を加え、華僑送金のメカニズムと、華南・東南アジア間の商業ネットワークを研究してきた。香港においては、貿易・貿易金融の検討に加え19世紀後半の土地改革、商業組織、外国銀行、地域組織などを調査している。1997年の返還後の変化にも注目した研究を行っている。
5. 1979年、一橋大学経済学部専任講師, 1981年、一橋大学経済学部助教授, 1982年、東京大学東洋文化研究所助教授, 1988年、東京大学東洋文化研究所教授, 2000年、京都大学東南アジア研究センター教授。
6. (1) 『中国近代経済史研究——清末海関財政と開

- 港場市場圏』東文研研究報告, 1989.
- (2) 『近代中国の国際的契機』東京大学出版会, 1990.
 - (3) 『アジア交易圏と日本工業化1500-1900』(共編著) リプロポート, 1991.
 - (4) 「朝貢と条約」溝口雄三他(編)『アジアから考える』3, 東京大学出版会, 1994.
 - (5) 「近代東アジア国際体系」平野健一郎(編)『講座現代アジア』4, 東京大学出版会, 1994.
 - (6) “Overseas Chinese Remittance and Asian Banking History,” in O. Checkland (ed.), *Pacific Banking, 1859-1959*, St. Martin's Press, New York, 1994.
 - (7) “The Tribute Trade System and Modern Asia,” in A. J. H. Latham (ed.), *Japanese Industrialization and the Asian Economy*, Routledge, London, 1994.
 - (8) 「海のアジア史」『大航海』2, 1995.
 - (9) 「海と国家」『へるめす』55, 1995.
 - (10) 「環シナ海域の観点から」川勝平太(編)『海から見た歴史』藤原書店, 1996.
 - (11) 『香港』筑摩書房, 1996.
 - (12) 『朝貢システムと近代アジア』岩波書店, 1997.
 - (13) 「歴史研究と地域研究」『地域の世界史1——地域史とは何か』山川出版, 1997.
 - (14) “The Intra-regional System in East Asia in Modern Times,” in P. J. Katzenstein and T. Shiraishi (eds.), *Network Power: Japan and Asia*, Cornell University Press, Ithaca and London, 1997.

林 行夫

1. 龍谷大学文学部, 1979.
2. 京都大学博士(人間・環境学), 2001.
3. 文化人類学, 宗教社会学
4. 東南アジア大陸部における民族間関係のなかの宗教と文化再編の比較研究
東南アジア大陸部とりわけタイ、ラオス、カンボジアを中心とする上座仏教の制度的布置をそれぞれの国家の枠組みで捉えるとともに、その実践を地域ごとに展開される動的な民族間関係、精霊祭祀の変容過程、儀礼を組織する俗人の諸活動において検討することにより、国境を超え民族や地域を融合・分離させる宗教実践が、近年のグ

- ローバルな社会変化のなかで、どのようなかたちで生きられる文化を構築、再編しているのかを地域間比較の観点から明らかにする。
5. 1988年国立民族学博物館研究部助手に採用され、1993年京都大学東南アジア研究センター助教授に転任、現在に至る。東北タイ・ラオ系農村の宗教と村落形成について、1981～83年タイ・チュラーロンコーン大学大学院（社会学・人類学科）留学中に定着調査、1984～85年、1987年に広域調査を実施。1989年以来、タイ、ラオス、西南中国（雲南省）で上座仏教の実践形態にかんする比較研究に従事。1993～94年にはカンボジアの仏教復興についての調査を実施。1995年以来、西南中国を含めた東南アジア大陸部の民族間関係の比較研究にもとりくむ。
6. (1) 「モータムと『呪術的仏教』——東北タイ・ドンデン村におけるクン・プラタム信仰を中心に」『アジア経済』25(10), 1984.
- (2) “A Temple, Ritual and World-View in Don Daeng,” in H. Fukui *et al.* (eds.), *A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand* (The Second Interim Report), CSEAS, Kyoto University, 1985.
- (3) 「葬儀をめぐるブン（功德）と社会関係」『東南アジア研究』23(3), 1985.
- (4) 「タイ仏教における女性の宗教的位相についての一考察」『龍谷大学社会学論集』7, 1986.
- (5) 「ラーオ系稲作村における互助規範と功德のシェアの社会的意味——タイ上座部仏教の文化人類学的考察」『ソシオロジ』105, 1989.
- (6) 「ダルマの力と帰依者たち——東北タイにおける仏教とモータム」『国立民族学博物館研究報告』14(1), 1989.
- (7) 「『王』・功德・開発——現代タイ王権と仏教」松原正毅（編）『王権の位相』弘文堂, 1991.
- (8) 「内なる実践へ——上座仏教の論理と世俗の現在」前田成文（編）『東南アジアの文化』（講座・東南アジア学第5巻）弘文堂, 1991.
- (9) 「仏教儀礼の民族誌」石井米雄（編）『講座仏教の受容と変容2・東南アジア編』佼成出版社, 1991.
- (10) 「ラオ人社会の変容と新仏教運動——東北タイ農村のタマカーイをめぐる」田辺繁治（編）『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界』京都大学学術出版会, 1993.
- (11) 「森林の変容と生成——東北タイにおける宗教表象の社会史試論」佐々木高明（編）『農耕の技術と文化』集英社, 1993.
- (12) “Notes on the Inter-ethnic Relation in History: With Special Reference to Mon-Khmer Peoples in Southern Laos,” in Surat Worangrat (ed.), *Chonklum Chattiphan nai aeng Sakon Nakhon*, Sathaban Ratchaphat Sakon Nakhon, 1995.
- (13) 「仏教の多義性——戒律の救いの行方」青木保（編）『宗教の現代』（岩波講座 文化人類学 第11巻）岩波書店, 1997.
- (14) 「もうひとつの『森』——ラオ人とモンクメール系諸語族の森林観から」『東南アジア研究』35(3), 1997.
- (15) 「カンボジアにおける仏教実践——担い手と寺院の復興」大橋久利（編）『カンボジア——社会と文化のダイナミックス』古今書院, 1998.
- (16) 「『ラオ』の所在」『東南アジア研究』35(4), 1998.
- (17) “Rup Laksana Mai khong Phi Khumkhong Muban nai Mu Chao Thai-Lao nai phak tawanookchiangnua khong Prathet Thai,” *Warasan Mahawitthayalai Maha Sarakham*, 17(1), 1999.
- (18) “Spells and Boundaries: Wisa and Thamma among the Thai-Lao in Northeast Thailand,” in Y. Hayashi and Yang Guangyuan (eds.), *Dynamics of Ethnic Cultures Across National Boundaries in Southwestern China and Mainland Southeast Asia: Relations, Societies, and Languages*, Chiang Mai: Ming Muang Publishing House, 2000.
- (19) 『ラオ人社会の宗教と文化変容——東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会, 2000.
- (20) “Buddhism without Official Organization: Notes on Theravada Buddhist Practice in Comparative Perspective,” in Y. Hayashi and Aroonrut Wichienkeo (eds.), *Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China*, Bangkok: Amarin Printing, 2002.

石川 登

1. 東京都立大学人文学部, 1985.
2. ニューヨーク市立大学 Ph. D., 1998.
3. マレーシア・インドネシア地域研究, 社会人類学
4. 社会動態論
野外調査によって知ることのできる人々の生活とこれをとりまくマクロな社会動態の結びつきに注意をはらうこと, そのためにフィールドワーカーとして可能なかぎり歴史を意識すること, この二点を基本姿勢としながら調査研究を進めている。
5. 1994年, 東南アジア研究センター助手。1999年, 同助教授。主に東マレーシアおよびインドネシア, 西カリマンタン州にて調査に従事する。
6. (1) 「シドニー W. ミンツ著『甘さと権力——砂糖が語る近代史』『民族学研究』54(4), 1990.
- (2) 「ボルネオにおける非単系出自論の可能性」『社会人類学年報』16, 1990.
- (3) 「理論と民族誌——『高地ビルマ』をめぐる人類学小史 1954-1982」『民族学研究』57(1), 1992.
- (4) 「農民と往復切符——循環的労働移動とコミュニティ研究の前線」『民族学研究』58(1), 1993.
- (5) 「境界の社会史——ボルネオ西部国境地帯とゴム・ブーム」(特集:「ポリティカル・エコノミーと民族誌」)『民族学研究』61(4), 1997.
- (6) 「民族の語り方——サラワク・マレー人とは誰か」青木 保・内堀基光他(編)『民族の生成と論理』(岩波講座 文化人類学第5巻) 岩波書店, 1997.
- (7) “Between Frontiers: The Formation and Marginalization of a Border Malay Community in Southwestern Sarawak, Malaysia 1870s-1990s,” Ph. D. Dissertation, The City University of New York, 1998.
- (8) “On the Value and Value Equivalence of Commodity, Labor and Personhood: The Use and Abuse of Nation-States in the Border Land of Western Borneo,” presented at the 4th International Symposium, “Population Movement in Southeast Asia: Changing Identities and Strategies for Survival,” Joint Research Project on Population Movement in the Modern World, Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, Osaka, September 17-19, 1998.
- (9) “A Benevolent Protector or a Failed Exploiter?: Local Response to Agro-economic Policies under the Second White Rajah, Charles Brooke (1868-1917) of Sarawak,” in Shamsul A. B. and T. Uesugi (eds.), *Japanese Anthropologists, Malaysian Society: Contribution to Malaysian Ethnography*, Senri Ethnological Studies 48, National Museum of Ethnology, 1998.
- (10) 「空間の履歴——サラワク南西部国境地帯における国家領域の生成」坪内良博(編)『地域形成の論理』京都大学学術出版会, 1999.
- (11) “The Social History of Coconuts in Semantan, Southwestern Sarawak,” *The Sarawak Museum Journal*, LIV (75), 1999.
- (12) 「文化と経済のボーダーランド——ボルネオ南西部国境地帯の調査から」川田順造(編)『文化としての経済』山川出版社, 2001.
- (13) 「マレーシア, サラワク北部クムナ川流域社会における森林資源収奪と人口移動」基盤研究(A)(2)『異生態系接触に関わる人口移動と資源利用システムの変貌』(研究代表者, 古川久雄) 科学研究費補助金研究成果報告書, 2001.
- (14) The Genesis of Nation Space in the Borderlands: A Case from Southwestern Sarawak, 1871-1917, Paper presented at Symposium Internasional II Jurnal Antropologi Indonesia “Globalisasi dan Kebudayaan Lokal: Suatu Dialektika Menuju Indonesia Baru,” Padang, Indonesia, 18-21 July 2001.
- (15) 「東南アジア島嶼部のフロンティア社会——ボルネオ島西部国境地帯からの視点」基盤研究(B)(2)『フロンティア社会の地域間比較研究』(研究代表者, 田中耕司) 科学研究費補助金研究成果報告書, 2002.
- (16) 「北ボルネオ会社植民地における労働管理——戦間期における国際協調主義と帝国主義ネットワーク」基盤研究(B)(2)『帝国の文化人類学的研究』(研究代表者, 永渕康之) 科学研究費補助金研究成果報告書, 2002.

- (17) 「共同体の定位 —— ボルネオ島西部国境社会における『村落』『国家』『民族』基盤研究 (A) (2) 『東南アジア社会変容過程のダイナミズム —— 民族間関係・移動・文化再編』(研究代表者, 加藤剛) 科学研究費補助金研究成果報告書, 2002.
- (18) 「国家の歴史と村びとの記憶 —— サラワク独立をめぐる」黒田悦子 (編) 『個人と民族の運動』山川出版社, 2002.
- (19) “The Sarawak Malay Studies: A New Agenda and Lessons from the Past,” in *Nusantara Studies Workshop on the State of the Art*, Institute of East Asian Studies, Universiti Malaysia Sarawak. (in print)
- カ
ロ
ラ
イ
ン
シ
ィ
ハ
ウ
Caroline Sy HAU
1. フィリピン大学 (英文学), 1990.
 2. コーネル大学 Ph.D. (英文学), 1998.
 3. カルチュラル・スタディーズ
 4. (1) 東南アジアの華僑
 - (2) フィリピンにおける文化的生産
 - (3) 東南アジアにおける植民地主義とナショナリズムの比較
 近著 *Necessary Fictions: Philippine Literature and the Nation, 1946-1980* (Ateneo de Manila University Press, Philippines, 2000) および近編著 *Intsik* (Anvil Publishing, Philippines, 2000) では、フィリピンにおける歴史と文学の緊密な緊張関係を探究してきた。他いくつかの論文では、フィリピンや東南アジアにおける華僑の文化的生産、「東南アジア」および「アジア」の地域言説の理論化について、そして第三世界の民族解放闘争における知識人の役割について著した。現在もフィリピンの芸術文化に関するインターネットジャーナルへの寄稿を通じてフィリピンの知的現場とのコンタクトを継続している (www.LegManila.com.)。現在二冊の本の著作に向けて準備している。一冊は上述の本の続編ともいうべきもので、1980年代初期から今にいたるフィリピン・ナショナリスト文学の研究であり、今一冊は第二次世界大戦期以来のフィリピン華僑の日常生活の研究である。
 5. 1990年フィリピン大学講師, 1994年コーネル大学副手, 1998年フィリピン大学講師, 1999年京都大学東南アジア研究センター助教授。
 6. (1) “Dog eaters, Postmodernism, and the Worlding of the Philippines,” in Priscelina Patajo Legasto and Cristina Patajo Hidalgo (eds.), *Philippine Post-Colonial Literary Studies: Essays on Language and Literature*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1993.
 - (2) “Hierarchy and Hybridity in Homi Bhabha’s ‘Signs Taken for Wonders,’” in Jaime Biron Polo (ed.), *Critical Forum*, Manila: National Commission for Culture and the Arts, 1995.
 - (3) “Alterities of Rupture in Octavia E. Butler’s Kindred,” *Journal of English and Comparative Literature*, 4 (2), 1996.
 - (4) *The Best of Tulay: An Anthropology of Chinese Filipino Writing in English, Tagalog and Chinese*, (共編) Manila: Kaisa Para sa Kaunlaran, Inc., 1997.
 - (5) “Kidnapping, Citizenship, and the Chinese,” *Public Policy*, 1 (1), 1997.
 - (6) *All the Conspirators by Carlos Bulosan*, (編) Pasig: Anvil Publishing, Inc., 1998.
 - (7) “Literature, Nationalism, and the Problem of Consciousness,” *Diliman Review*, 46 (3, 4), 1998.
 - (8) “Afterword to *Intsik: An Anthropology of Chinese Filipino Writing*,” in Priscelina Patajo Legasto (ed.), *Filipiniana Reader: A Companion Anthropology of Filipiniana Online*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1998.
 - (9) “‘Who Will Save Us from the Law?: The Criminal State and the Illegal Alien in Post-1986 Philippines,’” in Vicente L. Rafael (ed.), *Figures of Criminality in Indonesia, Vietnam, and the Philippines*, Ithaca: Cornell Southeast Asia Program, 1999.
 - (10) “Clash of Spirits, Texts, and Histories,” *Public Policy*, 3 (1), 1999.
 - (11) “On Representing Others: Intellectuals, Pedagogy, and the Uses of Error,” in Paula Moya and Michael Hames Garcia (eds.), *Reclaiming Identity: Realist Theory and the Predicament of Postmodernism*, Berkeley:

University of California Press, 2000.

- (12) *Intsik: An Anthropology of Chinese Filipino Writing*, (編) Pasig: Anvil Publishing, 2000.
- (13) *Necessary Fictions: Philippine Literature and the Nation, 1946-1980*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2000.

速水 洋子

1. 国際キリスト教大学教養学部, 1981.
2. ブラウン大学人類学 Ph. D., 1992.
3. 文化人類学, 東南アジア地域研究
4. (1) 東南アジア大陸部における山地・低地の民族間関係
(2) 東南アジア周縁社会における宗教と社会の動態
(3) 東南アジアにおけるジェンダーと家族
15年前に始めた北タイ山地のカレンと呼ばれる人々の村での調査が今にいたる研究の出発点である。そこから空間的にはより広く北タイ山地からミャンマーでの調査を行い, 時間的には時々刻々と変わる現況から植民地初期ビルマまで遡って資料や文献を渉猟している。これまでの研究を包含する主題は, 大陸部山地における山地と平地の民族間関係であるが, 扱ってきた主なテーマとしては, 宗教実践の動態に関わるもの, 山地における森林や土地の権利の主張をめぐるもの, そしてジェンダーの視点から宗教変化や移動体験, 民族間関係を捉えるものに大きく分かれる。そのいずれにおいても, 近代国家の枠組の生成の下にありながら, 必ずしもそればかりに規定されるものではない周縁の人々の生活の変化を, 民族間関係の変遷を見ながら追ってきた。
現在は「家族」に関心をもっており, 自分自身の生活体験に根ざした自他理解を目指しながら, フィールド調査を続けたい。
5. 1993年東北大学, 宮城学院女子大学にて非常勤講師, 1996年東南アジア研究センターに助手として採用される。1998年京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助手に配置換。2000年より, 東南アジア研究センター助教授。1987年よりタイにて調査活動を行う。1987~89年, 1996年以後毎年北タイを中心とする調査。2000年よりミャンマーでの研究開始。

6. (1) "Women in Thailand: Thoughts on the Recent Anthropological Literature," 『社会科学ジャーナル』 25 (1), 国際基督教大学社会科学研究所, 1986.
- (2) "Ritual and Religious Transformation among Sgaw Karen of Northern Thailand: Implications on Gender and Ethnic Identity," Ph.D. dissertation, Brown University, 1992.
- (3) 「カレン族における周縁の力と宗教・社会変動——十九世紀ビルマから今日のタイまで」『民族学研究』 57 (3), 1992.
- (4) 「カレン族の赤いスカート」『季刊民族学』 17 (2), 1993.
- (5) "To Be Karen and to Be Cool: Community, Morality and Identity among Sgaw Karen in Northern Thailand," *Cahier des Sciences Humaines*, 29 (4), Paris: Editions de l'Orstom, 1993.
- (6) 「北タイ山地における仏教布教プロジェクト——あるカレン族村落群の事例」『東南アジア研究』 32 (2), 1994.
- (7) 「カレン族における秩序と豊饒, 男と女」清水昭俊 (編) 『洗練と粗野——社会関係を律する価値』 東京大学出版会, 1995.
- (8) "Karen Tradition According to Christ or Buddha: The Implications of Multiple Reinterpretations for a Minority Ethnic Group in Thailand," *Journal of Southeast Asian Studies*, 27 (2), 1996.
- (9) "Between Tradition and the State: Women and Ethnic Boundary among a Minority Ethnic Group in Northern Thailand," in *Proceedings of the International Conference on Women in the Asia-Pacific Region: Persons, Powers and Politics*, Singapore: National University of Singapore, 1997.
- (10) "Internal and External Discourse of Communality, Tradition and Environment: Minority Claims on Forest in the Northern Hills of Thailand," 『東南アジア研究』 35 (3), 1997.
- (11) "Motherhood Redefined: Women's Choices on Family Rituals and Reproduction in the Peripheries of Thailand," *Sojourn*, 13 (2),

1998.

- (12) 『『民族』とジェンダーの民族誌——北タイ・カレンにおける女性の選択』『東南アジア研究』35(4), 1999.
- (13) 『『森に生きるカレン』と伝統の創造』山田勇(編)『森と人のアジア——伝統と開発のはざまに生きる』昭和堂出版, 1999.
- (14) 「周縁社会に生きる女性たち——北タイ・カレン」窪田幸子・八木祐子(編)『社会変容と女性——ジェンダーの文化人類学』ナカニシヤ出版, 1999.
- (15) 「タイ国家の領土におけるカレンの土地権——共同性と伝統の構築」杉島敬志(編)『土地所有の政治史——人類学的視点』風響社, 1999.
- (16) “Buddhist Missionary Project in the Hills of Northern Thailand: A Case Study from a Cluster of Karen Villages,” *Tai Culture: International Review on Tai Cultural Studies*, 4(1), 1999.
- (17) “‘He’s Really a Karen’: Articulation of Ethnic and Gender Relationship in a Regional Context,” in Y. Hayashi and Yang Guangyuan (eds.), *Dynamics of Ethnic Cultures across National Boundaries in Southwestern China and Mainland Southeast Asia: Relations, Societies, and Languages*, Chiang Mai: Ming Muang Printing House, 2000.
- (18) “The Decline of Founder’s Cults and Changing Configurations of Power: Village, Forest and State among Karen,” in Tannenbaum, Nicola and C. A. Kammerer (eds.), *Founder’s Cults*, Yale University: Center for Southeast Asian Studies. (in press)

濱元 聡子 (2000年4月1日～2003年3月31日)

1. 立命館大学国際関係学部, 1992.
2. 京都大学人間・環境学修士, 1997.
3. 東南アジア地域研究, 文化人類学
4. マカッサル海峡における人の移動に関する社会史的・地域研究
1995年以来、インドネシア・マカッサル海峡で人の移動に関する社会史的・地域研究に従事している。具体的には「海」をひとつの「地域」としてとらえることができるとしたら、それはどのよ

うなかたちで可能であるのかを、そこで生活する人びとの移動をてがかりに、文化人類学的アプローチを中心的な手法にして、明らかにしようと試みている。地域といっても、生態環境としてとらえるだけではなく、人の暮らしが営まれる社会的空間としてとらえようと考えてきた。個人史の聞き取りや、過去100年間ほどに起こった出来事を、一次資料や聞き取りから再構築することを試みてきた。大文字の「世界史」の間隙に位置してきたような海の「地域」の社会像を描こうとしている。イスラームが多数派でありながらも、その教義の理解や実践は、中東や大陸部のイスラーム国家のそれとは、異なる部分もおおきい。「海」の地域であることが、どの程度にその差異に関わっているのだろうか。ムスリム女性商人の移動に同行して、自分の歩幅と目線で確かめた東南アジア海域世界像を明らかにし、その社会史を書きおこそうとしている。その次の段階としては、「海」を含む国境と国家が今後どのような変化と変容を経験するのかということへつながる予定である。

5. 1993～94年マレーシア・サバ州において国境を越える人の移動に関する研究に従事。1995年～現在、マカッサル海峡島嶼部において、日常的に行われる人の移動に関する社会史的研究に従事。
 - (1) 日本学術振興会特別研究員 DC 1 (1997年4月～2000年3月)
 - (2) 日本学術振興会特別研究員 PD (2000年4月～2003年3月)
6. (1) 「東マレーシア・サバ州における人の移動——スルー海・スラウェシ海に惹かれた国境からみる東南アジア海域世界の構造」立命館大学国際関係学研究科修士論文, 1994.
 - (2) 「東マレーシア・サバ州における人の移動——スルー諸島からのバジャウ族の移動を中心に」『南方文化』22, 1995.
 - (3) 『『移動の島』の女たち・その生活世界の展開——マカッサル海峡島嶼部における社会的動態の考察』京都大学人間・環境学研究科修士論文, 1997.
 - (4) 「ハッジ・ミラの行商記録——マカッサル海峡における女性の生活世界」『ジェンダー——移動と後期近代』(「ジェンダー」研究会平成9年度報告書), 1998.
 - (5) 「発酵保存食品チャオの生活誌——マカッサ

ル海峽 B 島における生業活動の変化』『東南アジア研究』37 (3), 1999.

- (6) フィールド便り「オルケス・ムラユのある風景——あるムスリム社会の結婚式」『アジア/アフリカ地域研究』1, 2000.
- (7) 書評“Christian Heersink. *Dependence on Green Gold: A Socio-economic History of the Indonesian Coconut Island Selayar*”『東南アジア研究』38 (1), 2000.
- (8) 書評“Roger Tol; Kees van Dijk; and Greg Acciaoli, eds. *Authority and Enterprise among the People of South Sulawesi*”『東南アジア研究』39 (2), 2001.

青山 亨

1. 京都大学文学部, 1981.
2. シドニー大学 Ph. D., 1994.
3. インドネシア古代史, ミクロネシア島嶼社会研究
4. (1) 14-15 世紀ジャワにおける年代記の構造分析
- (2) ジャワにおけるインド的世界観の変遷
- (3) ミクロネシアにおける伝統文化の継承と創生
私の一貫した関心は、15 世紀以前のジャワ島を中心として生産されたインド的原理を主たる特徴とする文学作品と、そこに描かれる世界観の問題である。なかでも、年代記『デーシャワルナナ』と『パララトン』は、ジャワ人による歴史叙述の始まりとして重要であり、研究の主たる対象としている。さらに、このようなインド的世界観と現実との相克、さらには、ジャワ島外へとジャワの影響が拡散したり、あるいは、ジャワ島自体がイスラーム化していく中でインド的世界観の変遷にも関心をもっている。ミクロネシアにおいては、ヤップ本島部とヤップ外島部を包括したヤップ多島域を対象として、文化的アイデンティティの形成を目的とする文化政策と現実の相克を研究している。インドネシアとミクロネシアという二つの「ネシア」世界は海域世界のネットワークによって形成される文化という共通点を持ちつつ、インド的原理の経験の有無、口承と書承の卓越度の違いなどの差異があり、興味深い対照を示している。
5. 1994 年、鹿児島大学南太平洋海域研究センターに助教授として採用される。1998 年、多島圏研

究センターに改組。2000 年、教授に昇任、現在に至る。古ジャワ語史料による古代インドネシアの歴史と文化の研究に従事する。また、1995 年、1999 年、2001 年に鹿児島大学練習船によるミクロネシア調査隊に参加し、文献資料と聞き取りによるミクロネシアにおける伝統的文化の継承と創生に関する調査を行う。

6. (1) 「古代ジャワ文学におけるスタソーマ物語の受容と変容」『東南アジア研究』24 (1), 1986.
- (2) 「14 世紀末における『ジャワ東西分割』の再解釈」『東南アジア——歴史と文化』21, 1992.
- (3) 「叙事詩、年代記、予言——古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観」『東南アジア研究』32 (1), 1994.
- (4) 「アルジュナウィジャヤからスタソーマへ——歴史的な文脈の中の二つの古ジャワ語文学作品」『東洋学報』77 (1-2), 1995.
- (5) “Annotated Inventory of a Collection of Palauan Legends in the Belau National Museum,” *Kagoshima University Research Center for the South Pacific Occasional Papers*, 30, 1996.
- (6) 「バリ島クルンクン旧王宮の天井画に描かれた『スタソーマ』物語——図像テキストへのひとつのアプローチ」吉川利治 (編)『東南アジア史の中の「中央」と「地方」』平成 6-8 年度文部省科学研究費補助金 (国際学術研究) 研究成果報告書, 大阪外国語大学, 1997.
- (7) 「古代ジャワ社会における自己と他者——文学テキストの世界観」辛島昇・高山博 (共編)『地域のイメージ』山川出版社, 1997.
- (8) 「インドネシアにおけるラーマ物語の受容と伝承」金子量重・坂田貞二・鈴木正崇 (共編)『ラーマヤナの宇宙——伝承と民族造型』春秋社, 1998.
- (9) “Prince and Priest: Mpu Tantular’s Two Works in the Fourteenth Century Majapahit,” *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* (The Oriental Library), 56, 1999.
- (10) 「インドネシアのナーガ——王権・地下界・境界」『アジア遊学』28, 2001.
- (11) “Yap Day: Cultural Politics in the State of Yap,” *Kagoshima University Research Center for the South Pacific Occasional*

Papers, 34, 2001.

- (12) 『薩南諸島——21世紀への挑戦』(共編著) 鹿児島大学多島圏研究センター, 2001.
- (13) 「東ジャワの統一王権——アイルランガ政権からクディリ王国へ」石澤良昭(編)『東南アジア古代国家の成立と展開』(岩波講座東南アジア史2) 岩波書店, 2001.
- (14) 「シンガサリ=マジャパヒト王国」石澤良昭(編)『東南アジア古代国家の成立と展開』(岩波講座東南アジア史2) 岩波書店, 2001.

政治経済関連研究部門

海田 能宏

1. 京都大学農学部, 1962.
2. 京都大学農学博士, 1970.
3. 農村開発論, 熱帯農業水文学, 開発技術論
4. (1) アジア農村開発論
(2) 農業発展の水文環境的基盤——風土の工学
(3) アジア・エコテクノロジー・ネットワークの構築
(1)は、地域に適合した農村開発へのアプローチを考究する。バングラデシュ農村定着調査から入り、そこで何が問題なのかを見出し、その解決へのアプローチを絞り込む中で、結局リンクモデルに到達した。ばらばらの地方農村行政を横にリンクし、行政と村落を縦にリンクする。農村研究、農村開発実験を経て、現在バングラデシュのひとつの郡の農村開発行政機構をモディファイしようというJICAパイロット事業へと展開した。(2)は、農業・農村開発において用いられる技術を考究する。「風土の工学」とエコテクノロジーをキー・コンセプトとして、諸事例を収集して分析中。水と土と土地利用に関するエコテクノロジーが中心課題。(3)は、(2)の諸事例の収集網を、関係研究者のアジア・ネットワークを組織して広げようとしている。より一般的には、上の3テーマは、地域地域で異なるべき地域・農村開発に通底する生態観、技術観、開発観を見出すためのサブ・テーマである。
5. 1967年、京都大学助手(農学部)に採用され、1969年、東南アジア研究センターへ配置換え。1974年から77年まで、メコン委員会に兼任勤務。1974年、東南アジア研究センター助教授、1984年、同教授に昇任。同年から農学研究科の熱帯農

学専攻の協力講座担当教授、さらに1993年から人間・環境学研究科、1998年からアジア・アフリカ地域研究研究科の協力講座担当教授を兼任。

はじめは畑地灌漑の研究から入り、1969年以来、熱帯の水文、水利、農業生態の研究を始め、東南アジアを中心に、インド、南中国を含む広い地域の臨地研究を経験した(業績欄の(1)から(4)まではこの時期の作品)。1981年から東北タイのドンデーン村の総合的研究に参加し(業績5)、以来、農村開発研究に関心を広げ、1986年からはバングラデシュ農村開発研究を組織し、総合的・学際的な農村研究から、農村開発の実践的研究へ、個人的にはさらに農村開発政策論へと、ノーマティブな方向へ研究の幅を広げてきた(業績7, 8, 13, 14, 17, 19など)。

最近では、これまでの臨地研究や農村定着研究で得たデータや培ってきた経験を生かして、風土の工学やEcotechnologyという概念を設定して技術論を展開している(業績6, 9, 11, 12, 16, 18, 20など)。さらに、Asian Ecotechnology Networkによって日本・東南アジア・インドの生態知識を交流させるプロジェクトを立ち上げた。

6. (1) 「デルタ稲作農業の自然環境とデルタの開発構図」『東南アジア研究』13(1), 1975.
(2) “Agro-Hydrologic Regions of the Chao Phraya Delta,” in S. Ichimura (ed.), *South-east Asia: Nature, Society and Development*, University Press of Hawaii, 1976.
(3) “Effect of Mekong Mainstream Flood Regulation on Hydrology and Agriculture in the Cambodian Lowland,” 『東南アジア研究』16(4), 1979.
(4) 「メコンをデザインする」松田松二(編)『自然とむすぶ文化』共立出版, 1980.
(5) 「東北タイ・ドンデーン村——村のたたずまい」(共著)「東北タイ・ドンデーン村——稲作の不安定性」(共著)『東南アジア研究』23(3), 1985.
(6) 「水文と水利の生態」渡部忠世・福井捷朗(共編)『稲のアジア史第1巻』小学館, 1987.
(7) *Agricultural and Rural Development in Bangladesh: Key Questions and Issues from Village-Based Studies, 1986-1989*. JSARD Publication No. 20. (共編著) JICA, Dhaka, 1990.
(8) 特集「バングラデシュの農業と農村——農村

- 発展のための共同研究」(編著)『東南アジア研究』28(3), 1990.
- (9) 「稲作と水利」高谷好一(編)『東南アジアの自然』(講座・東南アジア学第2巻) 弘文堂, 1990.
- (10) “Tropical Hydrology Simulation Model 1 for Watershed Management (1) Model Building, (2) Model Application, (3) Using the Model for Landuse Management,” (共著)『水文・水資源学会誌』4(2), (3), (4), 1991.
- (11) 「北インドの灌漑発展における外来技術と在り地技術」(共著)『農業土木研究』62(2), 1994.
- (12) 「風土の工学」日本大学国際地域研究所(編)『東南アジアの自然・技術・農民』龍溪書舎, 1994.
- (13) 特集「バングラデシュ農村開発研究」(編著)『東南アジア研究』33(1), 1995.
- (14) *Final Report on Joint Study on Rural Development Experiment (JSRDE) Project*, (共編著) BARD & JICA Bangladesh, 1996.
- (15) 『事典東南アジア——風土・生態・環境』(編集委員, 共編著) 弘文堂, 1997.
- (16) “Fudo Engineering for Sustainable Agricultural and Rural Development,” in *Green Productivity, In Pursuit of Better Quality of Life*, Asian Productivity Organization, 1997.
- (17) 「バングラデシュ農村開発実験——関わりの作法」『発展途上国の農村開発』JCAS 連携研究成果報告1, 1999.
- (18) 「農業・農村発展のアジア的パラダイム」原洋之介(編)『発展の固有論理』京都大学学術出版会, 2000.
- (19) 『人口・環境と食料生産の調和』国際高等研究所, 2002.
- (20) Agrarian versus Mercantile Delta: Characterizing the Chao Phraya Delta in the Six Great Deltas in Monsoon Asia, in Molle, F. and Thipawan (eds.), *The Chao Phraya Delta*, Bangkok: White Lotus, 2002.
3. 歴史学, 比較政治学
4. 東南アジア政治・政治史
東アジアの地域形成, 東南アジア国家形成のマクロ比較史の分析, インドネシア現代政治分析を中心とする。
5. 1975年, 東京大学東洋文化研究所助手, 1979年, 東京大学教養学部(国際関係論)助教授, 1987年コーネル大学助教授(歴史・アジア研究), 1990年同准教授, 1996年同教授, 1996年京都大学東南アジア研究センター教授。
6. (1) 「上からの国家建設——タイ, インドネシア, フィリピン」『国際政治』第84号, 1987.
(2) *An Age in Motion: Popular Radicalism in Java, 1912-1926*, Cornell University Press, 1990.
(3) “Dangir’s Testimony: Saminism Reconsidered,” *Indonesia*, No. 50, 1990.
(4) *Reading Southeast Asia*, (編) Cornell Southeast Asia Program, 1990.
(5) 『インドネシア——国家と政治』リポート, 1992.
(6) 「インドネシアの国家建設——スハルト体制下における技術・戦略産業育成」『東南アジア世界の歴史的位相』東京大学出版会, 1992.
(7) “Current Data on the Indonesian Military Elite,” (共著) *Indonesia*, No. 55, 1993.
(8) *Japanese in Colonial Southeast Asia*, (共編) Cornell Southeast Asia Program, 1993.
(9) “Current Data on the Indonesian Military Elite, January 1992-August 31, 1993,” (共著) *Indonesia*, No. 56, 1993.
(10) *Approaching Suharto’s Indonesia from the Margins*, (編) Cornell Southeast Asia Program, 1995.
(11) “Current Data on the Indonesian Military Elite: Selected Biographies,” (共著) *Indonesia*, No. 59, 1996.
(12) 『新版インドネシア』(ネットワークの社会科学2) NTT出版, 1996.
(13) “The Phantom World of Digoel,” *Indonesia*, No. 61, 1996.
(14) 「インドネシアの近代における『わたし』——カルティニの ik とスワルディの saya」『東南アジア研究』34(1), 1996.
(15) “Policing the Phantom Underground,” *In-*

白石 隆

1. 東京大学教養学部教養学科(国際関係論), 1972.
2. コーネル大学 Ph. D. (歴史学), 1986.

donesia, No. 63, 1997.

- (16) 『スカルノとスハルト——偉大なるインドネシアをめざして』岩波書店, 1997.
- (17) *Network Power: Japan and Asia*, (共編著) Cornell University Press, 1997.
- (18) 『崩壊インドネシアはどこへ行く』NTT出版, 1999.
- (19) 『海の帝国』中央公論新社, 2000.
- (20) 『インドネシアから考える』弘文堂, 2001.

水野 広祐

1. 京都大学経済学部, 1978.
2. 京都大学農学博士, 1994.
3. 経済発展論, 農業経済学, 労働経済学
4. (1) 制度と経済発展
(2) インドネシアにおける労働組合と労使関係
(3) 西ジャワ農村における住民組織とコミュニティに根ざした発展
(4) 経済発展における小営業と在来的発展
(5) インドネシア政治経済論

現在, ミクロ的には「組織と制度」という主題のもと, 民主化・地方分権化への過渡期インドネシアにおいて生まれている新しい組織がどのように制度を変えており, これがどのように経済発展を支えるのかについて研究している。具体的には, (1)「労働組合と労使関係」の研究によって, 新たに多数生まれている労働組合がどのように労使関係に変化をもたらしているのか, また企業レベルや国家レベルの労働政策や人的資源開発政策にどのような変化が現れているのか研究している。また, (2)「住民組織とコミュニティにもとづく発展」において, 特に農村において生まれている住民組織や, 地方分権化の結果変化しつつある行政組織が, 地域経済の発展を促進しうるのかどうか研究している。さらに, (3)「経済発展における小営業と在来的発展」研究では, 通貨危機後より活発になった中小零細企業の活動に焦点を当てている。またマクロ的には, 通貨危機後の資本所有関係の再編などに注目し, 土地・労働・資本および組織の制度に関する検討と, 政策と長期的数量的な変化に関する研究を統合させた(4)インドネシア政治経済論に取り組んでいる。

5. アジア経済研究所研究員 (1978～96年)を経て, 1996年東南アジア研究センターに助教授として着任, 現在に至る。

- 1984～86年にボゴール農業大学開発研究センター客員研究員として, 「インドネシアにおける中小零細企業の発展と農村内非農業部門に関する調査研究」を行う。1989～92年にバンドゥン工業大学環境研究センターにおいて, 「西ジャワ農村における非農業部門研究」プロジェクトに参加し建材産業の調査を行う。1990年には, ガジャマダ大学農村地域開発研究センターにおける「中部ジャワ農村経済の系譜的分析」プロジェクトに参加し, 農家経済調査を行う。1994年および1997年と2000～01年に, バンドゥン工業大学大学院開発研究科において客員講師として経済発展論等を講義。1995年大阪市立大学経済学部客員教授, 1996～97年および1999年と2001年にジャカルタ連絡事務所駐在。1998～2002年に「環境調和型持続的農村開発研究」プロジェクト, 2001年より「過渡期インドネシアにおける人類学的研究」プロジェクトに参加。2002年より「インドネシアの民主化における地方政治の変容」プロジェクト(研究代表), および「東南アジアにおけるセーフティ・ネットの比較研究——『老い』の問題を中心として」プロジェクトに参加。
6. (1) 「1970年代後半におけるインドネシア土地紛争とその特質」滝川 勉(編)『東南アジア農村の低所得階層』アジア経済研究所, 1982.
 - (2) 「インドネシアの土地所有権と1960年農地基本法——インドネシアの土地制度とその問題点」『国際農林業協力』10(4), 1988.
 - (3) “Perspektif Peranan Industri Bahan Bangunan dalam Industrialisasi Pedesaan,” in Sayogyo, M. Tambunan (ed.), *Industrialisasi Pedesaan, Dilengkapi Dengan Memorandum Bersama Tentang Industrialisasi Pedesaan*, Pusat Studi Pembangunan, Institut Pertanian Bogor, Ikatan Sarjana Ekonomi Indonesia, 1990.
 - (4) 「西ジャワ農村における土地所有権の確認書類保有状況」梅原弘光(編)『東南アジアの土地制度と農業変化』アジア経済研究所, 1991.
 - (5) 「規制緩和と政策下のインドネシアにおける労働問題と労働行政——1980年代後半のフォーマルセクターを中心に」『アジア経済』33(5), 1992.
 - (6) 「インドネシアにおける農村出身女子労働者保護問題——急成長輸出産業と中東への労働力

- 輸出』『アジア経済』33 (6), 1992.
- (7) 『東南アジア農村階層の変動』(共編著) アジア経済研究所, 1993.
- (8) 「西ジャワ農村における労働力移動と農村諸階層——プリアンガン高地の農村工業村の事例」『アジア研究』39 (3), 1993.
- (9) 「インドネシア農村におけるプリブミ資本織布小工業の展開——西ジャワ・マジャラヤ地方の産地における小営業」『東南アジア研究』31 (3), 1993.
- (10) 『中部ジャワ農村の経済変容——チョマル郡の85年』(共著) 東京大学出版会, 1994.
- (11) 『東南アジア農村の就業構造』(編著) アジア経済研究所, 1995.
- (12) “Perubahan Sektor Ekonomi Nonpertanian dan Perpindahan Tenaga Kerja di Desa Karang Tengah dan Desa Pesantren,” in H. Kano, F. Hüsken and D. Surjo (eds.), *Di Bawah Asap Pabrik Gula, Masyarakat Desa Di Pesisir Jawa Sepanjang Abad Ke-20*, AKATIGA & Gadjah Mada University Press, 1996.
- (13) *Rural Industrialization in Indonesia: A Case Study of Community-Based Weaving Industry in West Java*, Institute of Developing Economies, 1996.
- (14) 『東南アジアの経済開発と土地制度』(共編著) アジア経済研究所, 1997.
- (15) 「インドネシアにおける行政組織と住民組織——西ジャワ・プリアンガン高地農村の事例」加納啓良 (編) 『東南アジア農村発展の主体と組織——近代日本との比較から』アジア経済研究所, 1998.
- (16) 『インドネシアの地場産業——アジア経済再生の道とは何か?』(地域研究叢書 No. 7) 京都大学学術出版会, 1999.
- (17) 「アジア通貨危機下のインドネシアにおける雇用・労働問題」『アジア経済危機と各国の労働・雇用問題』日本労働研究機構, 2000.
- (18) “Characteristics of Off-farm Sector and Labor Movements in Karang Tengah and Pesantren 1904–1990,” in H. Kano, F. Hüsken and D. Suryo (eds.), *Beneath the Smoke of the Sugar: Mill, Javanese Coastal Community during the Twentieth Century*, AKATIGA & Gadjah Mada University Press, 2001.
- (19) 「インドネシア経済とIMF・世銀——構造調整・民主化・下からの開発の時代」『土地制度史学』第175号, 2002.
- (20) 「グローバリゼーションとインドネシアにおける労働組合政策と労働組合——資本移動類型とDeyo説との関連で」『社会政策学誌』第8号, 2002.

藤田 幸一

1. 東京大学農学部, 1982.
2. 東京大学農学博士, 1992.
3. 農業経済学
4. (1) 南アジアの灌漑と農業・農村発展
(2) 南・東南アジアの農村社会組織と開発行政
(3) アジア途上国の農村開発金融
(4) ミャンマーの農業・農村政策
 バングラデシュ・インドにおける農業発展の原動力となった管井戸灌漑の水取引「市場」についてこれまで継続してきた研究を集成する作業に入るとともに、南・東南アジアの農村社会組織と開発行政、マイクロ・クレジットを中心とする農村開発金融の各研究を継続している。今後、ラオスの農業金融についての研究に本格的に着手する予定。また、ミャンマーにおいて、異なる生態条件から8カ村を選び、世帯レベルの詳細なデータ収集を核とする大規模で体系的な調査をはじめ、現在、データ整理と分析に着手したところである。このミャンマー農村研究は、当面ミャンマー政府に対する政策提言としてまとめられるが、今後、8カ村のモノグラフの作成、さらにテーマ別の幾つかの論文として世に問うていくつもりである。また調査を今後、中長期にわたって継続していくことによって、世界でも最高水準のミャンマー農村研究の確立をめざす。
5. 1986年、農林水産省農業総合研究所研究員。1995年同研究所主任研究官。1995年、東京大学助教授。1998年、京都大学東南アジア研究センター助教授。1992～94年、バングラデシュでJICAプロジェクト「農村開発実験に関する共同研究」に長期派遣専門家として参加。2000年12月から1年間、JICA専門家としてミャンマーに滞在。バングラデシュなど南アジア諸国、ミャンマー、インドネシア及びアフリカの農業・農村発

展の社会経済学的研究に従事，現在に至る。

6. (1) 「バングラデシュにおける農業発展——農業構造と技術変化の関連を中心に」『アジア経済』27 (12), 1986.
- (2) 「バングラデシュ農村における雇用問題——農業技術変化の雇用吸収効果を中心に」『農業総合研究』42 (1), 1988.
- (3) 「マダガスカルにおける稲作の不振と政策対応」『農業総合研究』42 (1), 1988.
- (4) 「ザンビアにおける経済危機と農業の価格・流通政策」『農業総合研究』42 (1), 1988.
- (5) 「アフリカの食料問題と米——社会経済学的視点から」『国際農林業協力』11 (4), 1989.
- (6) 「灌漑開発と制度的諸問題」佐藤 宏 (編) 『バングラデシュ——低開発の政治構造』アジア経済研究所, 1990.
- (7) 「農村土地なし貧困層への制度的金融——バングラデシュ・グラミン銀行」『アジア経済』31 (6;7), 1990.
- (8) 「ジャワ農村における農業労働慣行に関する一考察——西部ジャワ州天水田地域の農村調査から」『農業総合研究』44 (3), 1990.
- (9) “Employment Structure and Income Generation,” in T. Kawagoe (ed.), *Role of the Secondary Crops in Employment Generation: A Study in a Rainfed Lowland Village*, CGPRT Centre and BORIF, 1991.
- (10) 『バングラデシュ農業発展論序説——技術選択に及ぼす農業構造の影響を中心に』農業総合研究所, 1993.
- (11) “Toward a Long-term Strategy for Income Generation: Rural Institution and Resource Mobilization,” in *Mid-Term Review of Joint Study on Rural Development Experiment Project*, JICA, 1994.
- (12) 『『緑の革命』と所得分配——バングラデシュの灌漑水市場の経済分析を通じて』『農業経済研究』66 (4), 1995.
- (13) 「村落公共機能の強化をめざして——バングラデシュ農村開発の新戦略」『東南アジア研究』33 (1), 1995.
- (14) 「バングラデシュ農村非制度金融の新動向——階層間金融フローの『逆転』をめぐる」『農業総合研究』49 (3), 1995.
- (15) “Role of the Groundwater Market in Agri-

cultural Development and Income Distribution: A Case Study in a Northwest Bangladesh Village,” (共著) *Developing Economies*, 33 (4), 1995.

- (16) 「小規模インフラ事業にみる行政と村落——バングラデシュにおける事例研究」(共著) 山本裕美 (編) 『経済改革下のアジア農業と経済発展』アジア経済研究所, 1998.
- (17) 「農村開発におけるマイクロ・クレジットと小規模インフラ整備」佐藤 寛 (編) 『開発援助とバングラデシュ』アジア経済研究所, 1998.
- (18) 「ミャンマー乾期灌漑稲作経済の実態——ヤンゴン近郊農村フィールド調査より」(共著) 『東南アジア研究』38 (1), 2000.
- (19) “Credit Flowing from the Poor to the Rich: The Financial Market and the Role of the Grameen Bank in Rural Bangladesh,” *Developing Economies*, 38 (3), 2000.
- (20) 「1990年代バングラデシュにおける地下水市場の変容——非効率の構造と所得分配への含意」『アジア経済』42 (6), 2001.

パトリシオ アビナウレス
Patricio N. ABINALES

1. フィリピン大学 (歴史学・政治学), 1978.
2. コーネル大学 Ph. D. (政治学), 1997.
3. 歴史学, 比較政治学
4. (1) アメリカ植民地主義とフィリピン政治学の社会構築
- (2) フィリピンにおける国家と社会の関係
- (3) ジェンダーと社会暴力
- センター助教授としての3年間は、極めて有意義であった。まず博士論文を加筆・修正し、*Making Mindanao: Cotabato and Davao in the Formation of the Philippine Nation-State* (Ateneo de Manila University Press) を出版し、またアメリカ植民地期の政治形成の研究を継続した。マルコス独裁下の反政府共産運動の起源 (特に南部フィリピンにおけるそれ)、そして、弱い国家構造の下での民主化過程の復元も行った。昨年の研究活動は、*Southeast Asia* 誌の編集者、および *Filipinas: The Journal of the Philippine Studies Group* の書評編集者としての活動によって、補完された。
5. フィリピン大学第三世界研究センター助手、フィリピン大学政治学部助手、フィリピン大学文

学部講師等を経て1998年、オハイオ大学政治学部助教授。1999年、京都大学東南アジア研究センター助教授。

6. (1) "Salipada Pendatun and Muslim Elite Politics in Pre-Martial Law Cotabato, Part 1," *Kinaadman* (Wisdom) (A Journal of the Southern Philippines), 18 (4), 1996.
- (2) *The Revolution Falters: The Left in Philippine Politics after 1986* (編著), Ithaca, New York: Cornell University Southeast Asia Program, 1996.
- (3) "The Church and State and the Church as State in the Philippines: Review Essay," *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, 28 (2), 1997.
- (4) "Salipada Pendatun and Muslim Elite Politics in Pre-Martial Law Cotabato, Part 2," *Kinaadman*, 19 (1), 1997.
- (5) "State Building, Communist Insurgency and *Cacique* Politics in the Philippines," in Paul B. Rich and Richard Stubbs (eds.), *Counter-insurgent States: Guerrilla Warfare and State-Building in the Twentieth Century*, New York and London: MacMillan, 1997.
- (6) "Davao-kuo: The Political Economy of a Japanese Settler Zone in Philippine Colonial Society," *Journal of American-East Asian Relations*, December, 1997.
- (7) *Images of State Power: Essays on Philippine Politics from the Margins*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1998.
- (8) "The Muslim-Filipino and the Philippine State," *Public Policy* (A University of the Philippines Quarterly), August, 1998.
- (9) "Muslim Political Brokers and the Philippine Nation-State," in Carl J. Trocki (ed.), *Gangsters, Democracy and the State in Southeast Asia*, Ithaca, N. Y.: Cornell University Southeast Asia Program, 1998.
- (10) "The Muslim Rebellion Reconsidered," *Philippine Yearbook*, 1999.
- (11) "Filipino Marxism and the National Question," *Filipinas* (A Journal of Philippine Studies, Special Issue on Post-War Filipino Nationalisms, edited by Patricio N. Abinales

and Benito M. Vergara, Jr.), 32, 1999.

- (12) "The Rise and Demise of a Colonial Frontier Society: Davao Americans and the Moro Province," *Kinaadman*, Spring, 1999.
- (13) "Review Essay: *Booty Capitalism: The Politics of Banking in the Philippines*, by Paul D. Hutchcroft. Ithaca and London: Cornell University Press, 1998," *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, Spring, 2000.
- (14) From *Orang Besar* to Colonial Big Men: Datu Piang of the Magindanaos and the American Colonial State, in Alfred W. McCoy (ed.), *Lives at the Margin: Biographies of Obscured Filipinos*, Madison: Center for Southeast Asian Studies, University of Wisconsin, 1999 and Ateneo de Manila University Press, 2000.
- (15) *Making Mindanao: Cotabato and Davao in the Formation of the Philippine Nation-State*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2000.
- (16) *Fellow Traveller: Essays on Filipino Communism*, Quezon City: University of the Philippines Press, 2001.

2. 資料部

北村 由美

1. 関西大学文学部, 1996.
2. 図書館情報学修士 (MLIS), 1999.
3. 図書館情報学
4. (1) オンライン・データベース評価

文献データベースを中心とするオンライン・データベースは、コンテンツが全く同じでも提供者の作成するソフトウェアの違いによって、必要な情報をいか効果的に引き出せるかに違いがでる。近年、大学図書館では高額なオンライン・データベースの整備が進んできているが、それらのパッケージを、インターフェースや検索機能、索引付けの優劣等多角的に検討する方法論ははまだ確立されていない。各図書館にとって、最適なオンライン・データベースを選択するための評価方法の研究を進めている。

(2) 東南アジア諸国における、識字教育およびインフォメーション・リテラシー教育と図書館の役割

図書館には資料の保存の機関としての役割と、社会教育施設としての役割がある。社会教育施設としての主な役割として、従来から行われてきた識字教育と、その延長線上にあるインフォメーション・リテラシー教育への図書館の関与が挙げられる。東南アジア諸国における、図書館システムの構造と位置付け、そして各種図書館が識字とインフォメーション・リテラシー教育の意味をいかに定義づけ、どのように実践しているかに現在興味がある。

5. Center of Excellence in Disaster Management and Humanitarian Assistance (1999～2000) インフォメーション・アナリストを経て、2001年東南アジア研究センター助手として着任。
6. (1) *Bibliography of Second Language Acquisition*, Kansai University, 1998.
(2) *ASDP/PSI Web Maintenance Manual*, Kapiolani Community College, 1999.
(3) 「インフォメーション・アナリストの役割——Center of Excellence in Disaster Management and Humanitarian Assistanceの情報部門で」『図書館の学校』26, 2002.
(4) “Japanese Librarians Learning from American School Librarianship,” (共著) *Multimedia Schools*, 9 (3), 2002.

木谷 公哉

1. 京都産業大学工学部, 1998.
2. 京都産業大学工学研究科修士, 2000.
3. 形状処理工学
4. (1) ネットワークシステムの管理・運営
(2) 異なるネットワークを結ぶネットワーク設計
(3) 支援プログラム開発
異なるセキュリティポリシーを持ったネットワーク同士を、ユーザにとって違和感なく利用できるように設計し、ネットワーク間の移行がユーザにとって設定を変更することなくできるように、情報技術に関する既存並びに新技術を用いて設計・運営していけるようなシステムを構築することを目標としている。

さらに、東南アジア研究において必要な情報収集、発信等を支援するために、主に Web 上で動

作する種々のプログラムを開発し、ネットワーク設計・運営に必要なポリシー整理や移行するためのプログラム開発を行っている。さらに様々なプロジェクトに必要な情報技術を分析し、技術提供を行っている。

その他センタースタッフが快適にインターネットサービスを利用するための様々なネットワーク資源管理・運営を行っている。またセンタースタッフの研究促進のために、コンピュータ端末のトラブル対処を行い、情報発信のための機器を提供している。

5. 1995～2000年京都産業大学でコンピュータ補助員として大学内のコンピュータに関するサポート業務に携わる。1997年同大学で緊急災害情報システムの構築を担当する。1999年京都大学東南アジア研究センターに非常勤職員として採用され、情報処理室の改善、サーバーの入れ替え、セキュリティ対策を施すとともにスタッフへのコンピュータサポートを行った。2000年センター助手になってからは、全部屋に対して高速なネットワークの供給を行い、海外連絡事務所のネットワーク環境を改善し、様々なサーバーの導入・管理・運営、および安全なネットワークの構築を行いつつ、センタースタッフが快適にネットワークサービスを利用できるように情報処理サポートを行い、スタッフの研究に必要な情報技術サポートも同時に行っている。
6. (1) 「サーバーへの遠隔操作マニュアル」京都産業大学, 1998.
(2) 「画像のフォーマット変換」京都産業大学論文, 1998.
(3) 「電子メールソフト (Outlook Express, Eudora, ALmail) のインストールと設定マニュアル」京都産業大学, 1999.
(4) 「VAIO PCG-C 1 R の一般的な使用方法マニュアル」東南アジア研究センター, 1999.
(5) 「動画画像の再構築」京都産業大学修士論文, 2000.
(6) 「サーバーへの暗号化を用いた遠隔操作マニュアル」東南アジア研究センター, 2000.
(7) 「情報処理室の過去と未来」東南アジア研究センター, 2000.
(8) 「KUINS-III ネットワーク設計」東南アジア研究センター, 2001.

米沢真理子

1. 京都大学文学部, 1972.
2. 京都大学文学修士, 1974.
4. (1) 季刊誌『東南アジア研究』の特質と変遷
編集に携わっている『東南アジア研究』の地域研究誌としての特質とその変遷を, 出来る限り明らかにしたい。
- (2) 高度情報化時代における出版
近年加速度的に高度化した情報通信・処理システムによって, 出版も大きく変化せざるを得ない。活字から電子メディアへの移行は, 単に表現手段の変化というにとどまらず, 思考や記憶の様式, 他者との関係性, 世界観を根底から変えてしまう構造的な転換である。勿論, 印刷物が完全に廃棄されて電子メディアへ移るという発展段階的なプロセスではなく, 一方に他方が重なっていく重層的なプロセスではあるが, 電子メディアによる情報交換・情報発信を視野に置きつつ, 出版の現状と問題点について考えてみたい。
5. 1974年, 京都大学東南アジア研究センターに文部事務官として採用される。1987年, 資料部編集室助手に配置換, 現在に至る。

ドナ アモロソ
Donna J. AMOROSO

1. ラファイエット大学 (国際事情), 1982.
2. コーネル大学 Ph. D. (東南アジア歴史学), 1996.
3. 歴史学
4. (1) マレーシアおよびフィリピンにおける国家の歴史
(2) マレーシアにおける民族主義とポスト・コロニアル
2000～01年, 東南アジア地域に関する新たな

刊行物の必要性を同地域の識者と検討確認し, Caroline Hau氏とともにインターネットジャーナル *Kyoto Review of Southeast Asia* の構想を練った。2002年3月に発刊の運びとなった同誌のエディターとして企画・編集に携わっている。

2001年には Kasian Tejapira 著 *Commodifying Marxism* (英文地域研究叢書 No. 3) と Patricio Abinales 著 *Making Mindanao* を編集した。また, 第3回国際マレーシア学会で “British Malaya and the American Colonization of the Southern Philippines: Politics and Culture in the Malay World” を発表した。現在, 博士論文 “Traditionalism and the Ascendancy of the Malay Ruling Class in Colonial Malaya” を改訂中である。

5. 1990～92年コーネル大学講師, 1992～93年コーネル大学刊 *Southeast Asia Program Publications* の編集助手, 94年同上編集長代理。1994～99年ライト州立大学助教授, 2000～01年センター外国人研究員。2001年センター教務補佐員に採用され, 現在に至る。
6. (1) “Dangerous Politics and the Malay Nationalist Movement, 1945–47,” *South East Asia Research*, 6 (3), 1998.
(2) *State and Society in the Philippines*, (共著) New York: Rowman and Littlefield, forthcoming.
(3) “Inheriting the ‘Moro Problem’: Muslim Authority and Colonial Rule in British Malaya and the Philippines,” in Julian Go and Anne Foster (eds.), *The American Colonial State in the Philippines in Global Perspectives*, Duke University Press, forthcoming.

第8章 出版活動

東南アジア研究センターにおけるさまざまな研究活動の成果は、センターが刊行する出版物を通じて発表されている。センターは、1963年以来季刊学術誌『東南アジア研究』を出版し、レフリー制度のもとに学内外の東南アジア研究者の論稿を掲載してきた。2002年3月現在39巻4号(通算159号)を数え、所収論稿は膨大な数に上る。

また東南アジア研究センターでは、東南アジア地域研究の発展に寄与するオリジナルな学術研究の発表の場として、以下の4種類の叢書を刊行している。

叢書名(言語)	出版社
東南アジア研究叢書(和文)	創文社
東南アジア研究叢書(英文) Monographs of the Center for Southeast Asian Studies	University of Hawai'i Press
地域研究叢書(和文)	京都大学学術出版会
地域研究叢書(英文) Kyoto Area Studies on Asia	Kyoto University Press; Trans Pacific Press (Melbourne)

東南アジア研究叢書(和文)は24冊、同(英文: Monographs of the Center for Southeast Asian Studies)は20冊、地域研究叢書(和文)は13冊、同(英文: Kyoto Area Studies on Asia)は3冊を刊行してきた。これまで主としてセンター所員の研究成果の発表の場であったが、2000年4月よりセンター内外を問わず投稿を受け付けている。

研究報告書シリーズは、シンポジウムの報告書、科学研究費補助金による海外学術調査の報告書、その他の研究奨励金を受けて行った研究の報告書、共同研究の中間的な成果、外国人研究員の研究報告書など各種のものを含んでいる。2002年4月現在合計93冊を数える。

さらに、2002年3月よりCOEプロジェクト「アジア・アフリカにおける地域編成」の一環として、東南アジア地域内外の研究者や文化人などによる東南アジア研究の成果をWeb上で公開し、東南アジア地域研究に関する最新情報をレビューするインターネット・ジャーナル(*Kyoto Review of Southeast Asia*)を立ち上げるに至った。

2002年4月現在で、センターが刊行した東南アジア研究叢書(和文、英文)、地域研究叢書(和文、英文)、『東南アジア研究』(38巻3号以降)、研究報告書シリーズおよび*Kyoto Review of Southeast Asia*の一覧を掲げる。なお、『東南アジア研究』23巻までの全所収論文等は『東南アジア研究』別冊(23巻5号)に一括掲載されているので、参照されたい。また『東南アジア研究』の目次情報は国立情報学研究所のホームページ(<http://www.nii.ac.jp/sokuho/>)で検索可能である。

1. 研究叢書等

A. 東南アジア研究叢書 (和文)

1. 棚瀬 襄爾. 1966. 『他界観念の原始形態』
2. 矢野 暢. 1968. 『タイ・ビルマ現代政治史研究』
3. 本岡 武. 1968. 『東南アジア農業開発論』
4. 坪内 良博; 坪内 玲子. 1971. 『離婚——比較社会学的研究』 創文社.
5. 飯島 茂. 1971. 『カレン族の社会・文化変容』 創文社.
6. シュトルツ. 1974. 『ビルマ——地誌・歴史・経済』 野上裕生 (訳). 創文社.
7. 市村 真一 編. 1974. 『東南アジアの自然・社会・経済』 創文社.
8. 石井 米雄 編. 1975. 『タイ国——ひとつの稲作社会』 創文社.
9. 石井 米雄. 1975. 『上座部仏教の政治社会学』 創文社.
10. 本岡 武. 1975. 『インドネシアの米』 創文社.
11. 市村 真一 編. 1975. 『東南アジアの経済発展』 創文社.
12. 口羽; 坪内; 前田 編. 1976. 『マレー農村の研究』 創文社.
13. 西原 正 編. 1976. 『東南アジアの政治的腐敗』 創文社.
14. エクスタイン他 編. 1979. 『中国の経済発展』 市村真一 (監訳). 創文社.
15. 渡部 忠世 編. 1980. 『東南アジア世界——地域像の検証』 創文社.
16. 水野 浩一. 1981. 『タイ農村の社会組織』 創文社.
17. 土屋 健治. 1982. 『インドネシア民族主義研究——タマン・シスワの成立と展開』 創文社.
18. 高谷 好一. 1982. 『熱帯デルタの農業発展——メナム・デルタの研究』 創文社.
19. 小林 和正. 1984. 『東南アジアの人口』 創文社.
20. 石井 米雄 編. 1986. 『東南アジア世界の構造と変容』 創文社.
21. 桜井由躬雄. 1987. 『ベトナム村落の形成——村落共有田=コンディエン制の史的展開』 創文社.
22. 福井 捷朗. 1988. 『ドンデーン村——東北タイの農業生態』 創文社.
23. 口羽 益生 編. 1990. 『ドンデーン村の伝統構造とその変容』 創文社.
24. 山田 勇. 1991. 『東南アジアの熱帯多雨林世界』 創文社.

B. 東南アジア研究叢書 (英文: Monographs of the Center for Southeast Asian Studies)

1. SATO, Takashi. 1966. *Field Crops in Thailand*. Kyoto: CSEAS.
2. WATABE, Tadayo. 1967. *Glutinous Rice in Northern Thailand*. Kyoto: CSEAS.
3. TAKIMOTO, Kiyoshi, ed. 1968. *Geology and Mineral Resources in Thailand and Malaya*. Kyoto: CSEAS.
4. KAWAGUCHI, Keizaburo; and KYUMA, Kazutake. 1969. *Lowland Rice Soils in Thailand*. Kyoto: CSEAS.
5. KAWAGUCHI, Keizaburo; and KYUMA, Kazutake. 1969. *Lowland Rice Soils in Malaya*. Kyoto: CSEAS.
6. MAEDA, Kiyoshige. 1967. *Alor Janggus, A Chinese Community in Malaya*. Kyoto: CSEAS.
7. ICHIMURA, Shinichi, ed. 1975. *The Economic Development of East and Southeast Asia*. Honolulu: University Press of Hawaii.

8. NISHIHARA, Masashi. 1976. *The Japanese and Sukarno's Indonesia: Tokyo-Jakarta Relation, 1951-66*. Honolulu: University Press of Hawaii.
9. ICHIMURA, Shinichi, ed. 1977. *Southeast Asia: Nature, Society and Development*. Honolulu: University Press of Hawaii.
10. KAWAGUCHI, Keizaburo; and KYUMA, Kazutake. 1977. *Paddy Soils in Tropical Asia*. Honolulu: University Press of Hawaii.
11. YOSHIHARA, Kunio. 1978. *Japanese Investment in Southeast Asia*. Honolulu: University Press of Hawaii.
12. ISHII, Yoneo, ed. 1978. *Thailand: A Rice-Growing Society*. Honolulu: University Press of Hawaii.
13. CHO, Lee-Jay; and KOBAYASHI, Kazumasa, eds. 1980. *Fertility Transition of the East Asian Populations*. Honolulu: University Press of Hawaii.
14. KUCHIBA, Masuo; TSUBOUCHI, Yoshihiro; and MAEDA, Narifumi. 1979. *Three Malay Villages: A Sociology of Paddy Growers in West Malaysia*. Honolulu: University Press of Hawaii.
15. CHO, Lee-Jay; SUHARTO, S.; MCNICOLL, G.; and MAMAS, S. G. M. 1980. *Population Growth of Indonesia: An Analysis of Fertility and Mortality Based on the 1971 Population Census*. Honolulu: University Press of Hawaii.
16. ISHII, Yoneo. 1986. *Sangha, State, and Society: Thai Buddhism in History*. Honolulu: University of Hawaii Press.
17. TAKAYA, Yoshikazu. 1987. *Agricultural Development of a Tropical Delta: A Study of the Chao Phraya Delta*. Honolulu: University of Hawaii Press.
18. TSUCHIYA, Kenji. 1988. *Democracy and Leadership: The Rise of the Taman Siswa Movement in Indonesia*. Honolulu: University of Hawaii Press.
19. FUKUI, Hayao. 1993. *Food and Population in a Northeast Thai Village*. Honolulu: University of Hawaii Press.
20. YAMADA, Isamu. 1997. *Tropical Rain Forests of Southeast Asia: A Forest Ecologist's View*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

C. 地域研究叢書 (和文 京都大学学術出版会刊)

1. 坪内 良博. 1996. 『マレー農村の20年』
2. 高谷 好一. 1996. 『「世界単位」から世界を見る——地域研究の視座』
3. 立本 成文. 1996. 『地域研究の問題と方法——社会文化生態力学の試み』
4. 坪内 良博. 1998. 『小人口世界の人口誌——東南アジアの風土と社会』
5. 高谷 好一 編. 1999. 『〈地域間研究の試み〉(上)——世界の中で地域をとらえる』
6. 坪内 良博 編. 1999. 『〈総合的地域研究を求めて〉——東南アジア像を手がかりに』
7. 水野 廣祐. 1999. 『インドネシアの地場産業——アジア経済再生の道とは何か?』
8. 高谷 好一 編. 1999. 『〈地域間研究の試み〉(下)——世界の中で地域をとらえる』
9. 坪内 良博 編. 2000. 『地域形成の論理』
10. 原 洋之介 編. 2000. 『地域発展の固有論理』

11. 加藤久美子. 2000. 『盆地世界の国家論——雲南, シブソンパンナーのタイ族史』
12. 林 行夫. 2000. 『ラオ人社会の宗教と文化変容——東北タイの地域・宗教社会誌』
13. 立本 成文. 2000. 『家族圏と地域研究』

D. 地域研究叢書 (英文: Kyoto Area Studies on Asia)

1. YOSHIHARA Kunio. 1999. *The Nation and Economic Growth: Korea and Thailand*. Kyoto: Kyoto University Press.
2. TSUBOUCHI Yoshihiro. 2001. *One Malay Village: A Thirty-Year Community Study*. Kyoto: Kyoto University Press; Melbourne: Trans Pacific Press.
3. Kasian TEJAPIRA. 2001. *Commodifying Marxism: The Formation of Modern Thai Radical Culture, 1927-1958*. Kyoto: Kyoto University Press; Melbourne: Trans Pacific Press.

E. その他の公刊図書

1. 講座・東南アジア学 (全10巻・別巻1) 弘文堂.
- 第1巻 矢野 暢 編. 1990. 『東南アジア学の手法』
- 第2巻 高谷 好一 編. 1990. 『東南アジアの自然』
- 第3巻 坪内 良博 編. 1990. 『東南アジアの社会』
- 第4巻 石井 米雄 編. 1991. 『東南アジアの歴史』
- 第5巻 前田 成文 編. 1991. 『東南アジアの文化』
- 第6巻 土屋 健治 編. 1990. 『東南アジアの思想』
- 第7巻 矢野 暢 編. 1992. 『東南アジアの政治』
- 第8巻 吉原久仁夫 編. 1991. 『東南アジアの経済』
- 第9巻 矢野 暢 編. 1991. 『東南アジアの国際関係』
- 第10巻 矢野 暢 編. 1991. 『東南アジアと日本』
- 別巻 矢野 暢 編. 1992. 『東南アジア学入門』
2. 講座・現代の地域研究 (全4巻) 弘文堂.
- 第1巻 矢野 暢 編. 1993. 『地域研究の手法』
- 第2巻 矢野 暢 編. 1994. 『世界単位論』
- 第3巻 矢野 暢 編. 1993. 『地域研究のフロンティア』
- 第4巻 矢野 暢 編. 1993. 『地域研究と「発展」の論理』
3. 東南アジア研究センター 編. 1997. 『事典東南アジア——風土・生態・環境』 弘文堂.
4. TSUCHIYA, Kenji. 1992. *Demokrasi dan Kepemimpinan: Kebangkitan Gerakan Taman Siswa*. Jakarta: Balai Pustaka. (東南アジア研究叢書 (英文) No.18, *Democracy and Leadership: The Rice of the Taman Siswa Movement in Indonesia* のインドネシア語訳)
5. ISHII, Yoneo. 1993. *Sejarah Sangha Thai: Hubungan Buddhisme dengan Negara dan Masyarakat*. Bangi, Selangor, Malaysia: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia. (東南アジア研究叢書 (英文) No.16, *Sangha, State, and Society: Thai Buddhism in History* のマレー語訳)

6. NISHIHARA, Masashi. 1993. *Sukarno, Ratna Sari Dewi, dan Pampasan Perang*. Jakarta: Pustaka Utama Grafiti. (東南アジア研究叢書 (英文) No. 8, *The Japanese and Sukarno's Indonesia* のインドネシア語訳)
7. FURUKAWA, Hisao. 1994. *Coastal Wetlands of Indonesia: Environment, Subsistence and Exploitation*. Kyoto University Press.
8. UEDA, Yoko. 1995. *Local Economy and Entrepreneurship in Thailand: A Case Study of Nakhon Ratchasima*. Kyoto University Press.

2. 『東南アジア研究』(38 巻 3 号から 39 巻 4 号まで)

各報告は、コード番号・著者名・報告表題・掲載頁の順に配列されている。コード番号は、4, 5 桁目の数字が巻数を、3 桁目の数字が号数を、そして、1, 2 桁目の数字が報告の番号を表している。

38 巻 3 号 [Vol. 38, No. 3] 2000 年 12 月 [Dec. 2000]

38301 Prachaiyo, Buared. Farmers and Forests: A Changing Phase in Northeast Thailand. 3-178.

書評 [Book Review]

38302 小林 知 [Kobayashi, Satoru]. David M. Ayres, *Anatomy of Crisis: Education, Development, and the State in Cambodia, 1953-1998*. 179-180.

現地通信 [Field Reports]

38303 坪内良博 [Tsubouchi, Yoshihiro]. 2000 年のパシルマスから [From Pasir Mas, Kelantan in the Year 2000]. 181-188.

38304 西淵光昭 [Nishibuchi, Mitsuki]. タイとマレーシアの食文化 [Eating Habits in Thailand and Malaysia]. 189-190.

38 巻 4 号 [Vol. 38, No. 4] 2001 年 3 月 [March 2001]

38401 Sukanya Nitungkorn. Higher Education Reform in Thailand. 461-480.

38402 Arai Kenichiro. Only Yesterday in Jakarta: Property Boom and Consumptive Trends in the Late New Order Metropolitan City. 481-511.

38403 島上宗子 [Shimagami, Motoko]. ジャワ農村における住民組織のインボリューション——スハルト政権下の「村落開発」の一側面 [Organizational Involution in Rural Java: A Characteristic of "Village Development" under the New Order]. 512-551.

38404 青山和佳 [Aoyama, Waka]. ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程——経済的福祉とエスニック・アイデンティティの観点から [The Adaptive Process of the Bajaus in Davao City: Economic Well-Being and Ethnic Identity]. 552-587.

38405 武島良成 [Takeshima, Yoshinari]. 南機関小稿 [An Essay on Minami Kikan]. 588-600.

書評 [Book Review]

38406 井上 真 [Inoue, Makoto]. Jérôme Rousseau, *Kayan Religion: Ritual Life and Religious Reform in Central Borneo*. 601-602.

現地通信 [Field Report]

- 38407 田中耕司 [Tanaka, Koji]. ラオスではなぜ植物油が利用されないのか [Why Is So Little Edible Plant-oil Used in Lao Cooking?]. 603 - 605.

39 巻 1 号 [Vol. 39, No. 1] 2001 年 6 月 [June 2001]

〈特集〉 20 世紀メコン・デルタの開拓

[Land-Use Development in the Mekong Delta in the Twentieth Century]

- 39101 高田洋子 [Takada Yoko]. 序 [Preface]. 3-9.
- 39102 高田洋子 [Takada Yoko]. 海岸複合地形における砂丘上村落の農業開拓 [A History of Agriculture in the Coastal Complex Area of the Mekong Delta]. 10 - 40.
- 39103 高田洋子; ピエール・ブロシュ [Takada Yoko; and Brocheux, Pierre]. 広大低地氾濫原の開拓史——植民地期トランスバサックにおける運河社会の成立 [Newly Born Rural Society and French Estates in the Transbassac under French Domination: An Era of Expansion and Collapse]. 41 - 69.
- 39104 Kono Yasuyuki. Canal Development and Intensification of Rice Cultivation in the Mekong Delta: A Case Study in Cantho Province, Vietnam. 70 - 85.
- 39105 桜井由躬雄 [Sakurai Yumio]. メコンデルタ地方都市近郊村落の農業変容——ロンアン省タンアン市カインハウ社ジン集落の事例 [Socio-Agricultural Transformation in a New Delta Village in the Mekong Delta: The Case of Khanh Hau Village, Tan An City, Long An Province]. 86 - 99.
- 39106 大野美紀子 [Ohno Mikiko]. カインハウ行政村における集団化の事例報告——集団化期における家庭経済の変化について [Report on the Process of Collectivized Farming in Khanh Hau Village: Changes in Household Economy during Collectivization]. 100 - 119.
- 39107 岩井美佐紀 [Iwai Misaki]. 集団化解体以降のカインハウ社における農業賃労働の実態に関する一考察 [A Study of Agricultural Wage-Labor in Khanh Hau Commune since Decollectivization]. 120 - 136.
- 39108 Tanaka Koji. Agricultural Development in the Broad Depression and the Plain of Reeds in the Mekong Delta: Conserving Forests or Developing Rice Culture? 137 - 150.

書評 [Book Review]

- 39109 吉原久仁夫 [Yoshihara Kunio]. Lee Kuan Yew, *From Third World to First: The Singapore Story, 1965-2000*. 151 - 153.

39 巻 2 号 [Vol. 39, No. 2] 2001 年 9 月 [Sept. 2001]

- 39201 Porphant Ouyyanont. The Vietnam War and Tourism in Bangkok's Development, 1960 - 70. 157 - 187.
- 39202 Soda Naoki. The Malay World in Textbooks: The Transmission of Colonial Knowledge in British Malaya. 188 - 234.
- 39203 田中 求 [Tanaka Motomu]. ラカイン山脈におけるサラインチン人集落の再建と焼畑によるコメ自給システム [Self-sufficiency with Shifting Cultivation in a Reestablished Salain Chin Village of the Rakhine Mountains]. 235 - 257.
- 39204 呉 偉明; 合田美穂 [Ng Wai-ming; and Goda Miho]. シンガポールにおける寿司の受容——寿司のグローバルイゼーションとローカライゼーションをめぐって [The Popularization of *Sushi* in Sin-

gapore: Issues in Globalization and Localization], 258 – 274.

書評 [Book Reviews]

39205 左右田直規 [Soda Naoki]. 杉村美紀, 『マレーシアの教育政策とマイノリティ——国民統合のなかの華人学校』 [Miki Sugimura, *Educational Policy and the Minority in Malaysia: Chinese Schools under the Policy of National Integration*]. 275 – 276.

39206 濱元聡子 [Hamamoto Satoko]. Roger Tol; Kees van Dijk; and Greg Acciaioli, eds, *Authority and Enterprise among the Peoples of South Sulawesi*. 277 – 283.

現地通信 [Field Report]

39207 海田能宏 [Kaida Yoshihiro]. バングラデシュ住民参加型農村開発行政支援プロジェクト (PRDP) [My View of Development: Administrative Support Program for Rural Development in Bangladesh]. 284 – 296.

39 巻 3 号 [Vol. 39, No. 3] 2001 年 12 月 [Dec. 2001]

39301 Rambo, A. Terry; and Tran Duc Vien. Social Organization and the Management of Natural Resources: A Case Study of Tat Hamlet, a Da Bac Tay Ethnic Minority Settlement in Vietnam's Northwestern Mountains. 299 – 324.

39302 Jamieson, Neil L. Some Things Poetry Can Tell Us about the Process of Social Change in Vietnam. 325 – 357.

39303 Liu, Hong. Social Capital and Business Networking: A Case Study of Modern Chinese Transnationalism. 358 – 383.

39304 Porphant Ouyyanont; and Tsubouchi Yoshihiro. Aspects of the Place and Role of the Chinese in Late Nineteenth Century Bangkok. 384 – 397.

39305 Patma Vityakon. The Role of Trees in Countering Land Degradation in Cultivated Fields in Northeast Thailand. 398 – 416.

39306 Ubukata Fumikazu. The Expansion of Eucalyptus Farm Forest and Its Socioeconomic Background: A Case Study of Two Villages in Khon Kaen Province, Northeast Thailand. 417 – 436.

書評 [Book Reviews]

39307 Rambo, A. Terry. Bui Minh Dao, *Trong trot Truyen thong cua cac Dan toc tai cho o Tay Nguyen* [Traditional Agriculture of Indigenous Ethnic Groups in the Central Highlands of Vietnam]. 437 – 438.

39308 玉田芳史 [Tamada Yoshifumi]. Daniel Arghiros, *Democracy, Development and Decentralization in Provincial Thailand*. 439 – 444.

現地通信 [Field Report]

39309 阿部茂行 [Abe Shigeyuki]. バンコク雑感 [On Bangkok]. 445 – 446.

39 巻 4 号 [Vol. 39, No. 4] 2002 年 3 月 [March 2002]

39401 吉原久仁夫 [Yoshihara Kunio]. 東南アジアの経済発展メカニズム——なにが分かっているのか [The Mechanism of Economic Development in Southeast Asia: What Do We Know?]. 449 – 477.

39402 柿崎一郎 [Kakizaki Ichiro]. 立憲革命後のタイにおける道路整備 (1932 ~ 1941 年) ——最初の道路

建設計画の策定 [Road Improvement after the Constitutional Revolution in Thailand, 1932 – 1941: Establishment of the First Road Construction Program]. 478 – 508.

State Formation in Comparative Perspective

- 39403 Shiraishi Takashi. Preface. 509.
39404 Abinales, Patricio N. Introduction. 510 – 512.
39405 Callahan, Mary P. State Formation in the Shadow of the Raj: Violence, Warfare and Politics in Colonial Burma. 513 – 536.
39406 Boudreau, Vincent G. State Building and Repression in Authoritarian Onset. 537 – 557.
39407 Go, Julian. Modeling the State: Postcolonial Constitutions in Asia and Africa. 558 – 583.
39408 Reno, William. Armed Rebellion in Collapsed States. 584 – 603.
39409 Abinales, Patricio N. American Rule and the Formation of Filipino “Colonial Nationalism.” 604 – 621.

書評 [Book Reviews]

- 39410 Rambo, A. Terry. Dang Nghiem Van, *Ethnological and Religious Problems in Vietnam*. 622 – 624.
39411 葉山アツコ [Hayama Atsuko]. Michael L. Ross, *Timber Booms and Institutional Breakdown in Southeast Asia*. 625 – 628.

現地通信 [Field Report]

- 39412 立本成文 [Tachimoto Narifumi Maeda]. 京都便り [Global Area Studies News from Kyoto]. 629 – 632.

3. 研究報告書シリーズ

研究報告書シリーズは、センターが単行本として出版したもので、シンポジウムの報告書、科学研究費補助金による海外学術調査の報告書、その他の研究奨学金を受けて行った研究の報告書など、各種のものを含んでいる。既刊のものを以下に年度順にあげる。

1. KAWAGUCHI, Keizaburo, ed. 1965. *Rice Culture in Malaya*, Symposium Series No. 1.
2. INOKI, Masamichi, ed. 1966. *Japan's Future in Southeast Asia*, Symposium Series No. 2.
3. FUJIOKA, Yoshikazu, ed. 1966. *Water Resource Utilization in Southeast Asia*, Symposium Series No. 3.
4. HIGASHI, Noboru, ed. 1968. *Medical Problems in Southeast Asia*, Symposium Series No. 4.
5. 市村 真一 編. 1975. 『稲と農民』
6. ICHIMURA, Shinichi, ed. 1977. *Preliminary Report on Role of Education in the Rural Development of Southeast Asia: Thailand and Malaysia*.
7. ICHIMURA, Shinichi, ed. 1979. *Econometric Models of Asian Countries I*.
8. ICHIMURA, Shinichi; and MIZUNO, Koichi, eds. 1979. *Ecology, New Technology, and Rural Development in Thailand and Malaysia* (with Special Reference to the Role of Education).
9. ICHIMURA, Shinichi, ed. 1980. *Econometric Models of Asian Countries II*.

10. TSUBOUCHI, Yoshihiro; NASRLIDDIN, Iljas; TAKAYA, Yoshikazu; and RASJID, Hanafiah A., eds.
1980. *South Sumatra, Man and Agriculture*.
11. WATABE, Tadayo, ed. 1981. *Report of the Scientific Survey on Traditional Cropping Systems in Tropical Asia*, Part 1: *India and Sri Lanka*, Part 2: *Indonesia*.
12. MATTULADA; and MAEDA, Narifumi, eds.
1982. *Villages and the Agricultural Landscape in South Sulawesi*.
13. TAKAYA, Yoshikazu; and Narong THIRAMONGKOL.
1982. *Chao Phraya Delta of Thailand* (Asian Rice-Land Inventory: A Descriptive Atlas, No. 1).
14. 渡部 忠世 編. 1982. 『南西諸島農耕における南方的要素』
15. FUKUI, Hayao; KAIDA, Yoshihiro; and KUCHIBA, Masuo, eds.
1983. *A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand* (An Interim Report).
16. THAN TUN, ed. 1983. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885*, Part One, *A. D. 1598-1648*.
17. JAYAWARDENA, S. D. G.; and MAEDA, Narifumi, eds.
1984. *Transformation of the Agricultural Landscape in Sri Lanka and South India*.
18. Boonyawart LUMPAOPONG; Jitti PINTHONG; Chavalit CHALOTHON; and KAIDA, Yoshihiro.
1984. *Chiang Mai-Lamphun Valley, Thailand* (Asian Rice-land Inventory: A Descriptive Atlas, No. 2).
19. MATTULADA; and MAEDA, Narifumi, eds.
1984. *Transformation of the Agricultural Landscape in Indonesia*.
20. TSUCHIYA, Kenji, ed. 1984. "States" in Southeast Asia, from "Tradition" to "Modernity."
21. FUKUI, Hayao; KAIDA, Yoshihiro; and KUCHIBA, Masuo, eds.
1985. *A Rice Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand* (The Second Interim Report).
22. THAN TUN, ed. 1985. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885*, Part Two, *A. D. 1649-1750*.
23. THAN TUN, ed. 1985. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885*, Part Three, *A. D. 1751-1781*.
24. KATO, Tsuyoshi; MUCHTAR, Lutfi; and MAEDA, Narifumi, eds.
1986. *Environment, Agriculture and Society in the Malay World*.
25. TANAKA, Koji; MATTULADA; and MAEDA, Narifumi, eds.
1986. *Environment, Landuse and Society in Wallacea*.
26. THAN TUN, ed. 1986. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885*, Part Four, *A. D. 1782-1787*.
27. THAN TUN, ed. 1986. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885*, Part Five, *A. D. 1788-1806*.
28. 高谷 好一 編. 1986. 『東南アジア伝統農業資料集成』第1巻.
29. 渡部 忠世 編. 1986. 『日本農耕文化の展開と系譜——島の視点から』
30. EZAKI, Mitsuo, ed. 1987. *Development Planning and Policies in ASEAN Countries*.

31. THAN TUN, ed. 1987. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Six, A. D. 1807-1810.*
32. 田中 耕司 編. 1987. 『東南アジア伝統農業資料集成』第2巻.
33. JAIM, W. M. H. *et al.* 1987. *Review of Literature* (JSARD Working Paper No. 1)
34. HUQ, Muhammad Ammer-Ul. 1987. *Review of Literature on Planning Studies in Bangladesh* (JSARD Working Paper No. 2).
35. SOLAIMAN, M. 1987. *Review of Literature: Institution Building* (JSARD Working Paper No. 3).
36. NOMA, Haruo; and CHAKRABORTY, Ratan Lal, eds. 1987. *Selections of Records on Agriculture, Land Tenure and Economy of Mymensingh District, 1787-1866* (JSARD Working Paper No. 4).
37. THAN TUN, ed. 1988. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Seven, A. D. 1811-1819.*
38. TAKAYA, Yoshikazu, ed. 1988. *Madagascar: Perspectives from the Malay World.*
39. 高谷 好一 編. 1988. 『古代稲作農耕の学際的研究』
40. 柴山 守 編. 1988. 『東南アジア学研究支援：多言語テキスト処理システムの研究』
41. KUMAGAI, Toru; and KAIDA, Yoshihiro. 1988. *Gobarchitra Village and Chandpur Irrigation Project* (JSARD Working Paper No. 5).
42. FUKUI, Hayao; KAIDA, Yoshihiro; and KUCHIBA, Masuo, eds. 1988. *A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand* (The Third Interim Report).
43. THAN TUN, ed. 1988. *The Royal Order of Burma, A. D. 1598-1885, Part Eight, A. D. 1819-1853.*
44. Aris PONIMAN; 高谷 好一. 1988. 『伝統農業フィールドノート集』第1巻.
45. SAKURAI, Yumio; and NITTA, Eiji, eds. 1988. *Primitive Agriculture in Viet Nam and Japan I.*
46. 桜井由躬雄; 新田 栄治 編. 1988. 『日本・ベトナム初期農耕比較論 II』
47. YOSHIHARA, Kunio, ed. 1989. *Oei Tiong Ham Concern: The First Business Empire of Southeast Asia.*
48. TSUBOUCHI, Yoshihiro, ed. 1989. *The Formation of Urban Civilization in Southeast Asia.*
49. YOSHIHARA, Kunio, ed. 1989. *Thai Perceptions of Japanese Modernization* (Published in association with Falcon Press Sdn. Bhd., Kuala Lumpur).
50. SAKURAI, Yumio. 1989. *Land, Water, Rice, and Men in Early Vietnam: Agrarian Adaptation and Socio-Political Organization* (Translated by Thomas A. Stanley).
51. Marasri SIVARAKS, compiled. 1989. *Catalog of Thai Cremation Volumes in the Charas Collection.*
52. THAN TUN, ed. 1989. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Nine, A. D. 1853-1885.*
53. THAN TUN, ed. 1990. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Ten, Epiloge, Glossary and Index.*
54. YOSHIHARA, Kunio, ed. 1990. *Japan in Thailand* (Published in association with Falcon Press Sdn. Bhd., Kuala Lumpur).

55. 田中 耕司 編. 1990. 『東南アジア伝統農業資料集成』第3巻.
56. NAI PAN HLA. 1990. *An Introduction to Mon Language.*
57. TSUBOUCHI, Yoshihiro, ed. 1991. *The Formation of Urban Civilization in Southeast Asia 2.*
58. 坪内 良博 編. 1991. 『集落人口の性格と変動に関する比較社会学的研究』
59. 高谷 好一 編. 1991. 『フロンティア空間としての東南アジア』
60. 田中 耕司 編. 1991. 『東南アジア伝統農業資料集成』第4巻.
61. 深見 純生 訳. 古川 久雄 編. 1991. 『ジャワ・マドゥラ古代遺跡・遺物目録』
62. 古川 久雄; 渡部 武 編. 1993. 『中国先史・古代農耕関係資料集成』
63. 田中 耕司 編. 1994. 『東南アジア海域世界の森と海』
64. Sujin BUTDISUWAN. 1995. *Cumulative Index for Thai Book Collection (1989–Jan. 1995) in the Library of the Center for Southeast Asian Studies Kyoto University.*
65. FUKUI Hayao, ed. 1995. *Cross-Border Perspectives from Thailand and Malaysia.*
66. FUKUI Hayao, ed. 1996. *Transformation of Agriculture in Northeast Thailand.*
67. Phongpharn LAWANANONT. 1996. *List of Thai Books of the Center for Southeast Asian Studies Library.*
68. ZAWAWI IBRAHIM, ed. 1996. *Mediating Identities in Changing Malaysia.*
69. ROHAYA UMAR. 1997. *Senarai Perolehan Perpustakaan 1997: Bahasa Indonesia dan Malaysia.*
70. KATO, Tsuyoshi, ed. 1997. *Studies on the Dynamics of the Frontier World in Insular Southeast Asia.*
71. TSUCHIYA, Kenji; and KATO, Tsuyoshi, eds. 1997. *An Integrated Study on the Dynamics of the Maritime World of Southeast Asia.*
72. Kanchanaporn CHITSANGA. 1997. *List of Thai Books of The Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University No. 15.*
73. HAYASHI, Yukio, compiled. 1998. *Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia vol. 1: Papers presented at the "International Co-Workshop on the Projects of 'Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia (CSEAS, Kyoto University)' and 'Social and Cultural History of the Tai Peoples (Chulalongkorn University),'” Chiang Mai, Thailand, March 28–29, 1998.* Bangkok: CSEAS, Kyoto University Bangkok Office.
74. SAULIAH Saleh. 1998. *Daftar Buku-Buku Tentang Indonesia dalam Bahasa Indonesia Koleksi Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University.*
75. Amphorn WONGTHANGSAWAT. 1999. *List of Thai Books of Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University.*
76. Amphorn WONGTHANGSAWAT. 1999. *Subject Headings of Thai Publication in the Library of Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University.*
77. 玉田 芳史 編. 1999. 『ニティ選書』
78. FUKUI, Hayao, ed. 1999. *The Dry Areas in Southeast Asia: Harsh or Benign Environment.*

79. BACHTAR, Mulni Adelina. 1999. *Daftar Pengadaan Bahan Pustaka 1999 Bahasa Indonesia dan Bahasa Malaysia*.
80. BACHTAR, Mulni Adelina, compiled. 1999. *Women Development in Southeast Asia: A Bibliography*.
81. HAYASE, Shinzo; NON, Domingo M.; and ULAEN, Alex J., compiled. 1999. *Silsilas/Tarsilas (Genealogies) and Historical Narratives in Sarangani Bay and Davao Gulf Regions, South Mindanao, Philippines, and Sangihe-Talaud Islands, North Sulawesi, Indonesia*.
82. Vasin CHOOPRAYOON. 2000. *Library Acquisition List: Thai Materials*, No. 17.
83. Vasin CHOOPRAYOON. 2000. *Thai Material Database Management System in the Library of the Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University*.
84. CHE PUTEH ISMAIL. 2000. *Library Aquisitions List Bahasa Indonesia and Bahasa Malaysia*.
85. CHE PUTEH ISMAIL, compiled. 2000. *Bahasa dan Kesusasteraan Melayu Sebuah Bibliografi 1990–1999*.
86. Kannikar LINPISAL. 2001. *Library Acquisition List: Thai Materials*.
87. Kannikar LINPISAL. 2001. *Standardized Romanization of Thai Government Agency Names in Thai Publication Titles*.
88. LYE Tuck-Po, ed. 2001. *Orang Asli of Peninsular Malaysia: A Comprehensive and Annotated Bibliography*.
89. Sompong CHAROENSIRI. 2001. *Database Management Systems for Thai Collection in the Center for Southeast Asian Studies (Library) Kyoto University*.
90. LENG Ten Moi. 2002. *Online Cataloging of Indonesian and Malaysian Materials: An Input Manual*.
91. 田中 耕司 編. 2002. 『フロンティア社会の地域間比較研究』
92. HAYASHI Yukio; and Yang GUANGYUAN, eds. 2000. *Dynamics of Ethnic Cultures Across National Boundaries in Southwestern China and Mainland Southeast Asia: Relations, Societies, and Languages (中国西南地区与東南亞大陸跨境民族文化動態)*. Chiang Mai: Ming Muang Publishing House.
93. HAYASHI Yukio; and Aroonrut WICHENKEEO, eds. 2002. *Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China*. Bangkok: Amarin Printing and Publishing.

なお、センター関係者の研究報告書のうち、センター以外の機関により出版されたものを、参考までに掲げておく。

JSARD Publication Series (Published by JICA Bangladesh Office)

1. JSARD Editorial Committee, ed. 1988. *Proceedings of the Mid-term Review Workshop of JSARD, January 24, 1988 (JSARD Publication No. 6)*.

2. KAIDA, Yoshihiro; and HOSSAIN, S. M. Altaf, eds.
1988. *Gobarchitra Village in Chandpur* (JSARD Publication No. 7).
3. UCHIDA, Haruo *et al.*, eds. 1988. *Jawar Village in Kishoreganj* (JSARD Publication No. 8).
4. HOSSAIN, S. M. Altaf. 1988. *Evolution of Cropping Systems in My-mensingh and Comilla Regions* (JSARD Publication No.12).
5. NISHIMURA, Hiroyuki *et al.*, eds.
1989. *Three Villages in Comilla* (JSARD Publication No. 9).
6. MAHARJAN, Keshav Lall. 1989. *Phanishair Village in Chandpur* (JSARD Publication No.11).
7. CHAKRABORTY, Ratan Lal; and NOMA, Haruo, compiled.
1989. *Select Records on Agriculture and Economy of Comilla District, 1782-1867* (JSARD Publication No.13).
8. MAMUN, Abdullah Al. 1989. *Agro-ecological Studies of Weed in Bangladesh* (JSARD Publication No.14).
9. NOMA, Haruo; and CHAKRABORTY, Ratan Lal, compiled.
1990. *Select Records on Agriculture, Land Revenue, Economy and Society of Noakhali District, 1849-1878* (JSARD Publication No.15).
10. KAIDA, Yoshihiro, ed. 1990. *Tetulia Village in Bogra* (JSARD Publication No.16).
11. MAMUN, A. Al. 1990. *Agro-ecological Studies of Weeds and Weed Control in a Flood-prone Village of Bangladesh* (JSARD Publication No.17).
12. JSARD Editorial Committee, ed.
1990. *Proceedings of the Second JSARD Workshop, Held on August 20-21, 1989* (JSARD Publication No. 18).
13. KAIDA, Yoshihiro, ed. 1990. *A Review of Related Studies* (JSARD Publication No.19).
14. KAIDA, Yoshihiro *et al.*, eds. 1990. *Key Questions and Issues from Village-Based Studies, 1986-1989* (JSARD Publication No.20).

JSRDE Publication Series (Published by JICA Bangladesh Office and BARD)

1. BEGUM, Saleha, ed. 1994. *Report of the Seminar on Mid-Term Review of Joint Study on Rural Development Experiment Project, 22nd December 1993.*
2. ISLAM, Md. Mazharul *et al.*, eds.
1994. *Report of the Workshop on Mid-Term Review of Joint Study on Rural Development Experiment Project, 7th and 8th December 1993.*
3. BEGUM, Saleha *et al.*, eds. 1995. *Annual Report 1993-94: Joint Study on Rural Development Experiment Project.*
4. ISLAM, Md. Mazharul *et al.*, eds.
1995. *Report of the Workshop on Final Review of Joint Study on Rural Development Experiment Project, 9th to 11th July.*
5. KAIDA, Yoshihiro; and BEGUM, Saleha, eds.
1995. *Report of the Final Seminar on Joint Study on Rural Development Experiment (JSRDE) Project, 21st November 1995.*

6. KAIDA, Yoshihiro *et al.*, eds. 1995. *Final Report on Joint Study on Rural Development Experiment (JSRDE) Project.*

4. *Kyoto Review of Southeast Asia*

2002年3月に創刊されたインターネット・ジャーナル *Kyoto Review of Southeast Asia* (<http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp>) の第1号は特集記事として Power and Politics をとりあげた。以下はその全体の内容である。

Issue 1 / Power and Politics / March 2002

Editorial

Power and Politics Donna Amoroso

Review Essays (インドネシア語, 英語, フィリピン, 日本語, タイ語の要約有)

Provincializing Thai Politics Nishizaki Yoshinori

Writing Reformasi Khoo Boo Teik

Of Strongmen and the State Caroline S. Hau

Studies in the Political Economy
of New Order Indonesia Vedi R. Hadiz

Features

Interview Marites Dañguilan Vitug on Philippine Politics and Journalism

Report The Human Rights Collection at the University of the Philippines

Profile Area Studies at Kyoto University

Conference Report Southeast Asian Studies in Asia

Colin Nicholas Orang Asli Leadership in Malaysia

Reprints

Voice of the Poor Vanida Tantiwitthayaphithak

On the Horns of a Dilemma Kasian Tejapira

Thaksinomics Nidhi Aeusrivongse

The Cost of Race Economics Sumit Mandal

In Golkar's Grip Mochtar Pabottingi

Police and Society Ongkhokham

Books of Note

M. Dawam Rahardjo, *Independensi Bank Indonesia dalam Kemelut Politik* (Bank Indonesia's independence in political turbulence) by Wahyu Prasetyawan

Murai Yoshinori *et al.*, *Soeharto Family no Chikuzai* (The Soeharto family's accumulation of wealth); Akio Satoko, *Unmei no Chojyo—Soekarno no Musume, Megawati no Hansei* (Destiny's eldest daughter: The early life of Soekarno's daughter Megawati); Kano Hiroyosi, *Indonesia Ryoran* (Indonesia in confusion) by Murakami Saki and Morishita Akiko

Ji Giles Ungpakorn, Suthachai Yimprasert *et al.*, *Atchayagam Rat Wigrit Garnpienpaeng*

(Crimes committed by the state: Transition in crisis); Chothira Sattyawattana, *Grid Plae Glad Nong Grong Khwarmjing Doi Phuying Hok Tula* (The women of 6th October: Sifting out the truth by opening old wounds) by Viengrat Nethipo

Iwasaki Ikuo, *Ajia Seiji wo Miru Me—Kaihatsu Dokusai kara Shiminsyakai e* (How to look at Asian politics: From development dictatorship to civil society) by Aizawa Nobuhiro

I. Wibowo, ed., *Harga yang Harus Dibayar: Pergulatan Etnis Cina di Indonesia* (The price to be paid: The ethnic Chinese encounter in Indonesia) by Menny Subianto

Nemoto Kei, *Aung San—Fuuin Sareta Dokuritsu Biruma no Yume* (Aung San: The locked away dream of Burmese independence); Takahashi Akio, *Gendai Myanmaa no Nooson Keizai—Ikoo Keizaika no Noomin to Hi-Noomin* (Myanmar's village economy in transition: Peasants' lives under the market-oriented economy) by Nakanishi Yoshihiro

Karl M. Gaspar, *The Lumad's Struggle in the Face of Globalization* by Ishii Masako

Ikehata Setsuho and Ricardo Trota Jose, eds., *The Philippines Under Japan: Occupation Policy and Reaction* by Temario C. Rivera

Ban Kah Choon, *Absent History: The Untold Story of Special Branch Operations in Singapore 1915–1942* by Onimaru Takeshi

Kaneko Yoshiki, *Mareshia no Seiji to Esunishiti—Kajin Seiji to Kokumin Togo* (Politics and ethnicity in Malaysia: Chinese politics and national integration) by Shinozaki Kaori

Francis Loh Kok Wah and Kho BooTeik, eds., *Democracy in Malaysia: Discourses and Practices* by Donna Amoroso



京都大学東南アジア研究センター要覧 平成14年度

2002年8月1日 発行

編集・発行者 京都大学東南アジア研究センター
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
電話 075-753-7300 ファックス 075-753-7350
<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>

印刷 明文舎印刷株式会社
〒601-8316 京都市南区吉祥院池ノ内町10

©京都大学東南アジア研究センター 2002
ISBN4-901668-04-8

